
霊夢の身体をばくれいむ

中華妖精

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

霊夢の身体をばくれいむ

【Nコード】

N0364Q

【作者名】

中華妖精

【あらすじ】

おっす！俺は博麗霊夢だ。なんかしらんが憑依しちゃった。とりあえず、自分の好きなように振舞ってこの人生をやっていかうと思ってるのさ。（この話は作者の妄想で出ています。矛盾などが気にならない人はどうぞ）

ブログっぽいもの（前書き）

こんにちは、中華妖精です。

霊夢に憑依ってあんまり見かけませんよね？考えていたらワクワクしてしまっで。

いやしかし書いてみたは良いものの、あまり詳しくかけないんです。キャラ崩壊著しいですよ。

それでもよろしければ、どうぞ読んでみてください。

ブローグっぽいもの

「oh…」

古めかしい寝室の鏡面に映る自分の姿を見て、思わずそんな風に呟いていた。

なにこれ。

なにこれ？

「はくれい……れいむ…？」

その名前をもつ人物は、俺を映す鏡に映っていた。

肩まで伸びる黒く短い後ろ髪に、もみあげ…とっていいのか、ほおあたりに垂れる髪のに、包むように赤い髪留め…なんていうんだか、そんなものがついていて、反対側のほおに垂れる髪のにも同じようなものがついていて。頭の後ろには赤い大きなリボンがあり、そこからポニーテールのように纏められた髪のに垂れていた。瞳の色はやや赤みがあった黒色で、着ているものは巫女服。当然のごとく腋の部分がなし。袖は別途、赤く細い紐で取り付けられていた。

あつてはいけないことだった。

なにせ、鏡の前にいるのは俺であって、そもそも俺は男で、
という
か霊夢って存在しているわけがなくて…。

そんな風に混乱する俺の頭のうえに、ピカリと電球が光った。

「夢か」

なんだそうか。驚かせるなよ、と胸を撫で下ろ…やわらかい…だ
と…

なんだこれ。

胸だコレ。

ふーん、そう。胸、ねえと幼さを残す少女の声で呟きつつ、寢室を
出て、外に面した襖を力任せにすばぁん！と開いた。

「どーいうこつたばっきゃろおおおおお！！！！」

夕暮れの彼方に声は響いていき、鳥っぽい生き物が鳴きわめきなが
ら木を揺らし葉を散らせて飛び立っていく。

脳裏に見知らぬ男が爽やかな笑みを浮かべてサムズアップをしてい
るという意味不明なものを浮かべながら、大口を開けたまま動かな
くなる俺であった。

夢だと言つてよかあさん。

心の内で思ったその言葉に答えてくれるものなど存在しなかった。
だから、俺はいったん口を閉じて、鼻で息を吸い込んで、

「誰がかあさんかあああああああつ……！」

その声は空しく、オレンジ色の空に吸い込まれていった……。

ブログっぽいもの（後書き）

しかし、わからない。全部。書き方だとか、進め方だとか。それでも続けていきたいと思っておりますので、できたら応援よろしくお願いします。

俺の名前は博麗霊夢（前書き）

連続投稿。

どうしよう、前の話を短編で投稿してしまった。
消しちゃダメだったかな……
いやしかし間違えていたし……
なにはどうあれ第一話です。
どうぞ読んでいってください

追記

修正しました。

俺の名前は博麗霊夢

状況確認をした。

結果わかったことがいくつか。

どうやら俺は博麗霊夢に憑依、してしまったらしい。

そしてここは幻想郷。あの幻想郷である。こないだはあれほど行きてえなあなんて思っていたが、いざ来てみると空恐ろしい思いしかない。

俺が今いる所は博麗神社。こうなってしまった以上はもう俺の寢床である。ちなみにさつき賽銭箱を見てきたが葉っぱしか入ってなかった。

それと、今は何年か……いや、何季か、の方が正しいか。とにかく、時間の事である。

第118季、月と秋と木の年。ちょいと蔵をあさっていたら年表っぽいのが出てきたから調べてみた。

確か、118季って旧作の異変と新しい方の最初の異変、紅魔郷の内容の異変があつたはずだ。

旧作の方は全然わからないし紅魔郷とかなんて体験版しかやったことない俺にとつて、ちよつとわからない事ばかりだ。

いや、わからないのはほぼ旧作の方で、新しいほうのは二次創作やらネットの知識がかなりあるな。

まあとにかく、わかったことはそれぐらいで、あとは新しい方の異変つつーのはまだ起こっていないらしい。

まだ混乱しているせいか、物事をうまくまとめられない。いや、俺はもともとそういうのは苦手だから、しょうがないか。

「じゃーあれだ、回想だかいそー」

鈴を転がしたような音色を奏でるだなんて陳腐な言葉しか思い浮かばないが、そんな綺麗な声で、俺は呟いた。

鏡の前で、腋を強調するポーズをとりながら。

…思った以上に霊夢かわいい。あんまり興味なかったのに。実際見てみるとこれだ。

陶磁器のような白い肌、艶のある髪、凜とした表情、強い意志の光がとる…ようにみえる瞳、その他にも褒めたいところは沢山あるのだが、いかんせん俺の語彙が少なすぎる。

まー、とかく霊夢はかわいい！ていうか俺かわいい！なんていう俺きもい！

「じゃなかった、かいそーかいそー、ふう…」

大げさな仕草で額を拭う。なんというか、おかしいのだ。

平常心が保てないというか、不安が拭い切れないというか、胸がざわざわするというか。

そういったものを振り払うために、実際に頭を振って結った髪を揺らし、俺は回想に浸った。

「よつ、と」

目の前に積み重なった古く傷んだ冊子を纏めてどかして、一息ついた。

雑多なものがそこらじゅうに積み重なるここは、博麗神社の蔵だ。未だ混乱を拭い切れない俺は、とにかく動こう、まずは今何がどうなっているのか、つまりは身の回りの状況などを把握しようと神社内をうろろろとしていた。

そのなかで見つけたのがこの蔵だった。古いものが積み重なっているここには、何か今の状況を説明できるような、もしくは時期などがわかるだろうと、蔵についていた古びた鍵を叩き壊して侵入したのであった。

蔵の中には、手入れのされていないものたちが乱雑に積まれていた。少し動かせば埃が舞うのを見れば、霊夢がここにあまり出入りしていないことがわかる。

そんなふう to 物を動かしては、読めそうなものを見つけて、もしくは手がかりになりそうなものを手で取って調べていた。

そんな時だった。

ずきりと、頭が痛んだ。

「なん、だ……？」

思わず頭を抑える。ぐらりと身体が傾いて、慌てて足を出して踏みとどまる。

一体なんだ、ともう一度眩こうとした時、強烈なめまいが襲いかかってきた。

ぐるんと世界が回るような、平衡感覚が完全に無くなってしまう程の。

足が地についているという感覚がなくなり、酷い吐き気が襲いかか

ってくる。

思わず手をつこうとして、どたりと倒れこんだ。上からどさどさ何かが降ってくる。

ずきんずきんと頭が痛み、脳がはちきれそうになってしまふ。記憶が、思い出が、雪崩のごとく怒涛に流れ込んできた。

博麗霊夢の記憶だった。

幼いころから今に至るまでの、記憶。何を感じたか何を思ったか、どうしてそういう行動をしたのかなんてことから、霊術の類の経験扱い方妖怪の倒し方。

何が好きか、何が嫌いか。

どういう人物に出会い、どういったことを感じてきたか。

それらが唐突に俺の記憶と同化して来たのだった。

一瞬後には、冷たい床の感覚が戻ってきて、ゆっくり立ち上がれば崩れた冊子の山が見える。

ズキズキと痛む頭を抑えて、よたよたと蔵を出る。それから、這う這うの体で寝室へと戻ってきた。

「...と、言うわけだ」

誰にもなく呟いて、ちょいっとポーズを変える。腋の強調はやめずに、見せ方を変える。

やばいかわい。俺最高じゃね？なんて。

あのあとしばらく眠って、真夜中に目を覚ました時には、多少混乱は残っていたもののすっきりしていた。

……お、思い返してみれば、冊子で調べたんじゃなく霊夢の記憶でわかったことだったな、ほとんど。

それに霊夢の記憶が流れ込んできたせいか、俺の元々の記憶が薄れてしまった。

といっても、きっとそれは俺が混乱しているからであって、時間の経過とともにどうにかなっていくだろう。

霊力の類でもった光が部屋を明るく照らす中で、ただ俺は鏡の前でポーズをとり続け、うーい、なんて呟いていた。

「もうねよっかね。なんか疲れたし」

数十分もポーズをとり続けてようやく、俺は眠ることにした。しかし、先程から胸の内でもくもくと何かが大きくなっていくのが

気にかかる。

それがわからないから、なおさらのこと。

「ま、いいでしょ。気にしない、気にしない」

そんな楽天的な呟きで思考を打ち消して、そのままの格好で床に
いた。

部屋の電気を消して、目をつむった。

この時の俺はまだわかっていなかった。その楽天的な考えは、俺の
考え方ではなく、霊夢の考え方だなんてことを…。

俺の名前は博麗霊夢（後書き）

消したことを考えるとすごいドキドキしてしまう。
とんでもなく悪いことをしてしまったような。
実際悪いことをしてしまった……？

今後の方針

「はあ…」

縁側に座って溜息をつく。投げ出した足をぶらぶらと揺らしながら、手に持っていた湯呑みを口に持っていていき、傾けた。緑色の熱い液体を口に含んで、飲み下す。

「…ふう」

もう一つの溜息と共に、熱い吐息を吐き出した。眉を顰めて、青空を見上げる。というか、睨む。

なんというか、憂鬱だった。
なんというか、不快だった。

こつ、言葉では表し難いような何か…わだかまりのようなものが、小骨がのどに引っかかっているようにというか、胸の内に溜まっているというか…。

「…つくはあ」

三度目の溜息。

何だろうな、こう……駄目な気がするんだ。

このままじゃ不味い気がする。

しかし何故そう思ってしまうのかわからない。

「つつても、何時までもこうやってしけた面してる訳にもいかねえ
しなあ」

容姿に合わない口調でそう言って、ぐいっとお茶を飲み干す。それから、手について立ち上がった。

「気晴らしに境内でも掃除すつか」

そんなことを呟きつつ、俺は家屋の中へと引っ込んでいった。

ザッ、ザッ、と境内に響く連続した音。

それは、むすつとした表情の巫女が何時ものように竹ぼうきで石畳を掃く音だった。

気だるげにほうきを左右に振る姿は本当に変わり映えしないものである。

十人に聞けばその内九人がかわいいと答えてくれそうな顔を歪めているなんて事は、それこそ四六時中の事であった。

そんないつもと同じ彼女なのだが、ひとつだけ、いつもと違うものが彼女にあった。

彼女の中身である。なんて言っても、肉体的な違いではなく、意識的な意味での違いだった。

ザッ、ザッ、と葉もゴミも無い場所をてきとーに掃く。

ただ手を動かしているだけで気晴らしになるから、今みたいにもやもやしている時には掃除つていうのもいいかもしれない。

今度から何かに詰まったときはこうしてみよう、と思いながら、なんとなしにほうきを回転させた。

「よっ、と」

まるで曲芸師、というのはいささか言い過ぎだろうが、そんな気分でほうきを空へと放り投げながら、考え事を開始した。

何事も考えることは大事である。といっても、まずは今朝のことを思い返すことから始める。情報を纏める事もまた、大切なことだ。

「んっ……」

ぐぐいと伸びをして布団から出たのは、霊夢になる前では想像も出ないくらい時刻であった。

朝の肌寒さに肩を抱いて身を震わせつつ、寢室を出て顔を洗いに行く。

昨日神社内を歩き回ったからと言って間取りを完全に把握したわけでもない俺にとって、頼りになるのは霊夢の記憶になるのだが、寝ぼけた頭では思い返すのは難しいだろう。

なんて心配は心配はなかった。身体が覚えていたらしく、意識することなく足が進んだ。

そうしてついたのは、何と云えばいいのか……取り敢えず洗面所とでも言っておく。

そこらへんの名称が曖昧なのか、この古めかしい木板の壁に囲まれた部屋の本当の名前が思い出せない。

硬い石の床に大きな瓶があり、なかにはなみなみと水が張られていた。霊夢の記憶では、これで毎朝顔を洗ったり口をゆすいだりしていたらしい。だから、ここを洗面所と呼んでも差し支えはないだろう。

ばしゃばしゃと水が無駄遣いしつつ、その冷たさを存分に顔にたた

きつける。それから口をゆすいで、ぺつとはきだしてから、顔や手を拭くものを探す。

タオルタオル……と視線をさまよわせるが、もちろんそんなものがあるはずもなく、事実、タオルはなかった。

代わりに壁に掛けてあったタオルっぽいものを使い、顔やらを拭いた。

タオルっぽいものを壁にかけなおして、すっかり冷めた目を腕で拭いて、それから少し寝癖のついた髪を撫でつけながら部屋を後にして、寝室へ戻った。

頭の後ろで結ばれている大きなリボンをといて、畳にぽっぽり投げる。

纏まっていた髪はさらりと流れて、固まることなく元のかたちに戻っていった。

指で空いてもちっともひっかからないのは、当たり前的事なのだろうか。

布団をたたむ。よいしょと声をだして、掛布団やら敷布団やらを纏めてたたんで、持ち上げる。

それを押し入れにしまっていると、ふと、そーいや昨日風呂入ってねーや、と思い出した。

急ぎ風呂に入るための着替えを用意する。

今着ているものと全く同じようなものを箆笥から出して後ろに放る。下着も同じように。

まだどこか寝ぼけていたせいか、それともはやく風呂入りてえと急いでいたせいか、女性の下着に触れるということへの感慨は特になかった。

霊夢と同化しているから、なんて理由が一番しっくりきそうである。

脱衣所で手早く服を脱ぎ、木で編まれたかごに投げ入れる。

つながっていない袖を腕から抜き取り、もう片方の袖と纏めてかごへ。

真つ赤なスカートを腰から落として、同じく。

それから、下着。ちなみに上は二次創作などの霊夢でよく見かけるサラシなどは巻いてなく、かわりに紙をそのまま着ているかのような質感のものを着用していた。思い返してみると、これは霊夢自身が作ったもので、護符やらが編み込まれているものらしく、かなり防御力があるみたいだ。他にも多数術式が編み込まれていて、上半身だけでなく身体全体を脅威から守ってくれるらしい。

そんなものでも風呂に入る時には邪魔なだけなので、とつと脱いで、かごの横に置いた。防水処理的なことがなされているせいで、これは洗えないみたいだ。それに作るのがとても面倒で、いつも清めてから着まわしていたみたいだ。

それから上質な手触り・肌触りなぱんつを脱いでかごに入れて、風呂場へと飛び込んだ。

後で洗濯しなきゃなー、あー、洗濯機ないんだっけーとか考えながら、カラスの行水もびっくりなスピードで湯浴みし、一瞬で身体中くまなく洗ってとつと出る。

脱衣所は寒かった。

ああそうそう、胸の大きさね、中くらいだったよ。

…今言う事じゃないけど、なんか言わなきゃいけないって気がしたんだ。

脱衣所で、これまた素早く服を着込む。壁にかかっていた鏡を見て、リボンを結ぶ。

それから、自然な動作で印を組み、清めの術を使い、身と防護服を清める。無意識の事だったので、今自分が何をしたのかに気付くこともなく、風呂入る意味はあるのだろうか、いやある！だなんて咳いていた。

清涼感あふれることを除けば昨日と同じ格好になるが、全く気にせず、取り敢えず洗濯は洗濯物が乾きやすい昼にやることにして、朝食をとることにした。

そうそう、リボンをいじっている時に気が付いたのだが、リボンの中にお札が入っていた。ちょっとびびった。

朝食に魚の干物を焼いたものと、速攻で作った味噌汁と、少しかたくなった白米を食べた。

和食最高。でも一人の食卓って意外とさびしいもんだ。

ちなみに干物は台所の食材が置いてあるところに紐で纏められて入っていた。沢山あるのはいいけど何の魚かわからなかったことがちょっと不安だ。

幻想郷に海はないのだし、川魚なんだろう、たぶん。

白米は昨日の残りで、味噌汁は俺だって作れるので作った。味が濃い目なのは俺の嗜好だ。

野菜？食わんよ。俺はあんまり好きじゃない。霊夢は好きだったみたいけど。

ん？じゃあ今の俺なら食えるのかな。

食べ終わった後はカチャカチャと食器を洗って（もちろん水道なんてなかった。面倒くさかったとだけ言っておく）、食器をかたす。西洋風の食器とかがあって、時代まざってんな、とか思った。

それから食後に茶を作って縁側に移動し、その後は気晴らしに掃除を開始、と。

「で」

考えることは、と。

俺が何か術使ってたのは思い出したから、俺にもそういうことが楽々できるんだという事はわかった。

あとは、そうだな。今後の方針でもいくつか考えるか。

その一、今後の方針。

原作？前だっちゆうことはわかってるんだから、どう振る舞うかを考える。

もちろん、俺のままでいいし、原作知識だなんてアドバンテージがほしいのなら霊夢のふりをしたっていい。そのことに別段抵抗があるわけでもないし。

つつても正確な原作の情報なんて知らないのだけれど。

その二、身の振り方。

そのどちらを選んだとしてもこのまま生活していくには金が必要。歴代巫女の遺産なんて物々しいものも存在しているが、そのほとんどが博麗の秘宝やらなんやら金にならないものばかりだ。

思い返してみれば霊夢は金にてきとーだったから、今現在懐の状況が芳しくない。

なので金が必要なのだが、寶銭は期待できないし、そもそもそれは違うことに使うものであるからして。

妖怪退治とかが要になるだろうことは目に見えてる。が、俺に妖怪が倒せるかどうか問題になってくる。

いくら霊夢がチート巫女で、その才能や経験、能力が俺のものになつていようと、本番ではどう転ぶかはわからないのだから。

何かを殺すことにしたって、空を飛ぶ程度の能力で威圧感やらそういうことに対する感情からは逃れられたとしても、俺の記憶からくる感情つてもものもある。

殺して、霊夢が何とも思わなくとも、そんな時にどういう感情を抱くか想像できる俺には、少なくとも感情を抱かずにはいられないだろう。

殺すことに慣れてはいけない、なんて言葉もあるのだし。

でもまあ、きつと力に溺れればそんなこと気にも留めなくなるのだろつし、慣れてしまつかもしれないし、思ったよりも何も感じないかもしれない。実際やってみなければわからない話だ。

その三、強さ。

あれだ、せつかくこんな世界に来たんだし、出来るならとびっきりの強さがほしい。

どんなことで危険に身を晒すかもわからんし。ていうかこれから怒涛の異変地獄だし。

幸いこの身は霊夢のものだ。修行だとかしなくとも内に秘める強大な霊力と手腕、鋭すぎる勘などが、ゆるぎない強さを約束してくれている。

幻想郷のパワーバランスに位置する大妖怪たちに単身向かって行ってもたぶん勝てる。スペルカードルールもあるし。鬼なんかと素手で殴り合うことになったらすぐさま死ぬだろうけど。

まあ、余程のこと、例えば俺が尻込みするだとかさえなければ、最強になれるだろう。さらに…。

天才×修行＝無敵！！

こういう方程式が目浮かぶようだ。

天才霊夢が修行をすればどうなるだろうか。

きつと凄く強くなるだろう。やってないからわからないけど。

霊夢は努力だとか修行だとか嫌いだったみたいだけど、今の俺にはそういうものは関係ない。

俺だって努力とかは嫌い、というか苦手だけど、好奇心の方が勝る。弾幕出したい。

ほづきを放り投げることをやめて、再び石畳を掃き始める。

その顔には笑みまで浮かべて。

弾幕だとか異変だとか考えていたら、少し楽しくなってきたのだった。

この世界が危険、そう考えてみると、霊夢に憑依したのはラッキー

だった。

努力せず得られる強さ。努力して得られる最強の座。最高だ。気分が高揚してくる。

結局原因がわからなかった不安やわだかまりが消えて、しまいには歌なんかを口ずさみながら、ほうきを動かし続ける。

そんな俺の身の振り方が決まるのは、直ぐ後の事であった。

今後の方針（後書き）

主人公最強もの、になるのかどうか。

霊夢との融合 1（前書き）

難産だった…。

何故か、凄く長い話になってしまいました。なので二つに分けてお
ります。

そして、ぐだぐだ。

本編まで駆け足で行きたいものです。

「おさいーせんーはーっ 三百円いーっじょおーっでー」

上機嫌で歌を歌う。空は青く、どこまでも澄み渡っている。

清々しい気分だった。先程とは段違いの、いい気分。

竹ぼうきを力強く石畳に擦り付け、擦れる音を伴奏に歌を歌う。

掃除しているのは、神社の裏手、外の世界の反対側。幻想郷へと向かう麓の森への道だ。

上へ上へと昇る太陽が神社を正面から照らしていて、ここは日陰になっただけで快適だった。

とっても春の陽気、日に当たってもぽかぽかとして気持ちがいいだろう。

「ねこみこれいーむ なにーしーてーる ねこみこれいーむ」

目をつぶって頭を揺らして、リズムをとる。

上機嫌巫女と名付けて一枚の絵にしたくなるような光景である。掃除よりも歌うことに集中しているのはご愛嬌だ。

と、森の上から大きな影がさつと現れた。

その影は、気配を察して歌うことを止めた俺の背後に降り立った。突風のように風が吹き荒れ、思わず髪を抑える。

ばたばたとスカートがはためいて捲れそうになったので、慌ててほうきを放って抑えた。
風はすぐに止んだ。

「よーっすれーむ、遊びに来たぜー」

後ろから聞こえてきたのは、そんな能天気そうな声であつた。

くるりと振り返ってみてみれば、そこにいたのはなんと、霧雨魔理沙だつた！！

初の原作キャラとの遭遇に、しかし何かを思う前に、咄嗟に俺は、

「こんにちは」

と、こっちも能天気そうな声で挨拶をしていた。

黒い服に、白いエプロン、大きなとんがり帽子に、手に竹ぼうきを持った霧雨魔理沙そのひとは、片手で帽子を押さえて、その顔に啞然とした表情を張り付けていた。

おや、どうしたんだこいつは、と思って見てみると、きりさめ…ああもう面倒くさい、魔理沙でいいか、魔理沙は大げさに頭を振って、「聞き違いだ…」と呟いた。

挨拶を返してこないのも、一人芝居でもしているようなその振る舞いも、なんだかすごく失礼なことに思えるのだが、そこらへんは気にしないでおく。

それにしても、魔理沙だ、魔理沙。『だぜ』だぜ、あの『だぜ』！生だよ、本物。生の魔理沙、略してナマリサ！

魔理沙についても二次創作の知識が多く締めていて、本当の性格がどうだか知らないが、そんなことだってどうでもいい。会えただけ

で、さらに気分がよくなった。

それになんだ、長い金髪を風にたなびかせて難しい顔をする魔理沙は、この俺ほどでないにしろ、可愛かった。

うん、可愛かった。

そういや遊びに来たとか言ったな、じゃあここにずっと立たせておくわけにもいかないな、とほつきを拾いながら思っ、魔理沙の方を見やる。

難しい顔をしていたが、顔を合わせるなり、ニカリと笑みを浮かべた。

どきっ！……とはしなかったが、可愛いな、とは思った。

おっとそうだった、はやく家に招くか。

「魔理沙、お茶でも飲ましてやつから、さっさと中に入ろっぜ」

にこりと笑いながら、明るい感じに言う。

すると魔理沙は、え、とでも言うように目を見開いて、びしりと固まった。

ええ、今の言葉のどこに固まる要素が……ああ、口調か。おもつきし素だった。

こほん、と咳払いをしてから、もう一度笑顔で言い直す。

「よく来たわね魔理沙。お茶でも出すから中に上がっていきなさいな」

そうすると、魔理沙はいくらか表情を崩して、お、おう！！！いただくぜ！！といいながら、さっさと一人で行ってしまった。

その背を追うと、小さく「やっぱり聞き間違いか……？でも霊夢からお茶を出すなんて言うのはおかしいぜ…」と呟いているのが聞こえてきた。

ああそう、まあ確かに言ったことはないけど、そう考えるのって少しひどくないか。

まあそれでもいいことで、今はお茶を用意することだけを考えることにした。

俺も家に戻り、居間にいる魔理沙と二言三言言葉を交わして台所へと向かうさなか、ふと魔理沙に対する感情が浮かび上がってきた。

めんどくさいやつ。

こないだもここに来て、お昼をたかって来た。そのあと勝負を挑まれて、弾幕決闘をやった。私の勝ち。また遊びに来ると言って帰っていった。またご飯をたかりに、の間違いでしょ。めんどくさいやつ。

……でもまあ、いると退屈しない奴、かもしれない。

感情というより、記憶だった。なんというつんでれいむ。

それにしても、魔理沙に会ったから思い出したのか……？なんだ、何か引っかかるな。

「…ま、いいだろ」

急須と二人分の湯呑みをお盆に乗せて、居間に戻る。魔理沙は、卓袱台の前に胡坐をかいて座っていて、腕を組んで神妙な顔つきで考え事をしているようだった。

こと、こと、と湯呑みを置いて、急須を傾け、お茶を注いでいく。濃くならないように、交互に注ぐ。これであってたっけ。

霊夢の記憶を探ってお茶の淹れ方を思い出そうとしてみたが、よく思い出せなかった。

別にいいか、お茶の淹れ方くらい。

入れ終わると、魔理沙はさっと目の前の湯呑みを攫うように取って、ぐいっと一気に飲んだ。

うわあ、熱くないのかな…。

正座して、両手で湯呑みを取り、俺もぐいっと飲む。

喉が焼け付くように熱いが、うまい。やはりお茶は熱いうちに飲むもんだ。

湯呑みを持った手を膝元まで下ろし、熱い吐息を吐いた。

ああ、いいなあ。こういう時間は、好きだ。

ちらと魔理沙の方を見やると、こちらを見ていたらしく、視線が合った。

口に湯呑みを当てていた魔理沙は、それをゆっくりと下ろして、卓袱台に置いた。

傍らに置いてある魔理沙が先程までかぶっていた大きいリボンのついたとんがり帽子を弄りながら、言いにくそうに口を開く。

「なあ、霊夢。つかぬ事を伺うが……その、さ」

なんだか煮え切らない様子で、もぞもぞと口を動かす魔理沙。

言うか言うまいか迷っているようにも見えたので、ん？と先を促した。

それでも魔理沙は少し迷っていたようだったが、やがて頭をわしゃわしゃと掻きながら思い切ったように言った。

「さっきの！……さ、私の聞き間違いかもしれないんだけどさ、口調……」

そこまで言って、魔理沙は口を噤んだ。口調、ね。

めんどくせえな、そこに突っ込んでくるか。いや、当たり前的事か。特に魔理沙はよく会うしな、突っ込まずにはいられないわけか。面倒くさいなんて思う傍ら、背中に汗が伝うのを感じた。

冷や汗か。なんでか、魔理沙に悪いことをしたような気分になってくる。

…ああ、悪いこと、してるか。

魔理沙の友達の身体を乗っ取ってしまったようなもんだし。でも別に、俺だってなりたくて霊夢になったわけじゃないんだよなあ。

こうなってしまう前は、俺はごく普通の人間だったわけだし。一日しかたっていないのに、ずっと昔の事に思える普通だった俺を思い出す。

霊夢の記憶に圧迫されているようで、なんだか思い出しづらかったが、それでも思い描く。

子供のころ、ワイングラスにこんぺいとうをいれて食べたことや、小学校の時、運動会の短距離走でおもわず隣を走っていた友達を突き飛ばしてしまったこと、中学の時、転校したばかりの学校でいい友達にめぐりあったこと、高校の時、修学旅行で馬鹿をやったこと、成人式に出なかったこと。

……なんで学校の事ばかり思い出してるんだ、俺は。それ以外にもいろいろあったじゃないか。

しかし思い出せば思い出すほど、凄く懐かしくなってきた、それと同時に悲しくなった。

俺はもう、戻れないのかな。

揺れるお茶にかすかに映る霊夢の姿と、ぱっとしない昔の自分の姿を重ねる。

そうすると余計、悲しくなってきた。

…だけれど。

何を言ったって無駄、何だろうな。

口元に湯呑みを持ってきて、そのまま飲む。

お茶がのどを通る感触をえらく鮮明に感じながら、世界はいつだってそんなものだよ、と自分に語りかけて、フツと笑う。

「な、なんだよ……おかしいぞ、霊夢」

俺が笑ったことに魔理沙が反応した。

おかしいぞ、と言う魔理沙の顔からは、ありありとした不安が見て取れた。

その表情を瞳に映しながら、でも、と俺は心の中だけで呟いた。

俺はさ、夢も希望もなかったけど、それでも昔の自分には未練が…

…多分、ある。

ドン！と、胸の内側から殴られたような衝撃が襲ってきた。

痛みが走り、軽く身体が揺れるが、一体何が起こったかなんて気にすることもなく目をつぶった。

邪魔だな。俺。

ほんとの事言っと未練なんてないし。

正直、必要ないよな。

だったらさ、それだったら。

「おかしいのは当たり前よ。ちょっと悪霊に憑りつかれててね。めんどくさいかぎりだわ」

なんでもないように、そんなことを言った。

魔理沙はぼかんと口をあけて、それから、「冗談…じゃあ、ないのか、と呟くように言った。

でん、と乱暴に湯呑みを置いて、すつくと立ち上がる。

ずかずかと魔理沙に近づいて行って、その胸ぐらをつかんで、引き上げた。

「なっ！なにすんだ霊夢！！」

ぐいと顔を近づける。

鼻同士が付きそうになるくらいまで顔を近づけ、止まった。

「邪魔なんだよ……俺を好きにならない人間はなあ……」

記憶の中にある悪役の表情と声音を精一杯真似る。

台詞はてきとうだ。悪役っぽくさえあればそれでいい。

魔理沙の目の色が変わった。

ぱん！と手をはねられ、突き飛ばされる。

倒れる前に、ふわりと浮いてさっきまで俺が座っていた場所に降りた。

いそいそと帽子をかぶった魔理沙が、敵意のこもった目をこちらに向けてきた。

「本当なのか……霊夢」

まだ信じられないのか、そんなことを言う魔理沙に軽く首をかしげて見せる。

魔理沙。根拠はないけどさ、お前なら俺を消してくれるかもな。そうしたら、霊夢は元通りになるかもしれない。

俺は……どうなるかなんてわからないけど。世の中には必要ない部類の人間だしな、別にいいだろ。

ぱっと、両腕を広げて、不敵な笑みを浮かべる。

「さあ、どうした！！俺を殺して見せろ！！」

口が、勝手に言葉を紡ぎだす。

頭の中がぐちゃぐちゃになってきて、心がかき乱されて。

正直、今自分が何を言ったのかわからなかった。

「っ……！……じゃ、駄目だ。外に……」

顔を青くして、言葉少なに言った魔理沙は、外へと駆ける。

別に俺の迫力にびびったとか、そういうわけじゃないんだろっ、顔が蒼くなっていたのは。

本当に俺……霊夢が憑りつかれているとわかったから、心配でたま

らないとか、多分そんなだ。

ああもう、頭の中がぐちゃぐちゃだ。一体なんだってんだよ。そう思いながらも俺は、魔理沙の後を追って、外へと出た。

俺は、きつと参っていたのだろう。

いきなりこんな状況になって。ポジティブな思考で誤魔化して。どこかで感じる罪悪感を無視して。

だから、やけになっていたのかもしれない。

やけになって、そんなことを言ってしまったのかもしれない。

でも、とにかく俺は、なんとかしたかった。

怖かった。どうしてこうなったかがわからないから。

だから、誰かに、目に見える形で、肌で感じられるもので、何かをしてほしかった。

外へと出た。

目がちかちかして、気持ちが悪かった。

陽炎のように魔理沙がたっていた。

顔が見えなかった。

吐き気がした。胸を抑える。

ドン！と、胸の内側から何かに叩かれたような気がした。

痛みが、意識をはつきりさせてくれる、なんてことはなかった。

さらに目の前が霞んだ。強い衝撃と共に、視界が低くなる。

膝をついてしまったようだ。

魔理沙が駆け寄ってきた。

顔が見えない。

なんて言ってるんだ？何も聞こえないぞ。

……なんだ、まぶたが重いな。

でもま、眠いし……いいか……

霊夢との融合 2

「やっと姿を現したわね。 ったく、私の身体を乗っ取るなんざ一千万年早いのよ」

霊夢の声が、聞こえてきた。

……？俺は、喋ってないのに。

目を開く。

目の前に、不機嫌そうな霊夢が腕を組んでたっていた。

あれ、俺はここににいるのに。

自分の手を見る。

華奢な腕と、白い肌。

間違いなく、俺は霊夢だ。

なのになんで、目の前に霊夢がいるんだ…？

「この悪霊。 とつと私の身体から出ていきなさい」

真っ白な世界。 前後不覚に陥ってしまいそうなその場所に、霊夢の
声が響き渡る。

意味が分からなかった。

一体、何が起こってるっていうんだ。

「あ、くりよう…」

思わず呟いていた。
霊夢は一層眉を顰めて、

「言葉のあやよ。人の身体に乗り移るようなはた迷惑な奴は悪霊と
変わらないわ」

微かに、首を振る。

何言っただ。ていうか、悪霊言っな、死んだことにしてくれるな
よ。俺は死にたくない。

「大体なによ、黙って見ていればやれ修行だのやれ異変だの！妄想
も大概にしときなさいよ！！挙句の果てに、殺してみろおゝ！？ど
の口が言うのよ！！」

怒りにまかせて言葉を飛ばしてくる霊夢に、ただ俺は何もせず。
黙って聞いているだけだった。

気分が晴れなくて。意味が分からなくて。

ああ、いつそのこと神様でも出てきてくれれば、まだ話も分かりや
すいというのに。

「てゆうかなによ、スーパーサイヤジンって！あんたは何を目指し
てんのよ。幻想郷を破壊でもする気？ソングクウだかに憧れるのは
構わないけど、私の身体でやろうとすんなー！！」

ぴくりと震えて、霊夢をはっきりと視界にとらえる。

何故、お前がその名前を知っている。その考えを知っている。

最強巫女になったからには、ネタ技でもか思ったりもしたが、口に出した覚えはない。

…まさか、なんだ、俺の記憶を、霊夢も持っている…？

いや、そもそもこの霊夢はなんだ。というか、異変だと言ったってことは、未来の事まで知ってしまったているのか？それって不味くないか…ああ、妄想だつて切り捨てていたか。

「あんた、おかしいわ。いくらなんでも、幻想郷に詳しすぎる」

その迫力にたじろいだ。何か、何か言わないと、と言葉を探すが、何も思わないうちに、霊夢がこちらへと近づいてきた。

そうして、俺の顔を覗き込んだ。

ハッとするような美貌が、目の前に来る。

どぎまぎすること、数秒。

「ま、いいわ。私がゲームなんだつてことがちょっと信じられなかっただけだし」

ぱつと、霊夢は離れた。

心底ほつとする。なるほど、その口ぶりからして、俺の考えは当たっているらしいな。もう全て知ってしまったているのか…。

しかし、それを知って、霊夢はどうするつもりだ。というか、本当にこの霊夢はなんなんだ。

こうして顔を突き合わせるようになったからには……俺はどうなる？消されるのか？

俺は、死ぬのか。

それはごめんだ、と霊夢を睨み付ける。いつそのこと、先に殺つてしまおうか……

霊夢は、俺が送る殺気を気にした風もなく、あごに手を当てて考え事をしていた。

「ふーん、これが懂れってやつね、で、こっちが愛情。何、なんか変な気持ち。…怒り、これはよく感じるものね。あー腹立つ……不快さ…これも、同じ。悲しみ……へえ、ここまで悲しめるもんなのかしら。ちよっと、苦しいわね…」

何やらぶつぶつと呟いている。

きりつとした顔になったり、かと思えば眉を顰めたり、目を潤ませたり、とろけそうな顔になったり、優しい顔をしたり。

うわ…正直近づきたくないぞ…

しばらくそんな百面相をしていたかと思うと、ほんと手を打って、こちらを見てきた。

距離が、近い。

「あんた、強く感情を抱くのね」

トンとお被い棒を額につけられた。どこから取り出したし。

「この身、あんたに預けることにしたわ。だからあんたも、その身体、私によこしなさい」

はあ？と間抜けた声を出してしまいそうになった。

どういう流れでそうなった。ていうかなんだ、その身体も何も、この身体はお前のもの……いや、渡すつもりはないけど。

「うん、やっぱり被えない。ってことでどうしても私とあんたは二世帯住宅になる必要がある」

それ意味ちがくね？ていうか、さりげなく消し去ろうとすんな……！
ていうか、二世帯住宅？なにそれ。二重人格の間違いじゃ……いや、それはないか。それにしたって、身体をよこせとか。お前本当はそういう趣味を持ってるやつなの？イメージ崩れる。

って、そしたら俺もそうなるのか、同じ体だし、同じ記憶持つてるし。

れずびあん？やだぜそんなの。

「あんたが拒否すりゃあ、私もあんたもここで共倒れる。あんたが承諾すりゃあ、生きながらえる。私だって人並みには生への執着なんてもんがあるのよ。生きるためには、私とあんたがここで術をこれでもかって位強力にきざんで、魂を同化させる必要がある」

ぐりぐりと棒を額に押し付けながら言う霊夢。

その顔は、まさに不満有り、消し去れるなら消し去りたい、とでも言っているかのような表情だった。

ていうかぐりぐりやめて。痛いから。地味に痛いから。

ちゅーか、そーいういみだったのか、アツチの趣味をおもちってわけじゃなかったのね。

いや、それでもわからない。なんだよ、魂を同化させるって。厨二病乙。

「わかる？理解してる？わたしと、あんたが、魂をど・う・かさせんのよ！！」

いや、だから……わからん。一緒になりましょってこと？

それって、俺の身の安全は保障されんの？土壇場になって消し去ったりしないよな。

やられたって、ちょっと俺にはわからんぞ。

「そっついや……ここ、どこ？」

「今それを聞くわけ！？」

ぐりぐりが一層強まった。だあぁ、やめろっつーに！痛い痛い痛い！！

ようやっと棒を離してくれた。ひりひりと痛む額を抑えて、同じ姿なのに容赦ねえな、と思った。

霊夢があたりを見回す。つられて、俺も視線を動かした。

一面、真っ白だった。見ていても、不思議と目が痛くなったりはしないけれど。

「さあて、で？答えは？『はい』か『イエス』か『オッケー』で答えなさい」

霊夢がこちらに向き直って、憮然として言い放つ。

何それ。選択肢ないじゃん。

有無を言わさない雰囲気、霊夢は醸し出していた。その目が語っている。断ったら、叩きのめして無理やりにでも、と。

おもわず能力を操ってその重圧を遮断する。しかし、依然として霊夢の目の色は変わらない。

わかった、わかったよ。世界はいつだってそうだった、だっけか、俺よ。

この提案、受けようじゃないか。そいでさ、深く考えずにさ、勝手気まま、自由奔放にやろうじゃないか。

「わかった！受けよう！その身体貰った！！ただし、俺を前面に出してくれ！俺を主人格にしてくれ！」

大声で叫ぶ。霊夢は、にっこり笑って、

「異論なし。というより混ざるから、全面とかないわよ。じゃ、さっそく術きざむから。ていうかあんたも手伝いなさいよ」

「準備はいい？」

「オラお前えをゆるさねえ」

霊夢の問いに大真面目で答えると、半ば本気ですっぱたかれた。痛い。ちよつとふざけ…真面目に言ったのに、鬼。

「いいわね？じゃ、いくわよ！！」

霊夢が力を始め始めると同時に、慌てて俺も霊力を床に描かれた陣に注ぐ。

これ魔法陣じゃね、と思ったけど口に出したら殴られた。

床が光り、略してゆかり、くつつくくらい近い俺たちを下から照らす。

霊夢が込める力を強くし始めた。それに合わせて、俺も出力を上げていく。

馬鹿げているほどの霊力が陣に注がれていくが、霊夢は注ぐ速度を緩めない。

おいおい、幾ら俺たちの霊力が規格外でも、こんなんじゃあつという間に底を付いちまうぞ！

たたり、と頬を汗が伝った。見れば、霊夢も同じように汗を流していた。

「パワーが足んないわよ！！！！」

霊夢が怒鳴り散らす。おい、こんな近距離で叫ぶな。鼓膜やぶれっだろーが。

「くっ、こ、こわれたってしらねえぞおおあああああああ！！！！」

お返しとばかりに、霊夢の耳元で叫んで、出力を最大にした。

全力全開。本当にこれが、限界だ。陣から発せられる光が強すぎて、段々霊夢の姿が見えなくなってきた。

まだかよ、もう霊力無くなりそうだぞ！

焦りながらも、なんとか力を制御する。一歩間違えれば、それこそ終わりだ。

と、もう一寸先も見えなくなっていた所から、ぬっと腕が二本現れて、俺の頭をがっちり挟み込んだ。

「なん…」

だ、と続けようとして、口をふさがれた。霊夢の唇で。

ええー、聞いてないよ。まさかそういう方法かよ。

そう思うのもわずかの間、目の前が真っ白になって、気が付けば光は霊夢と共に消えていた。

霊力が、全快の時のほぼ二倍近くに膨れ上がっている。もしかして…。

成功したのか！！

「「霊夢と霊夢が合体して」」

(言わせんじゃないわよ!!)

自分が消えなかったことに嬉しくなって、思わず重なったような声でそう言おうとすると、心の中で霊夢の声が響いて遮られた。

成功したのか、と問いかけると、まだよ、と返ってきた。え? どういう意味だ?

(まだ完全に混ざってないのよ、もう少し時間がかかりそうだわ)

ふーん、そうなのかー、と気のない声で返して、なんとなくしに自分の胸をつかんだ。

(おい)

ごめんなさい柔らかいです。

(…まあ、もうあなたの身体でもあるし、別にいいんだけど)

そうですね。で、ここは結局どこなんだ?

(さあ?)

は？いや、さあ？って、霊夢さん！

視線を回す。どこまでも、白い世界が広がっていた。
ここから、出られないってこと？
ちよつと、霊夢！どうやってここから出るんだよ！

(……………気合？)

聞くなよ。

——
む

「ん？」

ふと、声が聞こえてきた。なんだ、とあたりを見回すが、もちろん誰もいない。

「霊夢さん、何か言ったかい？」

(うんにゃ、わたしやあ何も言っていないわよ)

なんだようんにやって。返事？

——いむ……おーい……

「お…お、お、おーっ」

また声が聞こえたかと思ったら、ぐいぐいと身体が引っ張られ始めた。

ハツと目を開くと、目の前には魔理沙の顔があつた。

俺が目覚めたのを見ると、大丈夫か？と優しく問いかけてきながら、俺の額に手を伸ばしてきた。

額に乗っかっていた熱いタオルっぽいなにかをとった魔理沙は、それを桶に張った冷水に入れた。

手について、身を起こす。ここは、神社の寝室、か。窓の外が暗い。俺は、どれくらいの間倒れていたのだろうか。

「大丈夫よ」

答えると、魔理沙はタオルっぽいものを絞りながら、そいつはよかったぜ。いやあ、いきなり倒れるもんだから、驚いたぞ、と言って笑った。

それから、背中に手を添えられて、優しく横たえられる。それから、ずれ落ちていた掛布団をかぶせられた。

「まだ寝てなきゃだめだ、熱がひどかったんだから」

言いつつ、額に冷たいタオルを乗せられた。あ、気持ちいい。

（魔理沙……ずっと看病してくれてたみたいね）

心の中の霊夢が、感慨深そうに呟いた。

そうみたいだな。こりゃあ、魔理沙には頭が上がらないな。

ありがと、と呟くと、困ったときはお互い様だぜ！と元気よく返された。

よく見ると、魔理沙は汗でぐっちよりだった。

どんだけ看病頑張ってくれたんだ……。

魔理沙が、もう一つタオルを取り出して、私の首筋を拭いた。

熱が出ていたという事は、汗もすごかったのだろっ。それを逐一拭いてくれたようだ。

視線を俺の首筋を拭く魔理沙の腕に向けていると、揺れ動く腕の間から、ピンクの布地が見えた。

…？

「魔理沙、これ…」

腕を動かして、その布地をつまむ。薄く伸びるそれは、パジャマだった。

「うあ、だ、だって、お前が凄い汗かくもんだから、あれ濡れちゃったし、それに寝てるんだからっ！！」

顔を真っ赤にしてわたわたと腕を振りそんなことを言う魔理沙。ああ、成るほど。着替えさせてくれたわけだ。

「…ありがと、魔理沙」

もう一度、礼を言う。素直にうれしかった。心の中の霊夢も、嬉しく思っているらしいことが伝わってきた。

「お、おう…」

ぱりぱりと頬を掻きながら、照れたように言う魔理沙は可愛かった。

（魔理沙、悪霊について何も言っていこないわね）

ふと、心の中の霊夢がそういった。

ふむ、なんだろう。ただ言いにくいだけなのかもしれないし、もしかしたらなかったことにしようとしているのかも。

（ちょっと言ってあげなさいよ。悪霊はやつつけたわーって）

うん、いや、その悪霊とやらはここにいるんだけどね。

「魔理沙」

俺の首筋をタオルで拭きながら、ん？と魔理沙が小首をかしげる。
あ、タオルくすぐつたい。

「悪霊、退治したから」

一瞬、何を言われたのか分からなかったらしく、ほけつとした顔で動きを止めていたが、理解にいたり、安堵の表情に変わっていった。

「そ、そうか！良くやった霊夢！流石だぜ！！」

いやー、よかったよかったと笑う魔理沙に、俺も微笑みかける。
ああ、そういえば。

「お風呂入ったら？魔理沙」

言われて、魔理沙は自分が汗びっしょりだという事に気が付いた。
私はいいから入ってきなさい、というと、少しの間渋っていたが、そのままにいるのもなんだったのか、すぐ戻るぜ！と言い残して部屋を出て行った。

ほう、と息を吐く。

あー、なんだか騙してるみたいで凄く嫌な感じだ。

（そんな時代ももうすぐ終わりよ。明日辺りには完全に魂が馴染むだろうから、もうあんたが演技する必要はなくなる…と、思う）

思いつてなんだよ。いやしかし、それが本当ならちよつと助かるな。

（で、まあこうして私と話をすることもできなくなるだろうから、今のうちに一杯お話しましょ。聞きたい事がたくさんあるのよ）

ん、そうだな。退屈だし、話でもするか。で、なんだ？聞きたい事って。

（何で二次創作の私は貧乏なのが多いの？馬鹿なの？死ぬの？）

いや、それを俺に言っただって…。

（何であんたの趣味嗜好は年端もいかぬ少女たちばかりなの？）

そこは聞かないでほしい…。

（ルーミア・チルノ・大妖精……あんたの趣味はわかったから、あんたが気に入ってるやつらがこいつらだったなら納得できるんだけど）

納得すんなよ。あ、いや、納得してください。なんでそんな軽蔑的な感情を充満させんだよ。

（あんたの大本命が大人っぽい紅美鈴……他に、風見幽香って、なんだなの）

そんなこと知るか。俺は何時の間にかそうなってたんだよ。仕方ないだろ。

（ああ、そうそう、魔理沙の事だけどさ）

うん？魔理沙がどうかしたのか？

（すごく、カップリングが多いわよね）

聞かなかったことにしてやる。あんまりそういうことを言うな。

（じゃあ、話は変わるけど、私の…正確には私達の霊力、以前と比べ物にならないことになってるの気付いてる？）

ああ、あれか。

身体の中にある力、霊力を感じる。俺と霊夢がフュージョンした時、
倍に膨れ上がったんだっけか。

元々デカいのに、これでさらに化け物だな。

（お願いがあるんだけど）

どうした？

心の中に、真剣な気持ちが広がっていく。なにか、大事なことを言
うらしい。

（気が向いたらでいいから、お札でも霊力そのままでもいいから、
完璧な分身体を作り出す術を手に入れておきなさい。必要になる時
が、必ず来るから）

意味深に、霊夢は言った。
必要な時って？と返す。

（……私が、暇になったときよ。外でたいじゃないの）

何言っただこいつ。融合したらもうわけらんねーだろうが。

（やってみなきゃわかんないわよ。意識を半分に分ける感じで、さ）

わかった。いつかやっとくさ。

（頼むわよ。ああそれと、超サイヤ人の事なんだけど…）

それがどうかしたのか？

（実はね……）

そうして、おかゆを作った魔理沙が部屋に戻ってくるまで、俺たちはずっと話していた。

その話の中で、重大なことを聞いた。

水道があることとか、レトルトカレーがあるだとか、コンロだってある、とか。

俺は何のために水を運んで……いや、もういい。忘れよう。

「ふー、ふー、ほい、霊夢」

差し出された蓮華を、ぱくりと口に入れる。

魔理沙がふーふーしてくれたおかげで、丁度いい熱さで、おいしかった。

ちなみに、魔理沙は俺とお揃いのパジャマを着ていた。意外と似合う……のか？それ。

梅干しのおかゆを、魔理沙が冷ましてから差し出してくる。それを俺は、ただぱくついていく。

（魔理沙は大変なものを盗んでいきました？）

うんにゃ、まだそこまでいつとらんよ。ていうか、答えはお前が出せ。俺は食べるので忙しいのだ。腕、動くんだけどね。

（はいはい、邪魔して悪かったわね。私はちょっとドラゴンボール思い返してくるわ）

くるわって、どこに行くんだろうな、なんて思いつつ、どんどんおかゆを平らげていく。

そうして、夜は更けていった。

ちなみに、魔理沙は隣に布団を敷いて寝ました。
疲れててすぐ寝ちゃったせいで、何もできな……なんでもない。

霊夢との融合 2（後書き）

当初本物の霊夢を出すなんて展開にするつもりはなかったんですけど、なぜかこうなりました。

おかしいな……。

ちなみに心の中の霊夢が出てくるのは次話までと予定しております。それ以降はもう、話すことはなくなるでしょう。

ただ、もしかしたらいつか再び会いまみえるときが来る、かもしれない。

道中ですらない(前書き)

ただ魔理沙と朝ご飯を食べる話。
短いです。

わーい、10000pv突破したよー。

道中ですらない

早朝。

空がまだ白くなり始まる前に、俺は目を覚ました。

ぼおーっとした頭のまま身を起こし、隣に顔を向ける。

そこには、何もなかった。

…？と、何か違和感を感じて、首をかしげた。

（魔理沙なら、ちょっと前に起きて布団をかたして行っちゃったわよ）

うわ、と声を上げてびっくりする。

なんだなんだと必死に頭を働かせると段々と思い出してきた。

今の声は、俺の心の中の霊夢の声か。

それだけ聞くと、ちよっと、というかなり頭の逝っちゃった奴の言う事のようにだが、事実なのだからしょうがない。

ああ、頭が逝っちゃってる方がじゃなくて、霊夢の声が心から聞こえたことが、だ。

俺と融合した霊夢の声。話だと、今日中にはもうこの声は聞こえなくなってしまうらしい。

俺がもうほとんど霊夢と似てきているせいか、そして霊夢も俺に似てきているせいか、気の合うだけに少しさびしいものだ。

そう思いつつ、俺は隣の何もない畳を見つめながら、霊夢の言葉を

ゆっくりと咀嚼していった。

ああ、成程ね。俺が違和感を感じたのは、そこに眠っているはずの魔理沙がいなかったからか。

（おはよ。…はあ、魔理沙ったら、いつもこんなに早く起きてるのかしら）

心の中から聞こえてくる霊夢の声にはようと返して、その呆れるような声に続く言葉を心に思う。

どうだろうな。そうかもしれないし、そうじゃないかも。

（取り敢えずあんたも、さっさと起きて布団たたんじやいなさい）

ほーい。

布団を押し入れに仕舞った俺は、顔を洗うのと口をゆすぐために洗面所へと向かった。

口をゆすぐさなか、ふと、魔理沙、帰ったのかな？と思った。

一度思い出してしまうと会いたくなってくるもので、さつさと洗面所から出て部屋へ戻り、ぱっぱと着替えを済ませてから居間へと向かう。

居間に入ると、腹の虫が捻り潰されてしまいそうなほどのいい匂いがした。焼き魚のにおいだ。

卓袱台の上には、今用意されたばかりといった様子の焼き魚がのつたお皿が二つ置いてあった。

シヤケだろうか、何故海の幸があるのかはわからないが、俺の大好物だ。

……ん？川の魚だったか、鮭は。

その皿にくつつけるようにして、裏返しで置かれたお椀と茶碗。それと、箸置きに添えられた朱色の箸。

台所の方から、お湯を沸かすような音が聞こえてきて、俺はそちらに足を向けた。

台所では、調理台に向かったいつもの格好からとんがり帽子を外しただけの魔理沙が、やかんを熱する、調理台に組み込まれているガスコンロの火加減を調節していた。やかんの隣には、小さいお鍋があり、湯気を上げていた。

「おはよう、魔理沙。本当に早いわね」

歩み寄りながら声をかけると、魔理沙はぱつと振り返って、

「おお、おはようだ霊夢。私が起きるのが早いのは、そりゃあ私が魔法使いだからだぜ。早起きは魔法使いの専売特許だからな」

ニカリとした笑顔で、そう言った。朝から爽やかで、なんだか魔理沙が太陽みたいに輝いて見えた。あれか、その癖っぽい金髪のせい
か。

いや、そんな話聞いたことないからと思いつつも、朝食を作ってくれることへの礼を言う。魔理沙は例のごとく、お互い様だと言った。まったく、本当に頭が上がりそうにないな。そんなの、態度には出さないけど。だって俺霊夢だし。

それにしても、本当にあっただんな、ガスコンロ。

調理台に向き合った魔理沙が、再びやかんの火の加減を見る。

中火から弱火に変えて、よし、と呟いた。

それから、すぐ隣の大きな冷蔵庫の一番上の段を開けて缶詰を取り出す。ラベルには『キズア』と書かれていた。

……あずきか。古めかしい缶詰だな。それ消費期限大丈夫なのか？あと、缶詰って冷蔵庫に入れるものなのか？

というか、冷蔵庫もあっただんな。なんで気が付かなかったんだろうな、俺。

調理台の下の段の方の引き戸を開けて缶切りを取り出した魔理沙が、

「霊夢、皿取ってくれ」

と言った。俺は、横にある食器棚かに手をかけて両開きの戸をあけ、半透明……ガラスで出来た底の浅い小さなうつわを取り出す。

それを差し出すと、もいっこ、と言いながら俺の手からうつわを受け取って、缶詰の中身をスプーンでうつわへと盛り始める魔理沙。言われたとおり、もうひとつつわを取り出して渡す。わけるようにして、魔理沙は缶詰の中身を盛っていく。

（あんた、あずき駄目じゃないの？）

唐突に心の中の霊夢が話しかけてきた。

霊夢が俺の好き嫌いを知っているのは、俺の記憶を霊夢が持っているからだ。

別に、食べれないほどじゃないさ、と心の中に返して、魔理沙と一緒に居間に戻る。

魔理沙は卓袱台にあずきの入った皿を乗せると、俺にご飯をついでいてくれと頼み、お碗を持って台所に戻っていった。

卓袱台の横に、木板のおひつがあった。

引っ掛けてあったしやもじを手に取り、おひつのふたを開けて中をかき混ぜる。

熱気が凄い。

ちやつちやと自分と魔理沙の分をよそう。

魔理沙の方のご飯ははきれいに丸くなるようにしやもじで整えてやった。

お味噌汁をついで戻ってきた魔理沙が、自分の茶碗を見て、「わたしやあ仏さんかい」と言った。

けらけらと笑う。

その後、魔理沙がお茶をついでくれた。あ、茶柱立つてる。今日はいいことがありそうだ。

そして、両手を合わせて「いただきます」。

食事中、何故か頭の中に恋色な魔法使いのテーマ曲が流れ続けた。

別段気にすることではなかった。それよりも気になければいけなかったのは、心の中の霊夢がさっきからアレンジ曲を口ずさんだりしていることだ。

霊夢、あまり歌うの得意じゃあないんだな……。

ともすれば雑音にさえなりそうな霊夢の歌声がエンドレス。飯が不味くなるな…。

いや、おいしくいただきましたけどね。

食後の一服と、魔理沙と縁側でお茶をすすっていると、急に魔理沙が真剣な顔で話しかけてきた。
何だろうと話を聞いてみる。

「霊夢、悪霊をやった後に、なんかあったのか？その霊力……
お前、それが限界ってわけじゃあないだろ」

そつよ、と頷く。俺の霊力は、俺が無意識でもかなり抑えられている。当たり前だ。急に霊力が馬鹿でなくなっていたりしたら、隙間B A B A A！に感づかれるかもしれないし。
しかし、気が付いたか。魔理沙に気が付かれるくらいってことは、隙間バ……紫にだって、すぐ感づかれてしまうかな。
俺の言葉に、魔理沙は頭を抱えて唸り声を上げた。どうしたのかと思っ

「くそ……また霊夢との差が……このままじゃ……」

うーん、うーんと唸っていた魔理沙はパツと顔を上げたかと思うと、意を決したかのような表情で霊夢！と声を上げた。

その迫力に少々押されながらも、なにと返す。

「弾幕決闘だ!!」

ずびし!!と擬音がつきそうなくらいの動きで、指を突き付けられた。

いや、何でそうなるんだよ。俺はちょっと、お前とはたたかいたくないぞ。

そうは思ったが、断ろうにもこの魔理沙の決然とした瞳に見据えられると、ノーとは言えなくなってしまう。

どうしよう…全力でしたら、へたしたらここら一帯消し飛ぶ…なんてのは言い過ぎか、しかしそう言っても過言じゃないくらいのパワーが出るし…それに何より、俺がこのでかい靈力を御しきれるとも限らない。

万が一にも力を誤って魔理沙を傷つけてしまったらと思うと……うん。

(いいじゃない。大きくなった靈力を制御する絶好の機会だわ。それにあんた、私の力を全然うまく使えてないからね。戦いの中で私が特別にレクチャーしたげるわ)

俺が迷っていると、そんな声が聞こえてきた。何？俺が力を全然使えてない？うわあ、それって超不味い。是非ともお願いします、だ。と言っわけで、

「いいわよ。丁度どれくらい力が出せるか試したかったところだし」

そういうと、魔理沙はこちらに向けていた指をゆっくりと頭上に掲げ、不敵な笑みを浮かべた。

「また新しいスペルカードを作ったんだ。今度のは強力だぜ！」

ことんと湯呑みを横に置いて、何を感じるでもなく空へと浮かび上がる。高いところに行く恐怖心なんてないし、空を飛ぶことへの感慨なんてない。

神社のかなり上空で待っていると、居間からほうきを持ってきた魔理沙がそのほうきの柄に腰掛けて、すいーっと昇ってきた。そうだ、私も、と神社の方に手を向けて、くいつと振る。

流石に陰陽玉を持ち出すのはまずいか、そう思い、お祓い棒を手の内に寄せる。

神社の方から風を裂いて矢の様に飛んでくる棒をぱしと掴んで、目の前に浮かんでいまだ不敵な笑みを浮かべている魔理沙を見据える。

弾幕ごっこを始めるには、近すぎる距離で対峙する。

「じゃあ魔理沙、言い残すことはないかしら」

にやりと笑いつつあげるのは、前口上。これがなくてははじまるものも始まらない。

魔理沙もまた、フツと笑い声をこぼして、

「ご愁傷様だぜ、霊夢」

そんなことをのたまった。

ふは、と溜息のように声が漏れた。

初めての戦闘だ、危険はさほどなくとも、戦う事への奇妙な高揚感がある。

ひゅんひゅんと手の内で棒を回転させ、魔理沙に差し向ける様にして握りしめる。

心の中の霊夢も、気分が高揚しているのか、はじまりを今か今かと待っている。

あふれ出そうになる感情を、心の中の霊夢と同時にそのまま声に乗せる！

「負け越してるくせに、よく言う！！」

二重に重なったその声が、始まりの合図だった。

今ここに、博麗霊夢となって初めての戦闘の火蓋が、切って落とされた。

普通の魔法使い 霧雨魔理沙

難易度 Normal テーマ曲 恋色マスタースパーク

少女祈祷中 , , ,

道中ですらない（後書き）

心の中の霊夢が今話で消えると言ったけれど……ありゃウソでした。

資料を得るために東方の書籍を買ったけれど鳥頭の私には宝の持ち腐れになってしまった。

設定捏造過多は避けられそうだけど少しはある。

ああ、体験版までしかやってないし、やったの三年位前だよ、次話弾幕ごっこなのはどうしよう……。。

V S 魔理沙（前書き）

弾幕ごっこ初描写。凄いことになった…。
あ、あと真面目じゃないです。

V S 魔理沙

魔理沙がほつきを繰り、遠くへと飛んでいく。
同時に俺も、後方へと瞬時に移動する。

（ある程度は出来るだろうから、最初はある程度だけでやってみなさい）

おう、と息を巻いて答え、魔理沙を見据える。

魔理沙の黒く長いスカートが翻っていた。長く癖のある金髪が、風に揺れていた。

そのどこをとっても、なんとなしに魔女と思えそうな風体の魔理沙が、魔力を高めて、そこにいた。

魔法使いに見えるのは、そりゃ当たり前だ。だって本物の魔法使いだし。

霧雨魔理沙は、魔法の森に住む普通の魔法使いだ。自信家に見えるが、そのたゆまぬ努力が実力を裏付けている。そして、その実力でもって幾度となく俺と……博麗霊夢と戦ってきた。

光と熱の魔法を得意とする魔理沙は、数年前から星を模倣した魔法をよく使うようになっていた。

スペルカード戦を考案して以来、魔理沙の弾幕は魔力を固めて星の

様に見せるものが多くなってきた。

『弾幕はパワーだな…』とは、前々回の弾幕決闘で魔理沙が零していた言葉である。

色とりどりの星をばら撒き、魔理沙の代名詞でもある黄色の極光、マスタースパークを放つ姿は、まさに魔法使い……いや、魔砲使いと言った方がいいかな？

飛ぶスピードは霊夢よりも速く、弾幕決闘においては霊夢とほぼ互角。

それでも今まで、一度たりとも霊夢は負けていない。だからこそ魔理沙は努力し、何度も霊夢に戦いを挑んでくる。

しかし、その努力を誰かに知らしめたりすることは、一生ないのだからうな。

魔符「スターダストレヴァリエ」

（ち、さっそくスペルよ！）

魔理沙の宣言に、心の中の霊夢が舌打ちをする。同時に俺も舌打ちをしていたのは、もはや当然の事なのだろう。

魔理沙を中心にして、視界を埋め尽くすほどの色とりどりの星が放たれた。

迫りくるそれらを避けることに専念するため、俺は集中し始めた。世界が、遅くなる。

スペルカード戦、通称弾幕決闘とは、力の強い妖怪が日に陰に跋扈

する幻想郷ならではの戦いである。

スペルカード決闘法に基づき行われるこの戦いの目的は、かつて人里の間人を襲ってはいけないという法が妖怪たちを縛ったとき、その本質を奪われた妖怪たちの弱体化を、そのままにしておけば幻想郷の存続にかかわると判断した境界の妖怪と今代の博麗の巫女、つまり霊夢とで協力して作られた、限りなく実戦に近い戦いをするこ
とで、その本質の回復を狙ったものである。

さらに、ある程度力を持つてさえいれば、妖怪でなくとも人間が、果ては妖精でさえも、神と遜色なく戦えるというのが、この弾幕決闘の魅力の一つでもある。

弱くとも技法を凝らせば、強いものに勝てるかもしれないという魅力が、昨今の小妖怪たちの間で徐々に弾幕決闘が広がりつつある理由でもある。

ただ、地力の差というものはどうしてもどうにも出来ないものであり、また、どうにも出来ない事でもある。

そこで、この決闘を行う際に必ず守らなければならないルールがある。

相手の命を奪ってはならない。

その広がり方から、将来的に『女の子の遊び』となってしまうような弾幕決闘では、あまり注視することではないようにも思えるが、何せ戦うのは他でもない妖怪である。

思わず殺してしまった、では本末転倒だ。

だからこそ、さらにルールが設けられている。
スペルカードを最初に何枚使うか決めること。

勝った場合の商品を決める事。

使う際には必ず掲げて宣言すること。

カードをすべて使い切るか、破られるかしたならば、素直に負けを

認めること。

このスペルカードというものは、それを持つ妖怪の力が込められたカードである。

パターンのある弾幕、もしくは得意技に名前を付けてカードに封印してあるもので、宣言と同時に、解放することで瞬時に大技が使えるという具合になっている。

もちろん、ほとんどの妖怪がこのカードなしでも同じ大技を出せる。封印とはよく言ったもので、実際は結構力を使うものでもある。

弾幕の様子は妖怪によって異なるが、共通して、一度使われては回避に専念するほかない。

通常弾幕程度ならば放てるだろうが、スペルを開放するのに集中することが出来ないためである。

魔理沙が放った星を、身体を風に任せる様にして避ける。

それぞれがほぼ直線の軌道を描くそれらを避けるのはたやすい。が、そこに魔理沙がこちらの動きを読んで放ってくる星や、他に軌道を変える星などが混じっていると、余裕で回避するというのも難しくなってくる……はずなのだが。

何故だか、俺はすいすいと避け続けていた。何の苦も感じないほどに、軽々と。

まさか魔理沙の作戦か！？とも思ったが、遠く弾幕を放つ魔理沙の驚いているような表情を見るに、そういうわけでもなさそうだ。

身体が勝手に動いて、リボンから抜き出した札を魔理沙へと投げつけた。

魔理沙はこちらを狙い撃ちしてくるのを中止して、札を避け始める。その間にも大量にばら撒かれる色とりどりの星を、しかし意識もせずにはぐれつつ、お札を投げる手を休めない。

（それ、私の経験よ）

ふと声が聞こえてきた。霊夢である。

成程、お前の経験じゃ、このタイミングで札を投げるものなのか、と感心していると、我に返ったかのように身体が俺の意思を反映し始めた。

すなわち、お札を投げる手を止めてしまったのである。

そこを狙って、魔理沙は俺の周りを縦横無尽に飛び回りながら弾幕を放ってきた。

慌てて避ける。幾つか袖やリボンに掠っていったものもあり、俺は冷や汗をかいてしまった。

だが、何のことはない、俺が気を入れればこの程度、妖精の弾幕とそう変わらない程に感じられる。

ぱいぱいとお札を投げる。時折お祓い棒を振って霊力弾を放ちつつ、旋回して移動する。思えばあまり動いていなかった。それでは格好の的だ。

（真正直に投げない！！てきとうでいいから、四方八方に投げてみなさい。ああ、あと霊力有り余ってたんだから、不自然に高め過ぎないように大弾として放ちまくっちゃいなさい）

霊夢からお叱りが来る。そうか、わかった、と返して、軽く手を振る。

スペルカードを使ったわけでもないのに、そこらじゅうを埋め尽くすほどの大小の弾幕。

魔理沙が必死になって避けているのが見える。それから、滅茶苦茶な方向にお札を投げつける。

すると、お札はホーミングして様々な方向から魔理沙を襲う。

避ける、避ける、避ける。回転して、ブーストして、または迎撃して。

「なかなかやるわね。でも……これならどうかしら」

いい加減千日手の様になってきたので、どうにか状況を変えようと思ひ、懐からてきとうにカードを一枚抜き取る。

それを勢いよく、空へと掲げた。

気符「シャイニングソードスラッシュ」

（うあ、こいつネタ技に走りやがった！！）

霊夢の声を無視して、さらに持っていたスペルカードの内容も無視して、目の前に自分の身長ほどの大きさの霊力の塊を出し、俺はお被い棒を大上段に構える。

お札を避けきつた魔理沙がこちらを見て、怪訝な顔をしながらも弾幕を放ってくる。

それに合わせる様にして、俺はお祓い棒を霊力塊へと振り下ろす。放たれるのは、霊力のでかい斬撃波。俺が滅茶苦茶に腕を振るう度に、その斬撃波は放たれる。

その数、九つ。最後に、霊力を削られて人の頭ほどに小さくなった霊力塊を蹴り飛ばす。

斬撃波は魔理沙の弾幕を切り裂いて、その身へと迫っていく。

さあて、どうするのかな、と高みの見物にしゃれ込む。

一つ、二つと魔理沙は避ける。みつつ、よつつ…。うわ、スカートの端が切れた。あぶねえなあ。

むつつやつつと避けた魔理沙は、九つ目にて上半身と下半身が泣き別れ、飛来した霊力弾に当たり、爆散した。

「……………は？」

瞬間、全身の血の気が引いた。我に返るとは、まさにこのことかともいうように、正気が戻ってくる。

や、やつちまった…。魔理沙が…。うわ、うわ、俺…。どうしよう
霊夢…

（馬鹿！気をしっかり持って力を探りなさい！多分魔理沙は死んでない！！）

霊夢が声を張り上げる。それに俺は、いや、でも、真っ二つ…。と

霊夢の言葉も聞かずに混乱する。
両手で頭を抱えて、ただどうしよう、どうしよう、としか呟けなかった。

「魔符『イリユージョンスター』 チェックメイトだぜ、霊夢」

唐突に、背後から声が聞こえてきた。
慌てて振り返ると、そこには不敵な笑みを浮かべてほつきにまたがる魔理沙の姿があった。

生きていた！と心の中で叫ぶ。

しかし、俺は素直に喜べなかった。何故なら…

「どりゃーっ！！」

魔理沙の掛け声とともに、魔理沙の背後に滞空していた千を超える星たちが俺へと襲い掛かってくる。

（幻影だったのね、やるなあ魔理沙）

いや霊夢さん、褒めてる場合じゃないって。
やばいやばい！当たる当たる当たる！！
さっきの俺の弾幕よりも濃い弾幕。まるで、シリミ一匹通れるほどの隙間も見当たらない。

負けるのか、と一瞬諦めの言葉が頭をよぎった。

（緊急超爆発波！！）

霊夢が、叫んだ。

俺は何を考えるでもなく、すぐさま身を縮こめて、身体の内にてきる限りの霊力を練り、ばっ！と身体を広げると同時に、一気に開放した。

「ずあッ！！！」

俺を中心に、爆発的な力が広がっていく。魔理沙の弾幕を掻き消して、太陽の様に濁った白い光で辺り一帯を照らしだし、数秒して収まる。

「くそっ！ボムか！！」

肩で息をしながら悔しがる魔理沙を見据えて、心の中で安堵の溜息をつく。

（侮っちゃだめだわ。魔理沙の奴、動きがこないだとは段違い）

そんなことを、霊夢が言う。ああ、ああ。そんなもん見りゃあわかるさ。なんたつて、あんな大小混じった弾幕を避けきつて、食いついてきて。なおかつ俺の後ろに回り込んだんだ。もう、ネタ技とかふざけたりしないで、大真面目に、ルナティックにやってやるさ！！

術後硬直の様に固まる魔理沙から距離を取りながら、懷に手を伸ばし、抜き出したカードを勢いよく掲げる。
動きを取り戻した魔理沙が、どこからかミニ八卦炉を取り出して、後退しながら魔力を高め始める。が、遅い。

大結界「博麗弾幕結界」

ラストスペルが解き放たれる。

魔理沙と弾幕決闘をするときは、毎回三枚なので、これがラスト。魔理沙のテーマ曲がサビに入るのを頭の奥で感じながら、目をつぶって、背を反らせる。

腕を広げて、足を交差させつつ、ぴんと伸ばす。

俺を囲むように球状に霊力が充満し、それは突如として、前後左右三百六十度、全方位に特別強力な弾幕を豪雨のようにばら撒き始めた。

すうすうすう、と頭の奥が冷えて、白くなっていく。

最大出力の弾幕ゆえに、俺本人でさえ、どうなっているかなんてわからない。

放たれた弾幕は音を飲み込み、周囲を無音の状態にする。

神社の方に弾が行っても問題はない、きっと勝手に消えてくれる、はず。

魔砲「ファイナルマスタースパーク」

弾幕の先頭の霊力弾が魔理沙に当たるか、当たらないかのその瞬間に、魔理沙も強力なラストスペルを開放した。

何時になく魔力が込められたそれは、俺の身長何倍もの大きさで、霊力弾を飲み込んでこちらへと迫ってくる……のを感じた。目を閉じてるし、意識がちよっとあれなのでよくわからないのだ。

（うげ、あんなの見たことないわ…）

霊夢がぽつりとつぶやいた。なるほど、強力だぜ！とか言ってたのはこれのことか。

だが、俺様をなめるなよ！！と気合を入れて、さらに体の中から霊力を捻りだす。

最大出力と入ったが、それは俺が出せる霊力の最大の事で、別に俺の霊力を全開にした状態で打っているものじゃあない。

一点突破を目指しているのか、恐ろしく貫通力の高い黄色の極光は、しかしひとつひとつが格段に強力な霊力弾達に阻まれて、次第に勢

いが無くなっていく。だが、音を失くしたこの場所で、まるで放電でもしているかのように高い音を響かせていることから、その威力の強さは計り知れる。

あんなもの、当たったら俺でも粉微塵…いや、細胞一つ残らんぞ。たとえ二重大結界を張ったとしても、だ。

魔理沙のそれは、確かに強力だった。現に今はほとんど進んでこないにしても、じりじりと範囲を狭めてくる。しかし、俺には一歩及ばなかったようだ。

もはや俺が落ちるのも時間の問題かと思えそうなマスタースパークが、突如として進みを止める。

そして、徐々に徐々にその外郭を俺の霊力弾に削られていき…ついには、潰えた。

それと同時に魔理沙へと怒涛の勢いで流れ込む弾幕。

声のない魔理沙の悲鳴が、何故か俺の耳に届き、そして、勝負は決した。

弾幕の嵐は止んで、俺はようやく目を開いた。すると、遠くで真つ逆さまに魔理沙が落ちていくじゃないか。

テーマ曲が終わるのを聞きながら、俺は魔理沙をキャッチするべく、全力で飛翔した…。

S t a g e C l e a r !

少女祈祷中……

(馬鹿……全力出しちゃって……)

最後に、霊夢が何かを呟いていた気がした。

V S 魔理沙（後書き）

全力出しちゃった。終わったな……。
とおもいきや、紫は昼寝中でした、というオチ？

さよなら靈夢（前書き）

短いお話。

とある無料動画共有サイトにネ夕探しをしていたら、偶然見つけた動画のせいで紫の母性的な面が強くなってしまった。

さよなら霊夢

お風呂から上がって着替えた俺は、さっぱりした気持ちで居間に向かった。

居間では、すでに元気になっていた魔理沙が夕ご飯を用意してくれていた。

二人で談笑しつつ、夕飯を食べる。

その話の中で、それとなく魔理沙に、『今日泊まっていきなさい』といったが、いや、今日はいいいよ、と返された。なにやら自分の手を見つめて、ぐっと握りしめる。

なにか、掴めそうな気がするんだ、と魔理沙は言った。

寂しい気持ちにはなるものの、それならばしょうがない、と気持ちを切り替えて、夕餉を楽しむ。

ゆうげってなんだよ。

(ゆうはんでいいじゃない)

自分に突っ込みを入れたら、合わせて霊夢も突っ込んできた。そんな、突っ込むだなんて……霊夢には乙女の恥じらいというものがないのだろうか。

（あなたには人間として生きる価値があるのかしら）

そんな俺の脆い心を粉碎するようなことを言う霊夢。

お前：そこまで言わなくてもいいじゃないか……。――

少し落ち込んでいると、大丈夫か？ 霊夢、と魔理沙が心配そうに声をかけてきた。

それに、何でもないわと返して、食事を再開した。

「またなー、れーむー」

別れの言葉を告げた魔理沙がほうきに跨って浮かび上がり、夕闇の

彼方へと消えていくのを見届けた俺は、腕を組んで、溜め息をひとつついた。

にしても、魔理沙の奴、予想外に強かったな…。

（うーん、そうよねえ。信じられないくらいだったわねー）

心の中の霊夢が、俺に同調するように呟いた。
うんうんと頷いく。

こりゃあ、俺もうかうかしてらんないなあ？と語尾をわざとらしく上げて言ってみせると、霊夢は、呆れたような声で、

（あーはいはい。修行でも何でも、どうぞご勝手にー）

と、随分と間延びした声で言った。

その答えに満足した俺は、しかしまずは体力回復だ、ときびすを返して、屋内へと歩きだした。

その時のことであつた。

「幻想郷の常識と外の世界の常識が混ざってしまった…」

そんな声が、後ろから聞こえてきたのは。

一瞬、身体中が金縛りにでもあったかのように強ばったが、気合い

をもつてして無理矢理に身体を動かし、ゆっくりと振り返った。

信じられないくらい美しい女性が、そこにいた。

腰までとどく長い金髪は吹く風にゆったりと流れて、幾つかの束になっている髪の毛の先に結ばれている小さなリボンと一緒にたゆたう。

紫がかった金色の瞳が、妖しい輝きを放っている。

八卦の萃を描いた道士風の服を着ていて、頭にはリボンの巻かれた、所謂ZUN帽をかぶっていた。

肩に掛けてさしている日傘が夕日の光を遮断して影を落としており、その表情はわからなかった。

境目に潜む妖怪、八雲紫そのひとであった。

とっさに、臨戦態勢に入る。

何でこいつがここに、というか、今こいつなんつった!?

(まずっ!!このままじゃばれるわ!!ちょっと早いけど、強引にでも融合する!!!)

霊夢が、焦ったように叫んだ。何を言う暇もなく、心に何かがとけ込んでくる感覚がして、ついで、意識が澄み渡り、なにかもが充実してきた。

身体の端々にまで、あます所無く霊力が循環する。

「結界の存在を揺るがす危険な分子……外来人とは違う……しかし、そうでもある」

万全の体調。いわば、完全体にもなった気分、しかし警戒を解

かない。

まるで舞台の上にひとりだけで立って語るその言葉の真意を探る。紫は、その身を僅かに揺らして、詠うような調子で言葉を紡ぐ。

「それは水面に広がる小さな波紋。しかし、遠く及べば大きな波となる。……放っておけば……」

「いきなり現れたかと思えば延々と回りくどい事を……一体何の用なのか、はっきり言いなさい！」

考えてみても、よくはわからなかったので、感情に任せて怒鳴りつけた。

まさか、まさかとは思うが、自分の事を言ってるんじゃないかと焦っていたせいでもあった。

紫は、こくりと頷いて、

「ええ、ええ。そうね、霊夢。わかったわ。だから、そう殺気立たないでちょうだいな」

そういつて口元に手をやって上品に笑う紫を見て、身体力を抜いた。

相手をするだけ無駄だと悟ったからだ。

大袈裟に溜め息をつく、紫はいつそう笑いを強めて、それから、

「でもその前に、お茶にしましょう?。」

断れやしないんだろうなあ、と思いつつ、俺は何も言わずに屋内へと入っていった。

ずっと湯呑みを傾けて、音もなくお茶を口に含む紫。こくと飲み下すのを見届けてから、俺は紫が話を切り出すのを待っていた。目を瞑って、お茶がのどを通った余韻に浸る紫は、この一時を楽しんでいるように見えるのだが、俺としては気が気ではなかった。

「ふふ、霊夢。お茶を淹れるのが上手くなったようね。おいしいわ」「別にあんたに飲ませるために上手くなってる訳じゃないんだけどね」

紫の言葉に、すぐさまぶつきらぼくに返す。すると紫はクスクスと笑って、それは残念ね？と言った。

あの白黒魔法使いさんのためなのかしらとからかうように言ってお茶を飲む紫になにか言い返すこともなく、卓袱台にひじについて息を吐いた。

「そうそう、お茶と言えばねえ、この間人里の茶屋でたべたお団子がおいしくて。今度一緒にどうかしら」

そんな俺を気にかけることなく、紫は楽しそうに世間話をしている。かれこれ二時間近くこの調子なのだ。いつこうに本題に入る気配がない。

そのお茶、何杯目だと思ってんだよ。

「お断りよ。どこの世界に妖怪とつるむ巫女がいるっていうのよ。そんな無駄話はどうでもいいから、さっさと言いたいこと言っ出てっってくれる？私も暇じゃないのよ」

不機嫌にそう言つと、あら、冷たい。と紫は言う。どこから取り出したのか、扇子を開いて口元にあてた。

「もう夜も更けているというのに、か弱い私に出て行けだなんて」

くすくすとわらう紫に、どの口が言つのよと返して、また溜め息を

ついた。

「霊夢ったら、幸せをまき散らすのが好きなのね？」

ごでんと額を打ちつける。めんどくせえ。こいつ、この上なくめんどくせえ。

さてと、一言入れて、紫が立ち上がった。のろりと顔を上げると、腕が伸びてきていた。

思わずぴくりとして目を瞑って、身を強ばらせる。が、なにか衝撃があるでもなく、ぼふ、と手を乗せられた。恐る恐る目を開ける。

紫は、ひどく優しい顔をしていた。そうしてみると、いつも感じるような胡散臭さや妖艶な女性としての雰囲気も微塵も感じられなくて、見た目相応の少女のように見えた。

ただ、その瞳には、母が娘に向けるような色があった。

「霊夢、仕事をしつかりね？もし外の人間を見かけたら、ちゃんと面倒を見てあげるのよ？あなた、怠け者なんだから。置いてけぼりにするかも」

何も言えずにぼーっとしていると、紫はそんなことを言って、俺の頭を優しく撫でてきた。

顔が真っ赤になりそうなくらいの恥ずかしさがこみ上げてきて、それを隠そうとして頭に乗っている手を払いのけようと腕を振るうと、ひょいと避けられた。

「よけーなお世話よ!!」

仕方なく声に出して気持ちを拡散させる。

なぜか酷く疲れた。いやうん、こいつのせいなんだけどな。

肩で息をしつつ立ち上がり、紫を睨み付ける。この年になって頭撫でられるとかないから。

紫は、いつの間にやら扇子のかわりにいつもの日傘を手にとっていた。背後の空間に大きな亀裂が走ったかと思うと、ぱっくりと開いた。その中は紫色で塗りつぶされていて、いくつかの不気味な目があることに気がついた。それに、亀裂の両端にはなぜかリボンが結ばれていた。

「またね、霊夢」

そう言った紫は、後ろに倒れ込んだかと思うと、亀裂と共にきれいさっぱりと消えていた。後には、紫の使った湯呑みだけが残されていた。

その湯呑みを手にとって、見つめる。

「まったく、何しに来たんだか…」

心の中に問いかけてみても、答えは返ってこなかった。
ああそっか、と呟く。そういやもう、話すことは出来ないんだっ
か。

そのことに一抹の寂しさを感じつつも、今日はもう寝よう、寝室へと向かうことにした。

さよなら霊夢（後書き）

ps3でせこせこ書いたものを纏めて投稿。

やっと心の中の霊夢と別れさせる（？）ところまでこぎつけた。

関係ないけど、ドラゴンボールの映画見てたら想像の中の霊夢の顔が何とも凛々しいものになってしまった…。

博麗式修行教室（前書き）

題名あんまり関係ないです。

あと、書いてたらまたわけのわからん登場人物がでてきた。
自分の計画性のなさに涙が出た。

博麗式修行教室

吸血鬼異変を、俺は体験していた。

空は黒く塗りつぶされていて、あたりには獣やら人やら、区別のつかない雄叫びが響き渡っている。

遠く、世界の中心のように建つのは、目に痛すぎる紅い館。

目前に立つのは、その館の主の夫婦。

片方は、赤いシルクハットをかぶった、紳士服に身を包んだ三十代半ばにも見える吸血鬼。

片手にステッキを持っていて、館と同じ紅の瞳でこちらを見ていた。余裕そうな雰囲気、その長身の吸血鬼の名前は、『シュトゥルペル』。

その横に腕を組んで立つのは、レミリア・スカーレットに瓜二つの緑目の吸血鬼、『マレティア』。

レミリアと見分けるには、その瞳の色を見るか、ナイトキャップにりんごの刺繍があるかどうかで判断できるだろう。

その後ろに連なる有象無象の妖怪共。

俺が立つ横に、八雲紫と、八雲藍が立っている。

そのどちらもが、険しい表情をしていた。

俺の姿は、先代の博麗の巫女のもの。

身体は勝手に動く。痛みはかつてこの身の持ち主が感じていたもの

の半分。

戦い方、身体の動かしがた、そのすべてが、俺の経験として流れ込んでくる。

紫が手に持つセンスを軽く揺らして、藍に指示を出す。藍がこくりと頷くのを見て、紫は一瞬のうちにシュトゥルデルの方へと飛び込んでいく。

俺は藍と共に飛び出して、マレティアを仕留めにかかる。

幻想郷の秩序を乱す者は、邪魔なのだ。

『恐怖の感情を！もつとわたしに見せてみる！！』

マレティアが構えて、叫ぶ。

確かにこの身は少々恐怖しているようだった。

だが、それがこいつに知れているとしても、別に俺には関係ないのだけでも。

「嘯く程度の能力」が向こうの親父さんの能力で、こっちの小さいのの能力は「感情を読み取る程度の能力」。

聞いたままでは大したことのないような能力でも、使いようによってはかなり手強いものになってくる。

現に、この幼女はこの身が繰り出す拳を、お札を、霊力弾を、こちらの感情を読み取って避けてしまっている。何度繰り返しても当たらない攻撃に、藍もこの身も焦り始めていた。

向こうの方では、紫が一方的に親父さんを叩きのめしているというのに。

さて、俺は……もとい、先代の巫女様はどうやってこいつに勝った

のだろうか…。

異変解決。俺は、目を開いた。

視界に広がるのは、雑多なものが乱雑に積まれている光景。蔵だ。足元に、霊力で描かれた至極複雑な陣がある。そして、俺の手には、歴代の巫女の名前と、大たる異変の名がセットでのせられている巻物が握られている。

「よし、これであらかた終わったな」

俺は呟き、次いで、大きく息を吐いて、その場にへなへなと座り込

んだ。

あーきつい。身体的には全然疲れてはいないんだけど、精神の方がかなり参ってしまっている。

この蔵で見つけた修行法。それは、歴代の巫女たちが体験してきた異変を俺も体験するというものだ。

発掘した博麗禁書の最後の方に小さく載っていた。今までの巫女たちの異変時の動向や、その巫女の主観での記憶が封じ込まれている巻物と、特殊な陣を使ってこういった修行が出来ること。

恐らく将来の巫女たちの成長のために残されたものなんだと思うんだけど、なんかこれもすごく特殊なもので、多分俺くらい、いや、霊夢くらいの才能と今の霊力が無ければこの修行をすることは無理だろう。

不便なものだ。まあ、そんなわけで、俺は過去の異変と連戦していたわけだ。

巻物を、開く。

第十二代目の巫女の項目……この巫女だけ何故か名前が載っていないのだが、気にせずに指を這わせてばってんする。

これで、ひとつの項目を残して俺は全ての異変を体験したことになる。

だけど、やっぱりやるなら全部だよな、とページをめくる。

「……旧十二代目、博麗優菜。『夢の大異変』」

他の異変はちよいと霊力を送り込んで夢の中に潜り込むようにすれば体験できていたのだけれど、この異変だけはどうも強力な封印が施されているみたいで、俺の力をもってもなかなか開いてくれ

ない。

ああ、全力を出すと紫やらの怪しまれるだろうから、かつての霊夢の全力なんだけど、これほどやってもまだひとつしか封印が解けていない。ああ、これの封印はひとつじゃなかったんだよ。ふたつ。面倒なもんだ。

しかし、ひとつめを解いてみると、なにやら注意書きの様なものが浮かび上がってきたのだ。内容はこうだ。

『この異変解く者こそせよ』

巫女の自覚を持って挑めよ

心弱きもの解くことを禁ず

飲みこまれた時

この地と共にその身の破滅を覚悟せよ

第十二代目 博麗優菜』

ぽりぽりと頬を搔いて、息をつく。

なんか物々しい。ああ、ちなみにこの巫女は旧十二代目の人だ。

旧つてのは、博麗大結界が張られる遙か昔にこの地を守っていた巫女たちのことで、十六代目から、今の俺に続く新一代目になわっている。昔の巫女たちは、旧なんてつけられるとは思ってもみなかっただろうに。

もひとつちなみに、俺は十三代目。別に、それがどうというわけで

もないのだけれど。

まあとにかく、うだうだしていても仕方がないのである。無理矢理にもこの封印を解いて、全異変をコンプリートしないと俺の気が済まないのだ。

覚悟？ないよそんなもの。でも大丈夫だ。紫クラスでもないかぎり今の俺に敵う奴なんていないのだから。

そう思いつつも、ページを撫でたり引つ掻いたりしてみる。

なんか、ぱあつと解けてくれないかな。細かいのはめんどくさくて嫌いなんだよ。

しまいには投げやりにべしべしと叩いていると、そのページが強い光を放ち始めた。

あまりにも光が強くて、まわりが全然見えなくなる。

おお、解けたのか、と思って見ていると、次第に光が弱まっていき……何故か俺は、白い世界に一人で突っ立っていた。

「……またここ？」

なんだ、霊夢の奴でもでてるのか？とあたりを見回していると、後ろに気配を感じた。

ばっ！と勢いよく振り返りつつ、念のために懐からお札を抜き出して、人差し指と中指の間に挟む。

「騒がしいんだよおまえ！。眠れないじゃないか」

機嫌が悪いのか、すこし低めの声でそういった目の前の奴は、意外というか、案の定というか、巫女服姿の女の子であった。

ん？なんで俺は過去の巫女の記憶に入っただはずなのに、こいつ視点になってないんだろうか、と思いつつ、その少女を注意深く観察する。

まず目に入るのは、その薄水色の綺麗な髪の毛だった。少し短くて肩にはかからない程度の長さで、頭の右側のところでちょこんと結んでいる。

そして、整っていないながら、あどけない顔立ち。なんだろう、この世界は可愛い子が多すぎる。

瞳の色は、髪と同じのように見えて、少し違っていた。あえていうなら、空色の瞳。うん、それが一番しっくりくる。

まゆが少し吊り上っていていたが、なぜだかそれがこいつの常の状態なのだと理解できた。それに、その目は、どこかで見覚えがあるような気がした。

それから、見てすぐわかるのがその身長の高さ。高中低の内間違いなく『低』だ。なんというか、すごく……俺の好みなんだけど。

腰に手を当てて片足に体重を乗せている少女は、不機嫌そうな顔で、じろじろとこちらを見てくる。

俺も見ているから文句は言えないのだが、そんなに見られると照れる……なんてことはありえないけど。

「お前、霊夢か。なんだ、ここに来るならユウジの奴だと思ってたのに。ていうか、なんでお前が来るの？お前、『精神的に向上心のない奴は、馬鹿だ』とかいわれても平気でぐうたらしてそんな奴なのに。よりによって修行とか、笑っちゃうね」

少女は、いきなりぺらぺら喋りだしたかと思うと、こちらの事を馬鹿にしてきた挙句に、ふ、と嫌みな笑いを零した。

正直くそうぜえ。可愛さ余って憎さ百倍？好みの娘だからこそ、むかつく。

というか、俺は霊夢なのだから、短絡的に感情を発露してもいいわけ。

「うっさいわね。なんで見ず知らずのちんちくりんなあんたにそこまで言われなきゃなんないのよ。ていうかあんた誰よ。初対面の人にはまず自己紹介をって親に習わなかったの？」

怒りとしてはかなり小さい部類のぶつけかたでそう言って、そういえば、と思い返す。

こいつ、さっき俺の名前を呼んだな。それどころか、俺の…霊夢の事を知った風なことを言っていた。

「うに！！うるせーなお前！！ちんちくりんは関係ねーじゃねーか！！」

悔しそうに地団太を踏む少女に対して、警戒心を抱く。なんだ、なぜこいつは俺の事を知ってるんだ？

お札にゆつくりと霊力を溜めながら、すり足で一步後ずさる。

ばれないような霊力のため方は、さっきの修行でよく学んだのだ。

「それに、ボクに親なんかいない！！」

ぐっと拳を握りしめてこちらを睨み付けてくる少女。

僕っ娘だと……好みに、ドストライク。

おつと危ない、一瞬意識が遠のきかけた。今はそんな事は関係ないんだった。

とつちめて、なんで俺の事を知ってるのか吐かせるか…？

「ボクの名前は博麗優菜！お前とおんなじ博麗の巫女さ！なんていっても、お前のずっと前の代の、だけどね」

ふん、と息をついて、睨み付ける。名前はわかったが、それだけだ。警戒は解かない。

と、少女…優菜とやらが、腕を組んで、息を吐いた。別に、お前と喧嘩するつもりはないよ、と言った。

「あんたに喧嘩するつもりがなくても、私にはあんのよ。あんた、なんで私の事知ってる訳？それと、ここはどこかってこと、吐いてもらっわよ！」

言葉と共に、札を投げる。同時に横っ飛びに飛んで、懐からお札を三枚纏めて引き抜いて、相手の動きにそなえる。

あんなちんちくりんでも一応は博麗の巫女。一体どれ程の強さなのか、まずははからせてもらっ。

追撃に、三枚の札を投げようと最小限の動きで腕を振ろうとすると、

「あだっ!？」

と間拔けな声を上げて、自称巫女は吹き飛んだ。

……滅茶苦茶弱え。

途端にやる気がそがれて、脱力する。振ろうとしていた手をおろして、地面に降りた。

女の子座りで札の当たった額を抑えて涙目になっている少女を見据えて、溜息をつく。

こんなのが巫女？昔の、巫女？はあ、昔の巫女のレベルが知れるもんだ。

と、少女はすつくと立ち上がって、額を抑えたまま、や、やったなあ、と憎々しげにつぶやいた。

怖くない。むっちゃ可愛い。

もう連れて帰ろうかなあと半ば本気で考えていると、少女はびしっ!とこちらに指を突き付けて、

「霊夢だと思っ て下手に出てれば!!もう許さないから!!」

と、そんなことをのたまった。いや、お前下手になんか出てないから。最初っから喧嘩腰だったから。

あきれてものも言えずに、ただ見つめていると、うぐ、と涙をこらえるように嗚咽を漏らして、

「ぼ、ボクが本気出したら、お前なんか、一瞬で殺せるんだぞ!!」

本当に、呆れた。こんな巫女が居てもいいのだろうか。
態度に出すように眉間を指で押さえて、大きく息を吐く。
もういいや、修行は飽きた。これでもう充分だろ。とつとここから出ようと思いを切り替え、少女に話しかけようとする。

その瞬間、目の前の少女の霊力が膨れ上がった。それも、全力の俺と同じくらいまで。
目を見開いて固まっていると、ごしごしと目を拭った少女が両腰に手を当てて、へへん！と得意げに息を巻いた。

「たえお前にだって、こんな霊力は出せないだろ。どーだ、思い知ったか！！」

そう言つて腰から、なにやら青い銃を取り出した。銃身がやけに平べったいその銃口を上に向けて、にやりと笑う。

おろしていた腕を上げた。手の内にある三枚のお札に、霊力を通していく。

とある懸念が、俺にはあった。
なにせ、こいつは『また』俺の事を知っているようなことを言ったのだ。

「あんた、いったい何者？」

少しドスを利かせた声で、質問する。すると少女は、流し目を送るように細めた目でこちらを見て、芝居がかった口調で、

「とおりすがりの空飛ぶ巫女だよ。覚えておけ!!」

と、そう言った。

仮面ライダーの間違いじゃないのか、という言葉を読み込んで、思いを強める。

こいつ、知っている...?

つまるところ、俺と同じような存在、所謂オリ主的な何かじゃないかと、俺は推測する。

だったら、不意をつけそうだな。霊夢だと思っていた奴が、唐突に霊夢には知りえないことを口走ったら。

「あつそう。覚えとかないわ」

軽口がわりにそう言って、抑えていた霊力を開放する。多分、ここは夢の中の様なものだから、全力を出したって平気だろ。無論、その夢の中に紫が入ってきたりしたら、即ばれるんだけど。

優菜が、驚愕に表情を染める。

ありえない、とその口から零れそうだった。

霊力のたまった札を懐に戻して、腰だめに両手を添える。

それから、その手の内に霊力を集めていく。

「かー、めー...」

え?と優菜が声を出した。

気にもかけずに、さらに霊力を集めていく。

「はー、めー…」

ようやく、優菜が動いた。俺と同じように懷に手を突っ込んで、慌てて何枚かお札を取り出す。

いや、あれはお札か？一種、カードのようにも見える。なにより、大きさがお札よりも明らかに小さい。

優菜はそれのうち一枚を青い銃の横腹から差し入れて、押した。

機械音と機械音声が鳴る。

お前、それは…！？

内心驚きつつもたまりにたまった力を、前へと押し出す。

「波あああああああ！！！」

青白い光線が、優菜へと伸びた。と、機械音声が鳴り、優菜の姿が掻き消える。

光線は遠くの白い空間へと消えていった。すぐに体勢を立て直す。なにやらカウントダウンのような機械音声が聞こえるが、無視して、後ろへと回し蹴りを放つ。

思った通りに後ろに現れた優菜の腹に踵が突き刺さり、吹き飛ばした。

大体、消えた後って後ろに現れるのが定石だよな。

そんなことを思いつつ、吹き飛ぶ優菜に、捕縛結界のためのお札を数枚飛ばした。

「おまえ、ほんとに霊夢かよー」

捕縛結界の中で、しゅんとした優菜がそんなことを呟いた。結界の前で腕を組んで仁王立ちをしている俺は、ふん、と鼻を鳴らす。

優菜は、顔を上げて、不安そうな表情をこちらに向けてきた。そのめには、うつすらと涙がたまっている。

「ね、ねえ…なにすんのさ、あの…痛いこと、しないよね…?」

弱弱しく放たれたその言葉に、さあ?どうかしらね、腕の一本や二本や三本、と答える。

すると、見るからに怯え始めた。一瞬かなり気の毒になってしまったが、その感情から『浮く』事によって、同情を回避する。

こいつの本当の年齢は知れないし、性別だって、どうなんだか。
睨む強さを強めると、優菜は頭を抱えて、

「なんでも言うから！だから痛い事しないで！！」

俺は溜息をついて、この謎のちんちくりんから情報を得ることにした。

「……と、言うわけなんだけど…信じてくれる？」

そう言って、愛玩動物系の目をこちらに向けてくる優菜。それに、

にわかには信じがたいわね、と返して、情報を整理する。

曰く、彼女はもとはことは別の世界にいて、そこでは平凡な男をやっていた。

曰く、気がついたらここにいた。そうして、この身体になっていた。曰く、この世界を知ってはいたが、自分の知る未来まで生きることが出来なさそうなので、ここに精神だけを宿した。

曰く、ユウジとは親代わりの半人半妖の男の事で、そいつもこの世界を知っていたらしく、そいつは長く生きるだろうから、こうしていればいつか会えるかもなあ、と思っていた。

その男の事なんて聞いたことない、と答えると、え、だって、神社のふもとの森に小屋があるでしょ？そこにいるんだよ、と言われた。たしかに記憶の中では森に小屋はあったが、中には人が住んでいるような気配はなかった。

それを正直に言つと、優菜は、そっか、死んじゃったのかな、と悲しそうに呟いた。

なんか、結構危ない事まで俺に話してしまっているが、別に俺はこいつを咎める気にはなれなかった。

なんでかというと、まあ、くだらない事なのだけれど。

こいつの昔の、本当の名前が、俺の昔の名前と同姓同名だったからそれに、好みだし。あと、『浮いた』はずなのに同情しちゃったし。

優菜は、自分はもう長くはもたないだろう、ともいった。

もう、自分を保つための霊力が底を尽きかけてるんだ、と言う。

たしかに、先程と比べれば、妖精ほどにまで霊力が減っていた。抑えているようではないし、本当の事だろうと判断する。

しばらく無言で向かい合っていたが、不意に、優菜がぼつりと呟いた。

「…そっかあ、あいつ、死んじゃったのか。ここにいる意味、無くなっちゃったじゃんか。だったらもう、会いに行くしかないよなあ」

そうは言うものの、どうしてか優菜は、絶対に会えないとわかりきっているような顔をしていた。

そのことを聞いてみると、

「だって、あいつの師匠は、どこもしれない亜空間に消えちゃったし、あいつもそれを追って行っただよ…」

それにさ、と続ける。きっとさあ、こんな風に生き延びてたボクにさ、映姫がなにも言わないわけじゃないと思うし…。地獄行き確定じゃんか…。

そう言って頂垂れる優菜の肩に、ぽんと手を置く。

なんかよくわからないが、俺よりお前の方が主人公みたいだなと思いつつ、腕だけ通していた結界の穴を広げて、結界を解いた。それから、抱きしめる。うわ、やわらけえ。

「なんかよくわからないけど、それが嫌だったら私と一緒に来る？」

ふるふると首を振る優菜。無理だよ、ここから出れないし、紫が怒りそうだし…、と呟く。

耳元……吐息が……じゃなくて。

「意識だけなら、ほれ、私の中に空きがあるわ。あいにく自我を保てる保証なんて微塵もないけど」

そう言うのと、啞然としているのか、少しの間黙っていた優菜はすこしだけ笑って、うーん、地獄行きよりはいいなあ、ところで、お風呂についてる？と聞き返してきた。

ええ、バスもトイレも完備よ。二十六畳のただっぴろい貸部屋。また優菜は笑って、じゃあ、敷金礼金もゼロなら入居する、と言った。

じゃあ決定ね、と俺も笑って、無理矢理に空中に陣を描きこんで、ありったけ霊力を注ぎ込む。

眩い光が放たれたが、ここまでくっついていれば、優菜の姿が見えなくなることはなかった。

「ほいじゃあ、ん」

言うのが早いか、顔を合わせて、次いで、くちづけをする。

優菜が驚愕に目を見開いたが、気にせずに続行。くちが小さい。

そうして、二人はひとつになり。俺の霊力は、少しだけあがった。

と同時に辺りの景色が蔵の中のものへと戻った。

…とくに、かわりがない。違和感も、無い。

ただ、物凄く精神的に疲れが来たが、それ以外には何もなかった。

「…ゆうな―」

ためしに呟いてみたが、返事はない。

恥ずかしさに赤くなつた顔を抑えつつ、身体を休めるために縁側へと移動することにした。

…結局、優菜は自我を保てなかったらしい。…ああ、かわりに、夢の大異変とやらについて、すこし記憶が手に入った。といっても、何故だか微々たるものだったのだが。

夢の大異変。

幻想郷中の人妖なにもかもを問わず、そのほとんどが死に絶えたという異変。

ただ、それはとある妖怪が起こした夢の中の出来事だった、という事だけ。

まあ、そんな昔の異変を知ったところで、何もないんだけど。

縁側でお茶をすすりつつ煎餅を齧りつつ、身体を休めてまったりとしていると、魔理沙が飛んできた。

今日は、夕飯をいただいでくぜー、と魔理沙が言っつて、ニカリと笑った。

うーん、やっぱり魔理沙がいると今夜も退屈しなさそうね、となんとなしに思っつて、はいはい、と返した。

少し変わった俺の一日は、そうやって更けていくのだった。

博麗式修行教室（後書き）

はやく紅霧異変にはいらないと方向性が南の銀河に向いてしまいそう…

私を知る外来人なんていない（前書き）

うん、まず謝りたいです。

急いで書いたせいか、すごく……支離滅裂です。

ああ、それにしても、もう片方の吸血鬼幼女が主人公の話も進めた
いし、夢で見た風見幽香に憑依して……っていうのも書きたいな。
神・エネルに憑依した夢も見だし、伊吹萃香に憑依する夢も……。

ああ、書きたい。

私を知る外来人なんていない

七月に入り、段々と暑さが増してきた今日この頃。

季節の花は咲き乱れて、うっとおしくらいに照っている太陽の光を浴びている。

そんな夏の日な訳なのだが、私は縁側に座っていた。

別に日光浴をしようってわけじゃあない。

それどころか、暑さにイライラが募るばかりだ。

じゃあなぜ縁側なんかにいるかって？

異変がいつ起こるかわからないから、こっやって空を見張ってんだよ！！

…っと、自分に当たり散らしたって意味がないな…。

俺は、夏の暑さといつ紅霧異変が始まるかのイライラで爆発寸前だった。

そんな俺を見て、魔理沙はさっき帰っちゃったし、つまらない事の上ない。

と、いうわけで俺は、妖怪でも懲らしめようと（いぢめようと、の間違い）神社の麓の森へと飛んで行った。

「あー、木陰って意外と涼しいなー」

そんなことを呟きつつ、低空飛行で森を飛ぶ。なんかあちこちに大小の妖力を感じてうざったい気もするが、まあ、気にしない。

頭上は木々が生い茂らせる葉でおおわれていて、ほとんど太陽光が入ってこないし、涼しくて快適だ。

時たま見かける様々な妖怪を懲らしめて（いぢめて、の（ry）気分を晴らし、すこし機嫌がよくなってきたとゆるゆると飛んでいると…。

「うわあああああああー!!」

「ん?」

遠くの方で、若い男の悲鳴が聞こえた。

うわー、めんどくさいとこにでくわしたみたいだな、と思いつつも、巫女としては見逃すことが出来ないの、声がした方に飛んでいく。

現代風の高校生くらいの若者が四足歩行の犬妖怪に襲われていた。

感じる妖力は微々たるものだが、あの外来人らしき男にとっては脅威以外の何物でもないだろう。

あらま、すっかり怯えてらっしゃる。

と、男がこちらに顔を向けた。

「あつ！れ、霊夢だ！！助かった、こっちだ、こっち！！」

うん？と眉を顰める。

何かが引つかかるのだが、今はこの男を助けることが先決なわけで、袖に手を入れて、封魔針を一本取り出す。いつもお札やらしか使っていないので、こっちにも手を出しておこうと思ったのだ。霊夢、針飛ばすの得意だったみたいだし。

男の前でうごめいていた妖怪が、男がこっちに走り出したのにあわせて、男へと飛びかかった。

俺のことは眼中にないのかい！と急いで針を投げようとした時に、ぴきん！ときた。

俺の勘が、動くなと警笛を鳴らす。

思わず身体を強ばらせると、男を助けることに間に合いそうになくなった。

目の前で、妖怪の爪により下半身をなくした男がずしゃあ、とこち

らに滑ってきた。鮮血をまき散らす男は放っておいて、妖怪を結界で捕縛しておく。

それから、男の側に降り立って、腕をひとふり。男の下半身がみるみるうちに治っていく。

「す、すげえ！助かった！ありがとう霊夢！！」

男はそう言いながら立ち上がった。

別に、治してなんかないけどね。ちょっとした幻覚だ。

俺よりも頭ふたつ分でかい男を見上げていると、男は、俺の顔をじろじろと舐め回すように眺めながら、歓声を上げた。

「うわー！うわー！霊夢だ！かわいいーなあ！！」

なんというか、不快だった。

まゆをしかめて不機嫌オーラをだしていると、男は察したのか。

「う、わ、悪かった……それにしても、ああ、おれもついに幻想入りかぁ……信じらんねー」

男は興奮しているようで、しきりに周りを見回していた。ただ、俺は、その言葉で察して、確認のために口を開く。

「あなたは、知っているのですか」

冷たい、声音だった。

周りの温度が下がってしまったかのように。

男が、息を飲んだ。

「な、なに、を……」

聞き方が悪かったのかと思い、質問をかえる。

「あなたが好きなキャラクターは？」

「え？えっと、おれは……魔理沙かな」

混乱しているのか、あっさりとその言葉を口にしてしまう男。
にこりと、微笑みかける。

すると男はほっと息を吐いて、胸を撫で下ろした。

何だよ……と安心したようにつぶやく。

俺は、笑顔のまま術を解いた。

途端に、男の下半身が消えて、その身体が地面に落ちる。

「え？あ、な、なんでっ！！いぐあ！？あ、あああ」

治ったはずの足が消えて、混乱を極める男に、ざり、と草を踏みしめて一歩、近づく。

「たす、たすけっ、うわっ、れいむっ」

絶えぬ笑顔をたたえて、苦痛に顔を歪ませあえぐ男に、俺は手を差し出した。

それに、必死に縋りつこうと手を伸ばす男。

「知らなければ、帰れたものを。知ってさえいなければ、助かったものを」

釣り上げていた口を開いて、笑顔のまま、冷たく言い放つ。

差し出した手が一瞬発光し……どさりと、男があげていた顔が地に落ちた。

絶命し、力なく落ちた男の腕を蹴り退けて、ふん、と息をつく。

…そういえば、紫の奴が外来人がどうのと言ってたな。

ふと思い出して、男の顔を見る。

額に小さく赤い斑点のように模様がついていて、そこからだくどくと血液が流れていた。

あー、やってしまったけど、別によかったよな？どうせもう助からなさそうだったし。俺は楽にしてあげただけだ。

うん、そうだ、と自分を正当化して、頷く。やはりというか、人を殺しても、何も感じなかった。

もう一度、男の顔を見やる。

俺に助けを求めている表情のままで、時を止められているかのように

に固まっていた。まあ、事実、この男の時はもう進まないのだけだ。精神的な意味で。

「…せめて、墓ぐらいは作ってやるか…」

上を見上げて、ぼつりとつぶやいた。

返事をしてくれるものは、誰もいなかった。

光弾を放つ。無造作に地面に向けられていた手から光の玉が放たれ、爆音とともに地面を穿つ。

大の大人一人くらいが入れそうな穴が開いた。

そこに、男を蹴りいれて、周りの土をてきとうに蹴りいれていく。ふと、まばらに妖力を感じて、土を蹴りいれる行為を止めずに辺りを見回すと、妖精たちの顔が見えた。

興味津々な様子でこちらを見ているが、少し霊力を纏って見せるだけで、大多数が逃げ出していく。

残ったのは、妖精にしては肝が大きい奴か、余程の馬鹿か。

辺りを見回しつつ土を蹴りいれてると、ようやく埋まってきた。あの程度踏み固めて、額をこする。

別に、汗なんかかいてはいないが、何となく。

「っ！？」

何かが投げ込まれるのを感じて、ばっ！と飛び退る。

先程まで俺がいた場所に落ちたのは、どこその高校指定っぽいポストンバッグだった。

一目散に逃げていく妖精の気配。どうやら、悪戯のつもりだったらしい。

ひょいとバッグを拾い上げる。ファスナーが空いていた。

中に手をつ込んで、物色する。

出てきたのは、教科書ノート数冊ずつ、参考書が二冊、菓子パンが三つ、うち一つは開封済み。

液晶画面の壊れたミュージックプレイヤーに、飲みかけのペットボトルのコーラ。それから、ブドウの果汁のガム。

ニ。テ。ド。ー。D。S。L。i。t。eに、カセットが一つ。溶けかけの板チョコレート未開封が二つ。

それから……書籍、東方求聞史紀が一冊。

取り上げてぱらぱらとページをめくると、魔理沙の紹介の項に折りたたんだ紙がはさまれていた。

開いて見ると、俺が魔理沙を組み伏せて、大人のおもちゃを使って遊んでいる絵が描かれていた。

下の方に、『魔理沙がやられてるのがポイントだZ E』と走り書きされていた。

顔をしかめる。

あの男、やはり殺して正解だったな、と呟いて、懷に紙をしまいこみ、持っていくものをかき集める。

それから、バッグを即席の墓の方へ投げて、ふと、気が付いた。俺の結界の中でもがく低級の妖怪の存在に。

……あ、いたっけお前。

一瞥くれるだけやって、空へと浮かび上がる。

結界の中に、範囲を狭めるように汚れを被う為の強い霊力を、範囲を狭めるようにじわじわと充満させ始めた。徐々に消えていく自分の身体に恐怖して、あの妖怪は真正正銘、消滅するだろう。

存在自体を消し去られては、精神に頼る妖怪はひとたまりもないだろうし。

森の上空へと昇ったときに、あ、死体を残しておくのは後々に響くかも、と思い立って、男を埋めたところに顔を向けた。

遠くて少し見えづらいが、なんだか、地面から手が突き出ているように見えた。

げ、埋めるの失敗してやがる。…でも、戻るのはめんどくさいな。

じゃあ消すか。

短絡的思考を進めて、光弾を一つ放つ。

激しい光が放たれ、重い音が耳朶を打つ。クレーターのできた眼下の森から目を背けて、さっと家へと飛んでいく。ちなみに、荷物は霊力を纏わせて自分の横に浮かせている。

…ああ、知ってしまったっている外来人なんて、いらない。

しかし、知らないのであれば、別にいいか。

私を知る外来人なんていない（後書き）

霊夢の殺人犯つ！！

いいえ、ただの鬼巫女です（意味不明）。

……どうせ助からなさそうだったし、いいよね？

東方紅魔郷

くさっそく異変の首謀者を征伐しに出かける！後に続け魔理沙！

題名関係なし。

そして、ついに紅魔郷が始まる…。

うーん、展開どうしよう…。

東方紅魔郷

くさっそく異変の首謀者を征伐しに出かける！後に続け魔理沙！

「っしやあ！きたあっ！」

夜空に浮かんでいるまんまる満月と満点の星空を縁側から眺めていた俺は、遠く、人里の方角の空に雲のように広がる紅い霧をみつけて、思わずそう叫んでいた。

ガラスのうつわにはいった魔理沙お手製のミルクアイスをスプーンで口にかきこんで、大慌てで室内へと戻る。

ドタドタとあわただしく廊下を進んでいると、廊下の奥から洗濯物を抱え込んだ魔理沙が現れた。とんがりぼつしをかぶっていないのは、家内だから、だ。

「おお、どうした霊夢。そんなに慌てて」

抱えた洗濯物の陰から不思議そうにのぞく魔理沙の顔に、異変よ異変！と声を大にして叫び、横を通りぬける。

…異変？と、風にはためく黒いロングスカートを手でおさえることもせずに、魔理沙が聞いてきた。

俺はすでに突き当りを曲がっていたので、振り返ることなく大声を上げる。

「そーよ！異変！！」

言いつつ、台所に駆け込んだ。

水道台に叩きつけるようにしてうつわを投げ込んで（靈力を纏わせ
たので万事OK）、踵を返して、身だしなみを整えるために寝室へ
と走る。

廊下で、また魔理沙とすれ違う。

「靈夢！なんだありゃあ！」

洗濯ものを持っていないのを見るに、片付けてから外に見に行った
らしい。

魔理沙が異変を知らないのは、ひとえに、ここ連日神社に泊まって
いたからだ。

具体的に言つと、二週間程度。食事当番は交代制。

「見てのとおりよ！どっかの馬鹿が異変おこしやがったのよ！！」

寝室に戻った俺は、とっときの巫女服に着替え（見た目に変わりな
し）、最高の防具下着も身に着けて、お祓い棒を手に寝室を後にす
る。

ドタバタと、新学期初日から寝坊してしまった学生のように走りな

がら、居間に向かう。

今度は廊下で魔理沙に会うことはなかった。
何故なら、魔理沙は居間にいたからだ。

居間。

卓袱台に向かって正座しながら入ってきた俺を見る魔理沙。魔理沙のすぐ前に、お札が大量に用意されていた。

「さんきゅ！それ取りに来たのよ！！」

かつさらうようにお札を取って、ほとんどを懷に押し込み、何枚かを頭のリボンに仕込む。

「行くのか？霊夢」

俺の顔を見上げて、そんなわかりきったことを聞いてくる魔理沙に、あたりまえでしょ！と返そうとして、大事なことを思い出した。

「…よく考えてみたら、別に急ぐ必要はなさそうね。お茶飲んでから行くことにするわ」

そう言いつつ、魔理沙の対面に腰を落とす。

そうか、と魔理沙は呟いて、膝に手を当ててよっこらせと立ち上がり、台所に入ってしまった。お茶をくんできてくれるのだろう。気の利く人だ。

魔理沙を待つ間、貧乏ゆすりをして、逸る気持ちを抑える。まてまて、原作の大きな出来事に興奮するのはわかるが、霊夢の性格を思い出せ。俺の性格を前面に出しちゃあいかん。
…といっても混ざってるのだから、この気持ちは紛れもない本物、なのだけど、今はそんなことはどうでもいい。

魔理沙がお盆に湯呑みを二つ乗せて戻ってきた。

ご丁寧に、羊羹まで切ってくれたようだ。魔理沙大好き！！

魔理沙が差し出す湯呑みを受け取って、あたかも落ち着き払っているかのようにお茶をすすって、息を吐く。うーん、お茶がおいしい。魔理沙が淹れてくれるお茶は、俺が淹れるのとはなんだか味が違う。つかっているものは一緒なんだけどな。

「はあ、なんだか、平和ねえ」

魔理沙が湯呑みを口に運びつつ、俺の言葉に苦笑を零した。

目を細めて、右手で底を支えて、左手を添えるだけしている湯呑みの熱さを感じる。

じんわりと、お腹に暖かいものが流れていく感覚……くう、たまんないね。

湯呑みを右手に持ち替えて、左手を伸ばす。爪楊枝が刺さっている一切れの羊羹をひよいと取って、口に運ぶ。もぐもぐと咀嚼してからお茶を口内に流し込み、羊羹の程よい甘さと、それに合うお茶の

ほろ苦さと言うか、深みの様なものを楽しむ。

俺、クリームソーダが好きだったんだけど、今となってはお茶の方が好きになってしまったかも。

ずず、とお茶をもう一口。ほふう、と何とも日和見な息を吐く。

「ああ………まったく日和ねえ………」

大分落ち着いてきた……いや、落ち着きすぎてきたせいか、そんなことを呟いていた。

「どこがよ霊夢。異変、まさかりじゃないの」

そんな、咎めるような声が、後ろからした。魔理沙が驚いているのを数秒眺めてから、声がした方向、背後に、ゆっくりと身体を向ける。

紫が、空中にできた亀裂から胸から上だけを出して、何時の間にか取ったのか、羊羹をほおばりながらそこにいた。

ふとしてみると、それはあまりにも異常な光景だった。胸から下が無く、斜めに浮いて見える………怪奇、上半身空中浮遊女。あ、すごい退治したくなる名前になった。

恐らく羊羹の甘さだとかは関係ないだろう胡散臭げな笑みをたたえて、指先で楊枝を弄りながらこちらを見てくる紫に、特に何も言わずに、ただ気だるげな瞳を向けて、お茶を一口すすする。それから、魔理沙の方に顔を向けて、くい、とあごで台所を示した。何か言いたそうにはしていたものの、察してくれたのか、ぐいっとお茶を飲

み干して、立ち上がった。

「じゃあ霊夢、私は洗い物しとくぜ」

と言って、食器をお盆に重ねて持って、台所に引っ込んでいった。
溜息をついて、紫に顔を向ける。

「で、何の用よ」

俺の言葉に紫は困ったように頬に手をあてて、

「霊夢……貴女、巫女でしょう？」

と、それだけ言った。

「あーはいはい。外の霧ね、やればいんですよ」

さもめんどくさそうに首をこきこきと動かしながら、緩慢な動作で立ち上がる。

「で？誰がその異変を起こしてるのか、わかってるの？」

知っているとはいえ、とりあえず聞いておく。といっても、紫は真正直に教えてくれたりはしないんだろうけど。
案の定、紫はくすくすと胡散臭く笑って、

「幻想郷を覆う紅い霧は、夏の日差しを遮ってくれて、なかなかいいのだけれど、その霧を吸ってしまうと体調を崩すと言われていたのよねえ。それに、いいかげん目が痛くもなるわね。誰かしらね、日の光を遮って楽しんでいるのは」

と長ったらしくいつてくれた。正直に言うと、夏の日差しゝあたりから聞いてなかった。

でもどうせ遠まわしに遠まわしたことを言ったのだろから、取り敢えず文句を言うそぶりを見せると、「身体を大事に、かんばつてね」と間延びした声を残して、亀裂の中に消えて行ってしまった。それを見届けてようやく俺はスイッチを切り替えた。

「っし、行くか!」

ぐっと拳を握りしめて、気合を入れる。それから、紫が来た瞬間に卓袱台の下に押しやっておいたお祓い棒を拾い上げて、準備を整える。

紫に怠惰なる巫女姿を見せたのは、そりゃ霊夢は言われなければ動かない奴だからだ。まあ、解決に乗り出した途端に積極的になるのだけれど。

台所から聞こえてくる皿同士がぶつかりあう音をバックに、さて、行くぞともう一度気合を入れた

……ああ、その前に。

「……トイレ」

尿意が襲ってきた。
やられたぜ。

お手洗いに行つて、気持ち的にすっきりした俺は、いよいよ出発することにした。

「行ってくるわね、魔理沙」

振り返つて、縁側に立つ魔理沙に声をかける。
魔理沙は、片手を軽く上げて、

「おう、行って来い霊夢。私は家事を片付けてから行くぜ」

と言った。ニカリとした笑みが月明かりに照らされた姿と相まって、本当に似合っている。

ああ、ていうか来る気満々か。原作だと、二人とも来ていたことになってたかな…？

まあいいか。来るっていうなら、それが原作だろ。

「ああ、そうだ霊夢。洗濯物のお前の巫女服の袖の中にブドウの絵が描かれた変なものが入ってたけど、洗濯物出すときはちゃんと中身出しとけよー」

ブドウの…？ああ、ガムか。興味なくしてそのままにしちゃったな。それにしても魔理沙、ガムくらい知らないのか？

わかったわ、と返して、魔理沙に向けていた体を反転させ、星空に顔を向ける。

「じゃ……………陰陽玉よお……………い！」

口に手を当てて叫ぶ。

すると、霊力を纏った博麗最大の秘宝が俺の目の前に飛来して、膝のあたりで止まった、ぴよんと飛び乗って、魔理沙がほうきに乘ってやるように、もしくは

はサーフボードに乗るような格好で、

「行くわよ!!」

勢いよく飛び出した。

巻き起こった強い風から顔を守っていた魔理沙は、手を下して、小さく呟く。

「霊夢……その行き方は流石に無いぜ……」

魔理沙の言葉を聞いてくれたのは、静かな神社と、輝く星々、それに——満月だけだった。

東方紅魔郷

くさっそく異変の首謀者を征伐しに出かける！後に続け魔理沙！

前回の話ってあんまり意味なかったかな。

なにはともあれ、ついにはいった。

でも原作通りとか言っておいて、すこし…外れそうな気がする。

ううん。頑張らなくては。

宵闇の妖怪・ルーミア（にほおずりしたいな）（前書き）

短さ満点。

原作の台詞集を見ながら書いてるせいかな場面描写が淡泊に…。

宵闇の妖怪・ルーミア（にほおずりたいな）

「百八十一匹……百八十二匹……百八十……三四……五匹……」

紅い霧がはびこる空、眼下に森が広がる空中に、紅と白からなる巫女服を着た人間が、光の尾を引いて、かなりの速度で飛んでいた。その人間に向かって、木々の陰から遠くの空から、どこからともなく現れてくる数十数百という数の妖精たちがちよっかいを仕掛け、次々と地に落ちて行った。

異変のせいかわ、興奮状態に陥ってかなりパワーアップしている妖精たちを落としては、その数を数える。

その巫女の通った後に、動ける生き物はいなかった……。

「二百十三……二百十……八匹！」

自身は神速ともいえるスピードでお札を、または封魔針を投げ、オプシオンとして陰陽玉から霊力弾を放たせ、外灯の光に群がる虫のように湧いて出てくる妖精たちを、一匹たりとも逃さずに撃ち落していく。時には放った霊力弾や針が妖精の身体を貫き、儚く光の粉を振りまいて一瞬のうちに消える。

しかし、段々と面倒くさくなってきた。

いや、妖精を打ち射落とすのは楽し…もとい仕方がない事なのだからしょうがないけれど、いい加減数えるのもお札や針を投げるのも面倒くさい。それに、お札がもつたいない。針なんて、お札の倍、作るのが面倒なのだ。

きゅっと、お祓い棒を握る左手に力を入れる。それから、横にいる、地面へと落ちていく下半身のない妖精に向けていた視線を前に向けた。

妖精たちが妖力弾を放ってくるが、避ける必要もない。俺に当たる前に、速く飛ぶために放出している霊力に当たって消えてしまうからだ。

腕を動かすのもめんどくさくなってきて、腕を下ろしたままの自然な体制で霊力弾を飛ばす。

ピチューン、ピチューン、ピチューン。

どの弾も寸分たがわず妖精の急所に命中し、断末音を響かせる。

口の端を吊り上げつつも、霊力弾を飛ばし、持続的にその音を響かせる。

夜の森に、奇怪な音が響き続ける。幻想郷では、馴染み……なのかどうかは知らないが、よく聞く音。

妖精が外的衝撃で『死ぬ』時、その音は響くものだ。

ああ、しかし避ける必要もない弾幕とは。

イージー以下じゃないか、たしかこの後はルーミアが出てくるんだっけか？せめてノーマル以上だと張り合いがあるのだけど……。考え事に没頭しつつ、しかし的確に霊力弾をばら撒く。

ピチューン、ピチューン、「うにゃーっ！？」ピチューン。

もし簡単にあしらえるほど弱かったら……

ネタ技の実験台にした拳句に、お友達になつてもらおうとしよう。

そうしたら、メイドるみゃにして、うちの神社のマスコットに……ふはは。

しかし、EXモードで出てくる可能性も無きにしも非ず、かな？そうしたって、まあ勝てるだろう。

ていうかあれは完全な二次創作だったっけ。

ふと、妖精たちとは違う風体の奴が視界の端に映った。そちらに意識を向ける。

黄色に近い金髪のショートボブ、左側頭部の髪に結ばれた赤いリボン……あれはお札だっけか、真っ赤な瞳に、横に突き出された奇妙な両腕。そして、小妖怪程度の妖力。

間違いない、ルーミアだ。

ルーミアは、腕を広げたままくるくと真っ逆さまに妖精の群れの向こう側に落ちていく。

なんだあれ。なんで勝手に落ちてんだ？

落ちて行ったルーミアを隠すように群れる妖精たちを落としてつつ、その隙間からなんとかルーミアの行方を目で追う。

……くそ、見失った。闇を纏いやがったな、森の暗がりには手くまぎれた。

近くにいた妖精に死んでしまわないように加減した霊力弾を浴びせかけて、気分を晴らす。

脇腹めがけて横振りに投げた針が、凄まじいスピードで妖精を運び、俺の前へと踊りださせた。

針に纏わせていた霊力が少し強かったようで、なんとも無残な姿になっている妖精の姿を見た俺は、それ以上攻撃を加えるのを止めた。いや、まあ、明日になったらここまでされたのも忘れてるだろうけど、ってそんなことは関係ない。

ち、妖精に当たり散らすなんて、ただの馬鹿だな。

自分が纏っていた霊力を霧散させて、急停止する。

お被い棒を持っていた方の手をぶんと振って、気を取り直す。息を吸って、吐く。それから、自分の記憶を思い返していく。最初はなんて言ってたっけなあ、確か……

「気持ちいいわね」

…だったかな。

それに続く言葉を、記憶からではなく、霊夢としてなら、どう言うかで考える。

そっぴや、いつもは昼に出てたっけな、と思い出し、次に口にする言葉を整える。

「いつも、昼間に出発して悪霊が少ないから、夜に出てみたんだけど…」

俺のよく通る綺麗な声があたりに響くと、妖精たちが、さあっと森へと逃げていく。

なんだ、ボス前の演出みたいだったな、今の。

わざと大げさな感じで辺りを見回して、それから目を細めて、前を見た。

「どこに行っていていいかわからないわ、暗くて」

右手で、髪の毛を梳く。でも…、と続けて言う。

「夜の境内裏はロマンティックね」

底抜けにのんきな声でそう言って、軽く笑みを浮かべてみる。

ほら、どうした。この言葉は、他でもない、お前のために言っているものだ。

早く出て来いよ。

「そうなのよねえ、お化けも出るし。たまんないわ」

来た！！

下に広がる森から、腕を広げたままのルーミアがゆっくりと上がってきた。

さて、こいつにはどう返すんだっけ。…ってそうか、名前きくんだったかな？

「って、あんた誰よ」

薄い笑いを浮かべているルーミアに、少しかたい声音で問いかける。するとルーミアは、さもご立腹のように、

「さっき会ったじゃない。あんた、もしかして鳥目？」

いんや残念。視力は抜群にいいほうだよ。

そんなふうに関抜けな言葉を返そうとしてしまって、あわてて口を抑える。

何変なこと言おうとしてんだよ、俺は。

ルーミアが小首をかしげる。訝しんでいるのか、すこしまゆがよっていた。

「人は、暗い所じゃ物が良く見えないのよ」

何かを言われる前に、さきに言葉を紡ぎだす。うつむ、これで合っているのかはなはだ疑問だが、まあいいや。

あら？とルーミアが零して、徐々に後ろへと移動し始めた。

それに気が付いた俺も、後を追う様な形で、ゆっくりと前に飛び始める。

「夜しか活動しない人も見たことある気がするわ」

「それは、取って食べたりしてもいいのよ」

ルーミアの言葉に、すぐに返す。するとルーミアは、くると闇にまぎれる色合いのロングスカートを翻して一回転。
にこにここと笑って、

「そーなのかー」

と、無邪気に……若干棒読み成分が入っていたが、言い放った。いや、放つて程の音量ではなかったけど。

左手に握りしめているお祓い棒を胸のところに持っていつて、眼光を鋭くする。

「で、邪魔なんですけど」

口に出した途端に、目の前の、この愛くるしいルーミアが、心の底から邪魔に思えてきた。

ああ、はやく異変の首謀者をとつちめて、神社でお茶でもすすつてたいぜ。

「目の前が取って食べれる人類？」

顔色を変えずに、ルーミアがそんなことを言った。

はーん、こいつ、本気で言ってるやがるな。……あ、今舌なめずりしやがった。

「良薬口に苦しって言葉、知ってる？」

風が、ふいた。

俺の髪を揺らして、ばたばたとスカートをはためかす。

前を飛んでいるルーミアにも同様に風がなぐ。髪が、スカートが、大きくはためいた。

……しるばーーーーん。

「それにね、食べていいのは夜に活動する人間だけじゃあない。背

を向けて逃げる人間もまた、取って食べてもいいのよ?」

へー、と、聴いているのかいないのか、ルーミアが返事をした。
懐からお札を取りだして、霊力を通しながら、俺は続く言葉を言う。

「つまり、向かってくる奴には、要注意ってこと!」

抑えていた霊力を開放する。二十パーセントの力、という奴だ。
ルーミアがはじめて、険しい表情になった。後ろ腰に手を回して、
ごそごそと動かし、カードを引き抜く。

さあ、戦いの始まりだ。

宵闇の妖怪 ルーミア

難易度 Normal

テーマ曲 妖魔夜行

少女祈祷中 , , ,

宵闇の妖怪・ルーミア（にほおずりしたいな）（後書き）

何故か引き伸ばし。

ルーミアをそーなのかーにするかどうかが悩む。

どうしましようか？

「ゝなのかー」「わはー」

とか言わせてみます？

巫女の強さ（前書き）

三連続投稿。頭痛い。

るみゃの可愛さにワンコンティニュー削られた、という話。
というのはウソです。

宇宙の帝王っぽく光弾を投げつけて、ルーミアをあられもない格好にする話です。

今度はわりとマジ。

巫女の強さ

「五枚!!」

カードを片手に、ルーミアが叫んだ。
スペルカードの枚数の事である。

ふん、と息をついて、こちらでも使用する枚数を宣言する。

「じゃあ、こっちは三枚にしたげるわ」

「後悔しないでよ!!」

俺の言葉に、ルーミアの表情が歪んだ。

俺の言葉にかぶせる様にして言うが早いか、ルーミアは弾幕をばら撒きながら距離を離れた。

それから、カードを掲げてスペルを宣言する。

月符「ムーンライトレイ」

弾幕が色を濃くし、緑黄赤色がぴかぴかと光って殺到してくる。

さっそくのスペル宣言だ。しかも、文字通り声に出しての。

難儀なもんだね、声に出すなんて。相手にスペルを使う事さえ気が付かせることが出来れば、声に出す必要がないとか何とか。まあ、俺も声に出すけど。だってその方が格好いいし。

目をつぶっていると言っても過言ではないほど目を細めて、すいすいと弾幕を避ける。

上から下から前から後ろから、平面とは違う妖精たちの弾幕に比べ
ると、うーん、なんというか、一方通行？

そんなことに首をかしげていると、二本の光線が俺を挟むようにル
ーミアの両手から放たれた。

持続的に放たれるそれは、俺が向かう先に回りこんできて、俺に向
かってくる。

だが、それがはいっても、やはりというか、俺は苦も無く弾幕を避
けていた。

そして、弾幕の間を縫うように飛んで、お札を投げつける。

いや、投げつけるなんてもんじゃない。バルカンのように秒間に数
十枚という勢いでお札が、陰陽玉からは霊力弾が放たれる。

それにのせて、封魔針をマシンガンのように連投する。

スペルカードを使っているのは向こうだというのに、こちらは悠々
と飛んで、向こうは激しく飛び回っている。お札のホーミング機能
から必死に逃げて、先読みして放たれる霊力弾にグレイズして、そ
れをさらに先読みして放たれる針に身を掠らせて。

「わっ！わっ！うわわっ！！」

主にぐるんぐると回ること俺の弾幕を回避するルーミアを、滑
稽に思っただけだったが、そろそろ飽きてきた。

しかし、時間切れでスペルブレイクするまでは待ってやってもいい

かなー、なんて思っていると、ルーミアはとうとう被弾してしまった。途端に、弾幕の嵐がやむ。

「うつそ……弱すぎるでしょ」

思わず、呟いていた。

だって、こっちはまだ一枚もスペルカードを使ってないんだぜ？ひゆるひゆると落ちていったルーミアは、すぐさま体制を立て直して、まだまだ！ともう一枚カードを取り出した。

それに、軽く首を振って返す。

「もう、終わりね」

いくら何でも、このまま続けるのは時間の無駄にしかない。

ここは予定通りネタ技で消えてもらって、さっさと先に進んでしまおう。

とは言ったものの、何をしよう…。

夜符「ナイトバード」

あーでもないこーでもないと思索していると、スペルを宣言されてしまった。

いったん収まっていた弾幕が再び勢いを取り戻していく。

ルーミアの背後から、まるで翼のように弾幕が放たれていく。円錐

を形作っていくそれらは、幻想的ではあったが、今はネタ探しで忙しいので見てられない。

殺到する弾幕をこれと言って気かけずにひよいひよいと避けつつも、何を使うかを考える。

と言っても、複雑なのはパスだ、とかいう前に、何にも思いつかないんだけどな。

ついと、左手で握っているお祓い棒に目がいつて、こいつでヒテンミツルギスタイル（笑）でもしようと思ったが、直接攻撃はルール違反だった。突進系ならいいかもしれないけれども。

「あーもーめんどくさい。ただ霊力溜めてぶっ放すだけのやつにしよう」

右手を握って、ぴ、と人差し指だけを立てる。

それを、ゆっくりと頭上へと掲げて、指の先に霊力を集め始めた。集まった霊力は圧縮され、密度を増していく。濃密な霊力の塊は、徐々に大きくなっていき、成人男性ほどの大きさにまで成長を遂げる。

それにしても、腕を掲げているというのに、ルーミアの放っている弾幕に掠りもしない。

俺が避けているからというのには当たり前だが、それにしても、釈然としないじゃないか。

無論、ルーミアが手を抜いているような様子はこれっぽちもない。

技が、完成した。

誰の目から見ても、これからスペルを宣言するぞと言っているようなものである。

ルーミアが、放たせまい！と弾幕の密度をあげてきた。しかし、あ

たらない。

さて、相手に確認させたし、放つか。

もう少し時間をかけさえすれば、それこそ太陽のような（あくまで表現的な意味でだ）霊力の塊を作り出せるだろうが、時間がもったいない。あと、そんなものを当てたら普通に殺してしまう。だから、これでいいや。これで十分だという事はわかるし。

「もう消えておしまいなさい」

呟くようにそう言って、腕を振り下ろす。

ゆっくりと……白濁とした光を放つ、それだけみれば、禍々しささえ感じる霊力球が、ルーミアへと迫っていく。

「ちょ、ちよつとまっ」

何やらわめくルーミアを飲み込んで、霊弾は爆発した。

一瞬辺りが激しい光に包まれて…すぐに視界が戻ってくる。

ルーミアが落ちていくのが見えた。今度は完全に気絶しているようで、体勢を立て直したりする様子はなかった。

そのまま放っておくのもなんとなく寝覚めが悪いので、飛んで行って抱きとめる。

お姫様抱つこと言っやつだ。

黒い服がぼろぼろになっていて、所々、下に着ている白いシャツや肌着、肌なんかが見えていた。

意味もなく陰陽玉に顔を向けて、こくり、と一人で頷く。うん、意

味はないんだけどね。

地に降り立って、近くの木にルーミアをもたれかけさせる。
妖怪なのだから。すぐ元気になるだろ。身体中の骨と言う骨を折
っても生きてるくらいだし。

いや、俺はそんなことしたことないけど。ちなみに、霊夢も。そう
いう話を誰かから聞いたことがあるってだけだ。

一分ほどルーミアの、悪夢にうなされているような顔を見続けて、
完璧に網膜に焼き付けてから、先を急ぐべく、空へと舞いあがる。
未だ空を覆い尽くす紅い霧。もたもたしていれば、外の世界にまで
その範囲を伸ばしてしまっただろう。

それ以前に、もたもたしていれば魔理沙が来てしまっただろう。

そうすると必然的に一緒に行動することになってしまう。するとど
うだ、原作から亜音速で離脱していつてしまう。

あくまで、俺一人で片付けなきゃな。

気を引き締めて、俺は先へと進んでいく。

そうそう、戦闘後の台詞も忘れずに。

「良薬っていつでも……飲んでみなけりゃわかんないけどね」

ぽつりとそう言って、霊力を纏い、夜の空を飛ぶ。

ルーミアはぴくりと頬を動かして………静かに寝息を立て始めた。

少女祈祷中……

Stage Clear!

巫女の強さ（後書き）

何か夢で、この霊夢が早苗にあいびゅんされてた。
うん、絶対許早苗。

……って言うて見たかっただけです。
常識にとらわれない早苗の新しい挨拶の仕方。
電撃ラブコール。

……あとがきに何かいてるんでしょうかね、私は。
あれか、次話にチルノが出てくるから（多分）感化されて……！
いや、それはない。

お前は悪役にふさわしい（前書き）

サブタイトルは主人公に向けて言っているものです。

自分の思い通りにならないと癪癪を起こすお前なんて、三下で充分だ、と。

自らの本質を吐き違えるお前には、その道しかない。

…主人公を貶してるだけなのに、なんで私のライフが削れて行くの
だろうか。
なんという自害。

お前は悪役にふさわしい

ルーミアを下した俺は、異変解決のために先を急ぐ。涼しくなってきた道中、異変でテンションの上がった妖精たちを逐一落としていくと、そこら辺の妖精たちとは格の違う妖力が近づいてきていることに気が付いた。チルノか？いや、たしかにもう霧の湖に入っているが、まだ入ったばかりで、いやに早すぎる。妖力が強いと言っても、さきのルーミアにも劣るほどの力だったので、どんな奴が来るのだろうと見ていると。

「ん！？」

突如として、目の前に妖精が現れた。慌てて急停止する。なんだと？気配を全然感じなかったぞ。

「その人間！博麗の巫女！ここから先は通さないよー！！」

緑の髪を左側頭部で結って垂らしている可愛らしい妖精。

こいつは……大ちゃんか！！

かわいいな、と心の中で呟く。が、そんな感情は、てんで湧いてこなかった。

「邪魔よ。私は先を急いでるの」

大ちゃん可愛い、と思う傍ら、邪魔だとか、めんどくさいだとか、不快な気持ちがかみ上げてきて、不機嫌になる。それが声に出してしまった。

「それとも何？あんたがこの霧を出した犯人？んなわけないわよね、流石に」

思ったことをそのまま口に出す。短絡的だが、これがほぼ本質だ。というか、誰だって先を急いでいる時に道をふさがれたりしたら不機嫌にもなるだろ。

大ちゃんは、無言でこちらに手のひらを向ける形で両腕を突き出してきた。おしゃべりする気は無いらしい。まあ、俺も無いけど。

構えた大ちゃんの後ろから、さつ、と大量の妖精たちが姿を現した。大ちゃんを中心に据えて、上下横一列に並んでいる。

妖精ごとき、いくら増えても無駄だっつーに。

「撃て！！」

大ちゃんの掛け声で、一斉に弾幕が放たれた。

しかし、だ。道中の妖精たちとなんら変わりが無い。要するに、ぬるい。

力は弱いが、量だけが多い弾幕の嵐を最小限の動きで避けながら、軽く腕を上げて、端に位置する妖精に人差し指を向けた。

チュン、と細いレーザーのようなものが指先から放たれて、寸分違わず妖精の眉間に命中して、その妖精を湖面に落とした。大ちゃん以外の妖精たちに動揺が広がる。

その隙を見逃さずに、一匹、また一匹と落としていく。

光線はすべからく妖精の眉間を貫通して、ついには、大ちゃん一人だけが残った。

「くっ……」

肩で息をする大ちゃんに人差し指を向ける。大ちゃんは、それでも恐れずに弾幕を放ってきた。ひよいひよいと避けて、先に進むべく、俺は光線を放つ。

……ふと思いついて、指先に集めた霊力を霧散させた。

ここは、道中だよな。ってことは、スペルカードルールは適用されていないよな？

指差し確認するように、大ちゃんに指を向けたまま一人結論付けて、こくりと頷いた。

「じゃあ、蹴つても問題ないわね」

言うが早いのか、一瞬で大ちゃんへと距離を詰めた。

光線を撃たれると思っていたのか、酷く驚いている大ちゃんの腹に膝を叩き込む。

「がッ！！？」

大ちゃんの声に、得も知れぬ快感が脳を駆け巡った。俺の膝の上に胸を乗せて苦しむ大ちゃんの背に生える二対の羽のちょうど真ん中に、軽く肘を落とす。悲鳴が上がった。

ううん、やっぱりか。なんというか、身体が動かしやすい。それに久しぶりだな、こうやって派手に動くのも。

運動不足をほぐすようにもう一度肘を打ち下ろして、大ちゃんの声を聞いて、口角を上げる。それから、苦痛に顔を歪めて咳き込む大ちゃんの襟首を掴んで、力任せに振り回して、後ろへと投げた。

どうにか体勢を立て直す大ちゃんに、顔にいやらしい笑みを貼り付けたまま、すつ、と指を向ける。

その指先から、連続して紫色の光線が放たれた。

マシンガンのように走るそれらは、大ちゃんの身体に当たる、寸前で大ちゃんが掻き消え、遠くのほうへと姿を消していった。

ぽん、と背中中に軽い衝撃。

ゆっくりと振り向くと、してやったり、といった表情の大ちゃんが、荒く息をつきながら、こちらに腕を向けていた。

「当たった……？妖精の、弾幕が、俺に」

思わず、零していた。無意識のうちに大ちゃんへと指を向ける。するとまた、大ちゃんは姿を消した。しかし、俺の五感が、そして勘が告げている。

死角に現れると。

すい、と指だけを後ろに向けて、高出力で細い光線を放つ。

ジュッ、と何かが焼ける音がして、高い悲鳴が響いた。

また、ゆつくりと振り返る。わき腹を押さえた大ちゃんは、歯を食いしばって悲鳴を堪えていた。

ああ、良かった。死ななかったか。

そう思いつつも、もうあの瞬間移動もできないのか、俺の指を睨みつけるだけの大ちゃんへと、みたび、光線を放った。

連続で放たれる光線は、大ちゃんの手に足に腹に顔に、身体のいたるところに命中し、小さく衣服を破り飛ばしていく。

中空で、光線に当たりびくんびくんとはねる大ちゃんは、さながら奇妙な踊りを踊っているようにも見えた。

無言で、絶えることなく放つ光は、大ちゃんの身体を貫くにいたら
ない。

流石に好きだったキャラクターを殺すのには、心のどこかでストッパーがかかるのか、それとも……。

ふと寒気を感じて、手を休める。

いつそう寒くなってきたな。そろそろ終わらせるか。

確か大ちゃんは中ボスで、倒さなければ先には進めないはずだ。

右手に靈力を集中させる。

あっという間に、小妖怪程度なら一発で消し去れるくらいの力が集まった。

右手を左に振りかぶって、もう浮いているだけで精一杯の様子の大ちゃんへと、振り下ろした。

途端、あたりの気温が一気に下がった。

「ん？」

大ちゃんの前に、青いものが飛び込んできた。

そいつは迫る光弾に腕を振って、バシン！と弾き飛ばした。

弾かれた光弾は、遠く、霧の向こうへと消えていき、重い爆発音と共にまばゆい光を放った。

一瞬後には、光は消えていた。

気にせずに、目の前の闖入者に目を向けた。

そいつの薄水色の、ふわふわとしたウェーブのかかった…ショートヘア？が、先ほどの光弾が発生させた風でたなびいていた。

頭の後ろの結ぶ大きな青いリボンに、スカートのふちに白いギザギザ模様のついた青色のワンピース、氷の羽。

でたな、二面ボス。

眼光鋭く俺を睨みつける氷精チルノは、光弾を弾いた姿勢からゆっくりと体制を戻していき、俺に顔を向けたまま大ちゃんの元へと後退していった。

「大丈夫か？大ちゃん」

チルノに肩を支えられて荒く息を吐く大ちゃんは、薄っすらと目を開いた。

「チルノ、ちゃん……来ちゃだめだよ……博麗の巫女は、強すぎる」

チルノに縋りながら、大ちゃんが言った。

「あたいはさいきょうだから、大丈夫だ」

大ちゃんに顔を向けて、首を振りながらチルノが言う。
何をごちゃごちゃと、かかってくるならさっさとしろ、とイライラしながら腕を組む。

チルノは大ちゃんの肩を抱いていた手を離して、その頭を自分の胸に抱きこむようにした。庇っているつもりなのだろうか、俺の事をキッ！と睨みつけてきた。おーこわいこわい。

「……いいかげんにしろよ、お前。あたいの友達を、何人傷つければ気が済むんだー！」

こちらに向けられる強烈な怒りと敵対心を一片たりとも残さずうけ流して、そう言えば、チルノの台詞原作と違うんじゃないか？と他人事のように考えていた。

「これ以上、あたいの友達を傷つけさせない！」

どこからともなくチルノは一枚のカードを取り出した。

しかし、友達、ねえ？それって誰のことだか。大ちゃんの事？はたまた、道中の妖精たちが、もしかしてルーミア？その全部か？あいつの友達とは、と、いらないことを考えていると、頭の中に、

湖上の氷精　チルノ

難易度　Normal　テーマ曲　おてんば恋娘

と、電光掲示板に流れる文字のように、言葉が浮かんできた。同時に俺の頭の中だけで曲が流れ出す。近いようでどこか遠くに聞こえるその曲は、俺が何かを考えるのにすこしの支障もきたさなかった。

「大ちゃん」

呼びかけられて、チルノから離れていった大ちゃんは、ゆるゆると

高度を下げ始めた。

なんだ、湖に落ちるのか、と視線だけで追うと、なぜか湖が凍っていた。

氷の湖に降り立った大ちゃんはずり込んで、目を閉じた。その周りに、どこから湧いて出てきたのか、妖精たちが守るように押し固まった。どうでもいいことだが、直接座っていて冷たくはないのだろうか。

集まってきた妖精は、誰もが大ちゃんを心配し、俺に親の敵を見るような視線を向けていた。

そんな目で、見るんじゃないねえ。

イライラが募る。その気持ちは、今すぐにもスペルを唱えようとしているチルノにぶつけることにした。

「私の光弾を弾いたことは褒めたげるわ。……でもね」

組んでいた腕を解き、ゆらりと降ろす。それから、霊力をかつての霊夢の全力近くまで開放した。

チルノが顔を歪めるのをみて、少しだけ気持ちが晴れた俺は、戦いを告げる前口上を締めくくった

「奇跡は二度も続かない!!」

お前は悪役にふさわしい（後書き）

ちなみに今回の話を書いているときの仮のタイトルは『胸が大ちゃん』でした。

うん、大ちゃんの胸は大きくないです。個人的な思いで。

次話、スペルカードルール無視。原作の台詞と展開どこいった、ていうのになってしまいう予定です。

うーん、最初はこんなはずじゃなかったんだけどな。

あらすじとかタグとか嘘になっちゃうじゃないか、誰に責任取らせよう………霊夢で良いか。勝手に動きおって。このこのっ。

氷の妖精の強さ（前書き）

書いているとどうしても話の筋が通らなくなる。
ようつするに、今回もぐだぐだです。

自分が戦闘シーンが書けない事にやっと気が付いた。
同じ描写や、同じ言葉を何度も書いてしまう。
もっと言葉がほしい。

氷の妖精の強さ

「四枚!!」

今まさにスペルを唱えようとしていたチルノに叩きつけるようにして俺のスペルカードの使用枚数を伝える。懐に手を伸ばしつつ、大きく距離を取るために後ろに飛んだ。

俺の言葉に開きかけた口をいったん閉じたチルノは、自身もスペルカードの枚数を言うために、再び口を開いた。

「じゃあ、こつちもよんま」

気符「水面に映る青空の満月型人口白光群」

チルノが言葉を言い終わる前に、懐からスペルカードを取り出して、宣言する。

下から妖精たちの非難する声が聞こえてきたが、無視を決め込む。陰陽玉が少し前方の上空へと飛んでいくのに合わせて、瞬時に右手に集めた靈力を陰陽玉へと投げつけた。

靈力弾は陰陽玉に当たったとたんに粉々に砕け散り、陰陽玉が急速に回転することによって広範囲に飛び散っていく。

突然弾幕があたりにまき散らされのを見て、自分の周囲を素早く見

まわしながらも回避行動をとろうとするチルノだが、避けても無駄だ。

「はじめて…まざれッ!!」

突き出した両手をぐつと握る。

すると、小さな破片になってあたりに散らばっていた霊力の欠片たちがいっせいに肥大して、眩く発光した。その光に、弾幕を回避するために霊力の欠片を注視していたチルノは目をやられて、両手で目を抑えて小さく悲鳴をあげた。

俺は俺で、腕で自分の目をかばう動作が少し遅れてしまったせいで、目の痛みにも必死に耐えていた。

役目を終えた霊力弾達が消えていくと、その痛みもすぐに引いて、俺はチルノの姿を捉えることができた。チルノは強くつぶつた目を腕でごしごしとこすって、何やらわめいていた。

腕を軽く上げて、揺れ動くチルノの額に指を突き付ける。と、「くくそっ」とチルノが零して、目が見えない状況に業を煮やしたのか、滅茶苦茶に弾幕を放ってきた。

冷気の塊のような妖力弾が俺のまわりを通り過ぎていく。狙いの定まらない弾幕は、避ける必要もないものだった。グレイズだって余裕である。が、寒い。近くを妖力弾が通り過ぎるたびに、少しずつ体温を奪われていく。当たってもいないのに。

身震いする身体を抑えて、指先に霊力をためる。

「あぶないチルノちゃんっ!!」

俺が光線を放った刹那に、下の方から大ちゃんの声が聞こえてきた。一瞬動きを止めたチルノが、何かに気づいたように素早く俺の方を向き、上体を反らして光線を避けた。

ち、と舌打ちを一つついて、指先から放つ光線を連続デスビ……連続して放つことに切り替えた。

ビビビビビビ、と普通の人間が出す音とは到底思えない音を指先で鳴らしながら放つ光線を、チルノは気配を頼りにしているのか、それともマグレなのか、どちらかはわからないが、身体を反らしたり、空中でジャンプでもするような体制を取ったりすることによって、全て避けていた。

このまま続けていても霊力の無駄と判断した俺は、急遽接近することにした。ようやく目が回復してきたのか、薄く開けた目で迫る俺に気づいたチルノが、慌てて光弾をばら撒いてきた。

するりするりと避けて、お祓い棒を振り、チルノの鼻面に向けて霊力弾を複数飛ばし、視界を奪う。

霊力弾を避けるチルノの背後に回り込んで、俺にぴったりとついてきていた陰陽玉を鷲掴み、霊力を纏わせ、一見霊力弾と変わりのないものに見えるものを作って振り上げる。

「チルノちゃん後ろ!!」

またあいつは!!

切羽詰まった大ちゃんの声に反応して振り返ったチルノが弾幕を放ってくる。陰陽玉を振り回して妖力弾を弾きつつ、距離を取った。後退する俺の視界に、チルノがスペルカードをかかげるのが見えた。

氷符「アイシクルフォール」

スperl宣言。

チルノを挟むように数十の氷の矢が並んで出現した。

それらが端のほうから順に猛スピードでこちらに打ち出されるのに加えて、多量の妖力弾を放ってくる。

慌てず騒がず、冷静に……かどうか分からないが、対処する。といっても、ただ避けるだけだ。

ひゅんひゅんと耳元を鋭く尖った氷矢が通り過ぎるたびに鳴る風切り音を鬱陶しく思いつつも、やけにストレートに飛んでくる氷の矢を避けていると、でかい妖力弾が迫ってきた。

馬鹿正直な、いや、馬鹿か。

頭の片隅にそんな言葉がよぎった。チルノの大弾はスピードが遅く、その分錯覚で氷矢のスピードがあがったように感じたが、それだけこの俺には、何の効果もない。

目前まで迫ったゆっくり動く妖力弾を避けるために、少し横にずれた——瞬間、俺の勘が強烈な危険信号を発した。

凍符「マイナスK」

大弾に幾筋もの罅が入ったかと思うと、粉々に砕け散って、視界いっぱい細かい冷弾が広がった。

「っ！！！」

心臓が跳ねあがるのに合わせる様にして、身体が勝手に動いた。雪のように細かく、白く輝くそれらはこんな時でさえなければ賞賛を送りたいくらい綺麗だった。

しかし今、その綺麗なものが怒涛の勢いで襲いかかってきている。細かい分、避けるのに必死になった。腕に垂れる袖を弾幕が幾つも貫いていき、激しく動いたために捲れあがったスカートの端が干切れて飛んでいく。陰陽玉が自動で霊力を纏って飛び回り妖力弾を落としていつてくれるのだが、視界がふさがって邪魔だった。これでは、ふとした時に被弾してしまう。

案の条、陰陽玉が俺の前を通り過ぎたとたんに、白くきらめく妖力弾が飛び込んできた。

息を飲み込んで、同時に左手に握っているお祓い棒を振って弾き飛ばす。それから空いている右手で懷から素早くカードを抜き出した。

「妖精風情が！二枚同時とはやってくれるな！！」

頭に血が昇ってきて、荒い言葉が口をついて飛び出した。怒鳴っている間もチルノのスペルが猛威を振るっている。

スペルを近距離でぶつけるために弾幕を見極めようとしていると、比較的チルノの近くが弾幕密度が薄い事に気が付いた。なんとか弾幕の合間をくぐり抜けて移動しようとするが、簡単に近づけさせてくれるほど甘くはないようだ。弾幕の密度があがり、衣服の端が削られる回数がある。

さらに、俺が冷弾をかくぐって進めば、その分だけチルノがさがっていき、一向に距離が詰まらない。

そんなことが何度も繰り返されて、俺はスペルに時間制限があることも忘れて焦っていた。

もついい！ここでいい！

大きく旋回して体制を整えスペルカードを軽く掲げて宣言する。

夢符「二重結界」

俺を中心に、二重の結界が張られる。ひとつめは俺から少し離れた範囲に、ふたつめはチルノの真ん前に。

チルノのスペルを押し返すように、俺は弾幕を放ち始める。チルノは俺が放つ弾幕の大多数を冷弾で撃ち落とし、落とせなかったものは余裕をもって避けていた。

と、チルノのスペルの効果時間が切れて、相殺されていた分の弾幕がチルノに襲いかかった。

しかし、チルノの余裕は崩れない。絶対の自信に裏打ちされた、しかし、険しい表情で俺を睨み付けながら避け続けるチルノを見て、俺は心の中だけでくつくつと笑った。

チルノが避けた霊力弾が突如として姿を消し、チルノの眼前に現れた。ぎよっとするチルノに追い打ちをかけるように、俺の放つ弾幕がひとつめの結界がある場所で音もなく消えて、ふたつめの結界がある場所から現れ、チルノを襲う弾幕に加わった。

一転、余裕の表情を失くしていつそう表情を険しくしたチルノが飛び回る。

何故、と言いたそうな顔をしていた。

結界とは、物事の境を司るものでもある。たとえば、常識や非常識、夢など。もちろん物理的なものもある。それが二重に張られるとは、どういう事か。

ものの例えだが、常識の結界をこちらに張り自分の常識を通して、非常識の結界を向こうに張り敵の思いもよらない攻撃・常識外の攻

撃を放つことが出来る……なんて、よくわからない事だが、まあいい。興味が無いし、ほぼ感覚でやっているから。身体が覚えていてくれている感じた。

チルノの後ろで消えた弾幕は、ただ結界のある場所に戻ってくるよう効果を付属しただけだ。

感覚。この一言で片づけられるのだから、素晴らしい。細かいことを瞬時にやってのけたりは俺には多分できないだろうし。

チルノが避けながら大きく距離を取っていくのが弾幕の隙間から見えた。あそこまで離れられてしまつては、通常弾幕とあまり変わらない弾幕密度になってしまう。俺動けないし。

チルノの右腕がぶれた。かと思つたら、氷の塊が弾幕の中を突つ切つて飛んできた。

「くそっ!!」

上半身を思い切り反らして頭があつたところを猛スピードで通過していく氷塊を見送つた。妖精のくせに、どんな腕っぷしだよ。

すぐさま体勢を立て直して、比較的弾幕密度の薄い場所から第二撃を放とうとするチルノの方へと、集中的に霊力弾を飛ばす。

チルノは構わず氷塊を投げるが、押し寄せる弾幕の中に飲み込まれたのを見て取つて、回避に移つた。

チルノは思つた以上にすばしく、めくらましの弾幕などを放つてくるためにとらえることが出来ない。

時間切れになり、俺のスペルによる弾幕と二重に張られた結界が消える。

結局このスペルでチルノを落とすことはできなかった。

光の群が消えたことにより、広く視界が広がつた。湖が凍っている

ためか、ほとんど霧が出ていない。が、空には紅い霧が隙間なく伸びているため、薄暗かった。そんな中、最初にいた対峙した場所でチルノは妖力弾も放たずに構えていた。俺はチルノから目を外さないように意識しながらも、少し息を乱してチルノから離れたところに滞空していた。

自然、周囲が静まり返る。自分の呼吸音を聞きながら、今のうちに自分があとどれくらいやれるかを考える。

体力。息を乱すくらいには消耗しているが、これといって問題は無い。ちよつと休めば回復するくらいだ。

霊力。余力十分。残り七十パーセントくらいか？普通にやれば問題はないだろうけど、全力全開でやったりなんかしたらあつというまに底をついてしまうだろう。

装備各種。お被い棒には問題なし。お札の数もまだ大丈夫だろう。攻撃なんてまだ一度も受けてないから、防具がわりのお札付き肌着も万全の状態だ。

それから、気力。いわゆる精神面の状態も含めての事だが、これが少しまずいような気がする。

先程まで俺はかなりイライラしていた。今はその気持ちが一周してしまったようで、多少は落ち着いていられ、こうして考え事なんかが出るのだが、いつまた気持ちが爆発するか。現に、心がざわついている。怒りに身を任せては事を仕損じるかもしれないというのに。

額に手をやって、大きく頭を振る。揺れるリボンに髪が引つ張られる感覚をやけに強く感じながら、重い息を吐いた。

イライラする。

ここまで、あの妖精……チルノがやるとは思わなかった。もちろん、

全力を出せば今すぐに潰せない事もないが、どこか心の奥の冷静な部分がそれをするのを拒んでいる。それをやっては、紫にばれてしまう、と。

しかし実際、ばれてしまうから全力を出さないというよりは、妖精相手に全力を出してたまるかという、プライドなのか意地なのか、傲慢なのかわからないものに押し留められていた。

イライラする。

全力を出して消し飛ばしたいのに、そうできないジレンマに。妖精という弱い存在のはずのものが、自分に牙を突き立ててきていることに。

なにより、自分の思い通りに事が進まないことに。

チルノは俺に一瞬で落とされればいい。

そうしないといけない。そうでなくてはならない。

何故なら、この俺が『博麗霊夢』だからだ。

それがどんなに身勝手に、自分中心の考えだ、なんてことは、いよいよもって頭に血が昇ってきた俺にはわからなかった。

自分の我儘をぶつけようと、そうして満足しようと。

最初から心にそうあって、今さらどんな言葉で繕い飾っても誤魔化せない、醜い考えだった。

人間だもの、なんて言い訳はきかない。そもそも言い訳を考えるほどに自分が間違っているとは思っていなかった。

間違っているのは、この世界の方だと。

チルノが緩慢な動作でスペルカードをかがけるのが見えた。いやに

ゆっくりにチルノが口を動かす。声が、遠い。
何時の間にか、曲が聞こえなくなっていた。

電符「ヘイルストーム」

最初、俺はそれが何なのかわからなかった。チルノの周囲を雪の粒や雹が渦巻いて、一塊に集まっていき、こちらが地面だとばかりに迫ってくるのを、どこか別の世界で起こっていることのように感じていた。

呆けて動かない俺のかわりに、俺を庇うように陰陽玉が躍り出た。
しかし、人の頭ほどの大きさしかない陰陽玉では、到底庇い切れるものではなかった。

俺はというと、陰陽玉が前に飛び出した時に痙攣するように身体を動かして、懐からお札を取りだしていた。右手に取ったお札に霊力を流し込みつつ、左手に持っているお祓い棒を横向きに構えて突き出す。

防御結界を張ろうと思っての行動だった。

しかし、初動作に至るまでが遅すぎた。陰陽玉を飲み込んで俺の手にかかりそうになった吹雪を模した……いや、吹雪そのものである弾幕を阻むように、霊力があまりこめられなかったお札を使って、不完全な結界を張った。何枚かまとめて使えば多面的な結界を張れるのだが、一枚しか使えなかったので、俺の前面にしか結界を張ることはできなかった。

大きさがばらばらの雪の粒や氷の粒たちが結界に雪崩れこんでくる。結界を抑える左腕がギシリと軋んで、結界に亀裂が走った。脆い。
が、よくもったほうだ。

俺は結界の制御を放棄して、瞬時にブースト、その場から後方へと全速力で離脱する。

景色が長く伸びて、瞬時に遠く離れることが出来た俺の耳に、硝子が割れるような音が届いた。

砕けて舞う薄い結界の破片を、先程まで俺がいた場所ごと飲み込んで、さらにこちらへと伸びてくる。まるで、巨人の腕が俺を握り潰そうと迫ってきているようだった。

パキン！と乾いた音がして、左手にかかる僅かな重みが減った。咄嗟に目を向けると、半ばまで凍ったお被い棒が、握る指の近くから折れて落ちていつていた。

一か月ほど前、時間を割いてお札をぺたぺたと貼って強化した愛用の道具の終わりを、しかしそれ以上見ずに、轟々とうねり風さえも飲み込んで収束していくチルノのスペルを見据えた。

左腕を振って、使えなくなった棒切れを投げ捨てる。それから、思い切り上空へと飛ぶ。両手を腰につけ、紅の空を見て、纏う靈力で風を凌いで、空へ。

どうう、と重い音がして雪の粉が舞い上がってくる。しかし、俺のスピードから見て舞い上がっているように見えるという事は、当たればただでは済まない速度で飛び散っているという事だ。

周りに粉雪がなくなったのを確認して、キッ！と急停止し、下を見る。

チルノから距離を取り過ぎていたせい、眼下には森が広がっていて、湖に面する木々が雪に飲み込まれて根こそぎ薙ぎ倒されていた。自然破壊を起こしたチルノのスペルは、そのままこちらへと押し迫ってくる。それを確認した俺は、一直線にチルノに向かって飛んだ。かなり抑えているとはいえ、今出せる全力の飛行速度にぴったりとついてくる白い塊に、流石だ！なんて気取って言いたかったが、そんなことを思う前に、妖精のくせに！という怒気のこもった気持ちに塗りつぶされた。

両腕を突き出して雪崩れを操るチルノの姿がぐんぐんと近づいてきた。

凍る湖の上、大ちゃんを守るようにかたまる妖精たちが悲鳴をあげ、数匹が逃げ出した。大ちゃんは目をつぶっていて、微動だにしない。

チルノに迫る俺に、雹の雪崩が迫る。いい加減足が凍ってしまいそうな距離を保って、ついてきている。

ついに、チルノまで残り三メートル程にまで近づいた。しかし、俺は速度を緩めない。

チルノの顔に焦りの色が浮かんだ。……あと二メートル。

……ここだ！

チルノまで残り一メートルを切ったところで、俺は能力を使い、全力で『浮かび』あがった。

スピードを殺すことなく直角に、再び空へと上がっていく中、終わった！と、知らず心の中で叫んでいた。すぐにぐるんぐると回転して止まり、下を見る。

限界までひきつけていた雪崩は、俺の動きを追えずにチルノを押しつぶ、していない！！？それどころか、一粒残らず直角に方向転換して、俺に迫ってきている。

なんで！？さつきは止まれず森を潰してたのに！！

事実を認められない気持ちだが、そんな言葉になって脳内を駆け巡るが、動いていなければ追いつかれると、すぐさま飛び出す。

五秒もかからずトップスピードに入ったが、俺と同じスピードで動く雪崩は、すでに俺の足に触れそうなくらいに迫っていた。

「浅知恵。馬鹿な奴」

チルノがそんなことを呟いたのが聞こえた。

脳が沸騰するかのような怒りが湧いてくるが、足首から先の感覚がなくなっていることに強い危機感を覚えてスピードをあげ、足に目をやる。――よかった。もげたりはしていない。

かわりに神社を出るときにきとうに突っかけてきた草履が二足共に凍っていたが、足がなくなるよりはましだ。

かつての霊夢の限界飛行速度を超えていることに気が付かずに、さらにスピードをあげる。

袖から封魔針を取り出してありったけ霊力を通して、振り向きざまに雪崩れへと投げつける。

瞬間、針が貫通した雪崩の中心部分に長いトンネルが出来た。が、すぐに穴は塞がっていく。

舌打ちをして前に向き直り、大きく旋回して再びチルノへと向かっていく。雪崩は変わらずについてくる。

ただ針を投げるだけじゃ駄目か、お札も同じだろうな。大火力で吹っ飛ばすにしても、あの雪崩の中にはさっき飲み込まれていた陰陽玉が入ってるはずだ、多分。ちょっとやそつとじゃ壊れないにしても、全力を出してしまうとどうなるか……まで、なんで俺は全力を出そうとしてる。相手は妖精だぞ！？

そこまで考えて、逆上する。妖精ごときに、本気なんてありえない、ありえない、ありえない！

右手に霊力を溜める。溜めて、溜めて、溜めて、チルノに接近していく。

チルノの表情が小馬鹿にしたようなものに変わった。また同じことをするの？とも言いただった。

ぎり、と歯ぎしりをして、右腕を振りかぶった。チルノが今初めて俺の右腕に集まる霊力に気が付いたように目を見開いた。

しかしそこで腕を振り下ろさずに、身をひねってチルノの横を通り

抜けた。

移動速度を落とさず振り返る。雪崩は、ばっ！と横に腕を広げたチルノを裂けるようにわかれて俺だけを飲み込もうと迫る。それにかまわずに、チルノの背中めがけて右腕を振り下ろし霊力弾を飛ばした。

背中越しながら気付いたのか、僅かに身体を反らして霊力弾を避けようとするチルノの横腹を、霊力弾が削っていった。青い布地の生地が弾け飛ぶ。ぎりぎりで当たってはいないらしい。氷の羽には掠りさえしなかった。

避けられた霊力弾は雪崩の中に飲み込まれていき、爆発して、物凄い勢いで雪崩を散らせた。

それら全ての出来事が、スロー再生されたかのような速度で見えていた。こちらに飛び散ってくる雪すらも遅く見えたが、自分の身体も遅く動く上に、雪片が細かすぎて避け辛い。身体を中心線に意識を割いていると、左腕の袖が雪片によってほとんど千切られて、二の腕から手にかけて肌が露わになっていた。

二の腕にぽつんと残った赤い紐と少しの白布が奇妙に感じられる。冷たい。左手の感覚がなく、ずっとジンジンと痛みと熱を伝えてきている。

おおよそ夏だぜ、と魔理沙の声が聞こえたような気がした。

芯から冷えていく身体とは対照的に、怒りのポルテージが上がっていく。乱暴に懷からスペルカードを抜き出し、三度目のスペル宣言をした。

神霊「夢想封印」

不自然にその場に急停止して、物理法則を無視する霊力弾をチルノ

に向けて大量に放つ。

白く濁った光の塊が大小入り乱れて広がり、砕け散った雹や粉雪の中を舞いながら、逃げていくチルノに収束しながら追いつく。九つ程を追加で放出する。一定の間隔で、九つ放つては靈力を溜め、また九つ放つ。てきとうにばら撒いている通常弾とは別に、俺から九の方向に放たれる大きめのこの靈力弾に当たってしまうえば、どんなものでも問答無用で封印される。

それは妖精も例外ではない。

放ち続けられる靈力弾を前に、チルノは避け続けるだけで精一杯のよう、再び雪崩を作り出すことをしない。時折当たるすれすれで靈力弾を避けていることもあった。今も、無理矢理身体を捻って靈力弾を躲して体勢を崩していた。

もう少し靈力弾を増やせば落とせる、そう思った俺は、溜めていた靈力を九つの靈力弾として解き放ち、自分の周りに滞空させる。チルノがこちらを向いたのに合わせて、靈力弾を一齐に射出しようとして、出来なかった。

凍符「パーフェクトフリーズ」

全ての弾幕が、その動きを止める。

あまりのことに俺は自分の目を疑って、周りに滞空させていた靈力弾を見回した。

逃げ惑うチルノを追っていた靈弾も、俺が今放ったばかりの靈弾も、全てが、瞬いたその瞬間に凍らされてしまったかのように、奇妙な色合いになって止まっていた。

チルノが冷弾を放ってくるのにハッ！として、慌てて回避行動に移ろうとするが、どうもチルノの放つ弾幕もおかしかった。チルノの放った弾幕が、少し進んだところで周りの弾幕と同じようにかたま

って、止まってしまった。

一体なんだ、と焦りが胸を占める。知っているはずなのに、あまりに突然の事で、思い出せない。

冷えた額にやけに熱い汗がたれて、すぐに冷えた。汗が目に入りそうになったのに気がついて、ぐい、と右の袖で拭った。

その時だった。

まるで溶けだした氷が滑り出すように今まで動いていなかった弾幕たちが滅茶苦茶な方向に動き出したのは。

俺が放ったものも含めて、全ての弾幕が冷気を纏っており、必死に身体を反らして避けるたびに冷たい風が身体を撫ぜ、体温を奪っていく。知らずガチガチと歯が鳴っていた。身体の間とところの感覚が鈍くなってきた。

ラストスペルだ。これは、チルノのラストスペルのはずだ。

避けきれば、俺の勝ちなんだ、と自分を奮い立てる。

『勝ち』。当たり前だ、負けるわけがない。勝つことは決まっているんだ、俺を誰だと思ってる。

俺は、博麗の

「ッ!!」

瞬間、背に迫る存在に目を見開いて、弾かれるように右に身体を反らした。

突き抜けるように後ろから前へと飛んでいったのは、弾幕、ではなく陰陽玉!?

ぱぁん、と乾いた破裂音が響いて、何かに引っ張られるように左に

身体を折った。そのまま回転する。左腕に、何かを押し付けられたような感覚が残っていた。

後ろ首に、衝撃が走る。ぱぁん、と乾いた音。その音は、何度も何度も、時には重なって、時には連なって俺の耳に届く。

その音がなるのは、必ず俺の身体に光の玉が当たって弾けている時だけだった。感覚のなくなっている腕に、布越しの太ももに、顔に、胸に。

爆竹を肌に押し付けられて破裂させられているような衝撃が、絶えることなく襲ってくる。

白い光が乱舞していた。

なになが、おこって……

妖精たちが上の方で歓声をあげるのが聞こえた。衝撃に目がチカチカする中で、自分が真つ逆さまに落ちていることに気が付いた。何故落ちているのかは……わからなかった。

身を捻って、体勢を立て直そうとした瞬間に、身体が潰れてしまいそうな衝撃が全身を襲ってきて、どこにかしこに冷たい水が押し寄せてきた。開けていた目に刺すような冷たさの水が触れて、思わず目をつぶる。全身が圧迫されている。

凍っていた湖の中に落ちたんだと理解した。凍っていたのは水面だけだったらしい。喉を突き上げる気持ち悪さに口を開くと、ぼごと空気は抜けていった。途端に、肺が一回り小さくなってしまったかのような苦しさが胸をしめて、抜けた空気のかわりに水が流れ込んできた。苦しさに、もがく。

気管に入りこんだ水を吐き出そうと咳き込むと、余計に水を飲み込んでしまった。

息が出来ない。水を押しのけるように手足をばたつかせるが、上にも下にも届かない。

何も見えない。なんで。

薄く開いた目に、水面に張る氷越しに妖精たちの足が見えた。もがいて、腕を伸ばす。

打撲した所が、水の冷たさに激しい痛みを訴えてきていた。もがけばもがくほど、水面が遠くなっていく。

たす、し、しに、しん……

ごぼ、と残っていた空気が肺から漏れて口をつき、上へと上がっていった。

遠のいていく意識のなか、伸ばした右腕につけている袖が揺れているのが、やけにぼやけて見えた…。

氷の妖精の強さ（後書き）

今までご愛読ありがとうございました。

人先生の次回作、『やれゆけ未確認幻想飛行氷精少女チルノ・V』ヴィクター
にご期待ください。

スペルカード説明。

気符「水面に映る青空の満月型人口白光群」

オリジナルスペルなのかどうか。

夜の水溜りや静かな池に映った満月を見て、美しいと思うのはよくあることだ。

しかし、青空のもとに同じように水面に満月の姿を見つければ、儚く映るその姿とは裏腹に、その輝きは強く目に、そして心に残るにとだろう。

そんな心に残る満月を再現したスペルである。

というのは、四秒で考えた駄文。実際は野菜人の作る人口満月です。目くらまし専用スペル。あんまり意味がない。

きつと、悪い人じゃないよ（前書き）

一度書いたの全部消えた。

うふふ、わかってるさ。誰もが通る道だよ、うん。

後は投稿するだけだったのに。前半部分即席で考えたものだったから思い出せなくて書けなかったとか、別にいいもの。

うふふ…。

今回言いたい事を箇条書きで。

・『霊夢の身体をばくれいむ』を書こうと思ったって妄想した話が今回と次回の話。

・肉弾戦が書きたかったんだ、私あねえ。

・描写が読んでてしつこいと感じるけれどもスルーしてくださると嬉しいな。

・話の全体が無理矢理。当然よ、深い話なんて思いつきやしないもの。

・チルノの髪は逆立ちません。

・伝説の超妖精チルノ。

・よくよく登場人物がどっちの手になにを持っているかとか忘れて書きちゃうときがある。

・霊夢の懐は四次元。

きつと、悪い人じゃないよ

凍った水面に降り立ったチルノに、妖精たちがワツと駆け寄った。口々にチルノを称える言葉を投げている。

四方八方から自分に向かって放たれる賛辞を受け流しながら、チルノは妖精たちの間を割って、近づくチルノに気が付いて立ち上がり、よろけた大ちゃんに駆け寄っていった、肩を支えた。

「すごい、チルノちゃん…。あの博麗の巫女をやつつけちゃうなんて」

大ちゃんに褒められて、チルノはトマトのように顔を赤くした。

「だっ、あ、あたいはさいきょうなんだから、当然よ！」

照れ隠しに声をあげるチルノを見て、大ちゃんは顔を綻ばせた。わらわらと妖精たちが集まってくる。

チルノは大ちゃんの傷を確認するが、思ったほど大変なものがないのを見て安心する。

チルノは、大ちゃんの目立った傷を確認していきながら、これなら明日までには治りそうね、と言った。

大ちゃんは自分の服の破けた部分、主に、胸のあたりを手で覆いながら、チルノちゃんの服、破けちゃってるね、と言った。

これ？と破れた部分に手を当てて、こんなの何でもないわ。大ちゃんの傷の方が、大変よ。そう言っで、それから大ちゃんの服の破れていることに、ぽん、と手を打った。

自分のスカートの端を、一周するように力任せに裂いて、ぽかんとする大ちゃんに、手を上げて、と言った。

手を上げた大ちゃんの胸の破けたところを覆うように布を巻いて、きゅっ、と背中で結ぶ。

ありがとう、と言っで、大ちゃんにはこりと微笑んだ。チルノは何故だか赤くなる自分の顔を大ちゃんに見せないように背けて、別にいいわ。お礼なんて、と言った。

きやあきやあと妖精たちが騒ぐのを気にせずに、顔の火照りを取ったチルノは、大ちゃんに顔を向けた。

大ちゃんは、博麗の巫女が落ちた場所に顔を向けていた。チルノもつられて、そっちに顔を向ける。

少し離れたところの凍っている湖面に大きめの穴が開いて、黒色に染まり揺れる水面が顔をのぞかせていた。暗く、底どころか少し先も見えないのは、空を覆う紅い霧のせいだろう。晴れてる日は底が見えるくらい透き通ってるのに、と誰かが言った。

「死んじやったの、かな……」

不安そうな表情で、大ちゃんが呟いた。大ちゃんがあの巫女に気を

向けることにむつとして、それから、大ちゃんが無駄な気苦労を背負ってしまったように、大ちゃんを傷つける奴は、死んじゃえばいいわとチルノは言った。チルノのその言葉に、妖精たちが同調した。

ううん、と大ちゃんが首を振る。

「博麗の巫女って、異変を……おかしい事が起こったのを、解決するのが役目なんだって。きつと、気が立ってたのかもしれない。だって、どうみてもおかしいよね、空の」

そう言つて空に顔を向けた大ちゃんに、みんなが顔を見合わせる。なんで？とチルノは疑問を零した。

「気にかける事なんかないわ。だってあいつ、みんなを傷つけたんだよ？悪い奴に決まってるわ」

「でも、最初に攻撃したのは私達だよ。……みんな、どうしてあの人の事を攻撃したの？」

大ちゃんは上を見上げたままそう言った。

神社の近くで博麗の巫女にちょっかいをだした妖精の一人が、驚かしてやろうと思って、と言った。

人を、驚かす。それは、妖精にとっては当たり前の事だった。ちょっかいをだす、悪戯をする。どれをとっても妖精たちには欠かせない、普通のこと。

ただでさえ今日は調子がいいのだ。

いつもより速く飛べるし、いつもよりたくさん動ける。人間に悪戯

したくてうずうずしていたはずだ。

なのに、人間が通るような道のある森で待ち構えようと、人里に近づこうとも、人間が一向に現れない。

そのことは瞬く間に妖精たちのあいだに広がっていった。妖精から妖精へ、情報は伝わっていく。

人間に悪戯がしたいのに、肝心の人間がいないので悪戯できない。異様な雰囲気の人里には入れない。

みんながみんな力と暇を持て余していた時だ。

神社から人間が飛び出してきたという噂が出回り始めたのは。

格好の標的に妖精たちはこぞって神社へと向かったものだ。

そうして、博麗の巫女にやられた。

纏めて消し去られたものもいれば、簡単には殺されずに手酷くやられたものもある。

中には八回も殺された、という者までいた。

でも、誰しもが悪戯がしたいがために巫女に向かっていったのだ。それはもう、有り余る力をぶつけるという悪戯をするためだけに。

「あつ、みんなが悪いわけじゃないよ？悪戯したかったただけだもんね。……でも」

ぱつとみんなを見回した大ちゃんがあわあわとして言った。

その気遣いに気が付いたものは、顔を綻ばせて大ちゃんを見つめていた。が、最後の呟きと共にまた困り顔になった大ちゃんを見て、みんなに不安が広がった。

「死なせちゃうことは、なかったんじゃないかなあ……」

大ちゃんの言葉に、不満の色を示したのはチルノだった。

「だって、あいつは大ちゃんをこんなにしたんだもの。それに、死んだらまた生まれかわればいいのよ。うん、そう考えると、一回殺しておいて正解ね！」

自分の言葉に納得するように、腕を組んでうんうんとうなづくチルノに、大ちゃんが言葉をかけようとしたときに、後ろの方にいた妖精が声を上げた。

「大ちゃんは何で攻撃されたの？大ちゃんは悪戯はしないから、やっぱり向こうが襲ってきたんだよね？」

悪戯、好きなんだけどな、と思いながら、大ちゃんは声をかけてきた妖精の方に顔を向けた。

その妖精は、隣にいた妖精に、ううん、大ちゃんからあの巫女に襲いかかったんだよ、と告げられて、えー！？なんで！？と声をあげていた。

大ちゃんはその妖精の疑問に答えるべく、口を開いた。

「チルノちゃんが、いたからだよ。みんなと同じように、チルノちゃんも悪戯したかった。そこに、人間が来るって話を聞いて、チルノちゃんは飛び出してこうとした。その時、博麗の巫女の事を思い出したの。こんな時に歩く人間っていったら、それしか思い

浮かばなかった。博麗の巫女が、凄く強いってことも思い出した。私はチルノちゃんに怪我をしてほしくなかったの」

そこまで言って、大ちゃんはチルノに顔を向けた。

「私が足止めしている間に、チルノちゃんは私が教えてあげた嘘っぱちの方向に飛んで行ってると思ってた。でも、チルノちゃんは来た。そして、博麗の巫女をやっつけてしまった」

難しい顔をする大ちゃんに、チルノは、だって、大ちゃんが危ないような気がしたから、と言った。

それから、んん、あたいには難しい話は分からないけど、なんだか大ちゃんの話だと、あたいが勝てるわけがないから嘘の方向に行かせたって聞こえるんだけど、と神秘的顔で呟いた。

大ちゃんは俯いて、うん。そうだよ、チルノちゃん、と言った。

チルノは、なんだか裏切られた気がして、なんで、と声を出していた。

自分の力を信じてくれているはずのものが、自分が勝てるわけがないから、と言ったのだ。

「私達は、妖精なんだよ。チルノちゃんみたいに、いくら妖精の中で力が強いからって、博麗の巫女には勝てないって思っていたの。でも、チルノちゃん、勝っちゃうんだから」

むん、と、チルノは知らず、誇らしげに胸を張っていた。勝っちゃ

うんだから、と言われて、何故だか気分を良くしたのだ。

やっぱりあたいはさいきょうね、という思いが心をしめていく。

しかし、でもね、と大ちゃんが不安そうに出した声に、チルノは正気を取り戻した。

「あのね、チルノちゃん。それでも、あの人が死んでいい事にはならないんだよ？チルノちゃん。人間はね、私達とは違って、死んでしまったらもう二度と生まれ変わることはないの。生まれ変わっても、別の人になっちゃうの」

チルノは、大袈裟に首をかしげた。それってどういうこと？あいつは、もう生まれ変われないってこと？でも、あいつは悪い奴なんだから、死んだっていいわよね。

首をひねってそんなことを考えるチルノに、大ちゃんが言う。

「確かに私たちはあの人にやられた。だけど、あの人にとっては、それはきつと仕方がない事だったんだと思う。だって、このおかしな空をどうにかしようとやってきたところに、私が通せんぼしちゃうんだから」

悲しそうに言う大ちゃんに、チルノは、でもあいつは悪い奴で、と声をあげた。

周りの妖精たちも、そうだよな、と口々に同調する言葉を言う。それに背を押されて、自分が間違っではない事をチルノは確信した。それに、いくらなんでも、大ちゃんは優しすぎるのだ。こんなにぼろぼろにされて、それをした奴の事を悪い奴じゃないみたいに言う

なんて。どうにかして、大ちゃんにあいづが悪い奴なんだってことをわからせて、そんな、取り返しのつかない事をしてしまったような顔をするのを止めさせるんだ。

「ううんとね、例えばだよ？私がどこにもいなくなっちゃって、一緒に遊びたいのにどこを探しても見つからないときに、あ、あそこにいるかも！って思ってたそこに向かってる時に、いっぱい邪魔されたら、どう思う？」

大ちゃんの質問に、勝気に染まっていたチルノの顔が、不安の色に変わっていった。

「だ、大ちゃんは、いなくなっちゃうの？あたい、そんなのやだよ！？」

そう言っ飛びついてくるチルノを、しかし邪険に思わずに、だから、例えばの話だってば、と大ちゃんは言う。チルノは、

「あたいの前を阻む奴なんか、英吉利牛と一緒に冷凍保存してやるわ！！」

と声をあげた。大ちゃんは、なんで牛の名前が出てくるんだろう、と僅かに首をかしげて、ね？とチルノに声をかけた。あの人も、そういう気持ちだったんだよ。ほら、そう考えてみると、悪いのは私

たち。あの人はきつと、悪い人じゃないよ。

チルノは、自分の服よりも顔を青く染めて、じゃ、じゃあ…と声を震わせた。

うん、と大ちゃんはずく。周りの妖精たちが、ええ！？じ、じやあ、あいつの目的って、と騒ぎ出した。

その喧騒に負けにくいの大声で、

「あいつの狙いつて、大ちゃんだったのか！？」

だからたとえばの話だってば！！と顔をトマト色に染めて言いつける大ちゃんに、チルノは、なんだ、と胸を撫で下ろした。

もしあいつの狙いが大ちゃんなのだったら、殺しておいて正解だった。

あれ？と、そこでチルノは首をかしげる。それじゃああいつは、誰かに会いに行こうとしていただけで、それをあたいが止めてしまった？

じゃあ、あいつは本当は悪くない奴だった…？

「でも、あいつは悪い奴」

チルノちゃん！！と大ちゃんに一喝されて、チルノは押し黙った。それから大ちゃんは、

「ねえ、チルノちゃん。もう、あの人は死んじゃったんだから、もう悪いということはないよ。…ね？それに、こんな冷たい水の中で眠

るなんて、凍えちゃって可哀そうだよ。だから、だしてあげよ?」

チルノは唇をかねで、俯く事しかできなかった。ほら、と言って、大ちゃんは穴の方に歩いて行った。

チルノは、意地で動かない。他の妖精たちも、何を考えているかはチルノにはわからなかったのだが、誰一人として動こうとはしなかった。

みんなが、ただ黙って、博麗の巫女が落ちた穴を覗き込んでいる大ちゃんを見ていた。

チルノの後ろにいた二人の妖精が頬をつき合わせて、なにやらこしよこしよと話をしているのが、チルノの耳に聞こえてきた。

「ねえ、ねえ。あいつ、ほんとに死んだのかなあ」

「うーん、どうだろ。化け物みたいなやつだったしなあ。…もしかしたら、そこからざばーん!! ってでてくるかもよー!!」

「きゃあ、驚かさないでよ、馬鹿!」

「うはは。怖がりー」

そんな、暗い空には似合わない声で姦しく、すでに小声から大声に変わりつつある会話を聞いていたチルノは、だからこそ、なのか。自分の足元のずっとずっと下のほうで、星が瞬くように、ほんの一瞬だけ強い力を感じられたのは。

チルノがその力に反応するのとはほとんど同時だった。いくつかの影が、大ちゃんの足元の氷を突っ切って現れ、大ちゃんを取り囲んだのは。

突然に現れた、自分を取り囲む長方形からなる紙に驚いた大ちゃんは、尻餅をついた。その紙が淡く光ったかと思うと、大ちゃんを囲

う檻のように、その紙の枚数だけ、限りなく透明に近い壁が張られた。

大ちゃんと同様に、長方形の紙の出現に驚いたチルノは、膝をついて、自分を囲う透明な壁に両手をぺたりとつけて、混乱の極みに達しているような表情の大ちゃんのもとへと駆け寄った。

「大ちゃん!!」

チルノは、大ちゃんの正面に屈んで透明な壁に手を這わせて、その見かけによらない頑強な手応えに表情を険しくした。

「チルノちゃん……な、なに、これ」

ぺたぺたと、チルノが手を当てている所に手を合わせようとしている大ちゃんが言った。チルノは、首を振る。
わからない、と。

透明な壁にとらわれてしまった大ちゃんを囲むように妖精たちが集まってきて、チルノと同じように壁に手を這わせた。

大ちゃんはあわあわとして、必死にチルノの手に手を合わせようとするが、見た目には手が合わさっているように見えるのに、手が伝えてくるのが硬い感触なことに不安の色を濃くした。

壁が、明滅する。うん？とチルノは目を細めた。今のは、何だ？と首を傾げようとして、大ちゃんに異変が起こっていることに気がついた。

大ちゃんの、縁のついた半透明の羽が、萎れるように力なくたれて、チルノの手に当てるように壁に当てられていた大ちゃんの手が、だ

らりとたれた。

前のめりに倒れる大ちゃんを支えたのは、壁に阻まれて手の出せないチルノではなく、その頑強な透明の壁だった。

「大ちゃん！？どうしたの！？」

顔を青くしてぐったりと壁にもたれかかる大ちゃんに、悲鳴のようにチルノが問いかけた。どうにか大ちゃんを支えようと手を這わせではいるが、やはり壁に阻まれてしまふ。と、三角錐の形を保っていたその壁が、淡く光っていた紙が溶けて消えるのと同時に大ちゃんの身体へと纏わりついた。

チルノは、自分の肩にゆつくりと倒れこんでくる大ちゃんをひつしと抱き止めて、大丈夫！？と声をかけた。

大ちゃんは弱々しい声で、力が……抜け、て……と言った。

見るからに体調の悪そうな大ちゃんの身体の輪郭が、薄くぼやけている。それは、妖精が力を失ってしまったている証だった。

まずい。そう思ったチルノは、はやく大ちゃんをちゃんと安静になれる場所に連れて行こうと、周りの妖精たちに声をかけようとした。途端に、バチッ！！と強烈な電気が身体を駆け巡ったかと思うと、凄まじい衝撃に吹き飛ばされた。

風の抵抗に包まれる中で、大ちゃんに突き飛ばされた……？と、自身では絶対に信じないような考えをたてるチルノの耳に、他の妖精たちの数十からなる重なった悲鳴と、ピチューン！という音が届いていた。

チルノは、凍った湖面に背を打ち付ける前に、後方に回転し、中空にとどまって体勢を立て直して、大ちゃんへと目を向けた。

大ちゃんを覆う白く濁った光が、明滅してうごめいていた。大ちゃんは自分の身体を抱きしめて、苦悶の表情を浮かべている。激しい

痛みをこらえるかのように歯を食いしばって、小刻みに震えている。チルノは、大ちゃんに纏わっているその濁った光が、濃密な力だということに気が付いた。

その力が、自分たちが使う妖力とは反対の性質を持つ力だということも、わかった。

だから大ちゃんはあんなに苦しんでいるんだ。その力に身を蝕まれて。

「あつ！あつ！あつ！あつ！！」

大ちゃんの悲痛な声に、すぐに飛び寄ろうとチルノが身体に力を込めた時、ばしやり、と、水をぶちまけるような音が聞こえた。大ちゃんの後ろ、大きく空いた穴に覗く水面から、青白い腕が伸びて、凍った水面に爪を食い込ませた。

揺れる水面が盛り上がり、もう一本腕が現れ、同じように氷に爪を突き立てる。それから、ざばりと水をまき散らして、『そいつ』が上半身を凍った水面へとのしあげた。

チルノは、絶句する。

びたりと肌に張り付いて透ける、右腕だけについているだばった袖が、ずるりと動いた。

そいつが、下半身までもを氷上にあげたのだ。

水に濡れた髪先から、服からスカートから、いたるところから水を滴らせるそいつは、氷上に両手について嗚咽を漏らした。えづいて、「うばええええええ！！」と口から多量の水を吐き出した。げぼほと咳き込み、また同じように声をあげて水を吐き出す。

荒く息をついて、片方の腕で口を拭いながら幽鬼のようにそいつが立ち上がると、大ちゃんの悲鳴が強くなった。

チルノは今度こそ大ちゃんに飛び寄ろうとして、今度もそうはいか

なかった。

そいつがチルノに向けて袖のついていない方の腕をあげると、またチルノは吹き飛ばされた。錐もみ回転し、空中で体制を整えたチルノはスイッチを戦闘時のものに切り替え、そいつを睨み付けた。なんだ、今の、と疑問が脳裏をめぐる。

そいつのそばには、苦痛に声をあげる大ちゃんがいる。

助けないと、はやくあいつから離さないと、と気持ち焦って動き出そうとすると、また吹き飛ばされた。

今度は体勢を立て直すのに少し遅れて、手と足で氷面を擦って止まる。

チルノは、手が訴えるヒリヒリとした痛みを無視して立ち上がり、さつきと変わらない目つきで、そいつを見据えた。そいつの前髪が額から目にかけて張り付いており、その目を見ることは出来なかった。

そいつがチルノに向けていた腕を大ちゃんに向けると、大ちゃんに纏わりついている白濁とした光の色が濃くなった。

クン！と、そいつが勢いよく腕をあげた。連動するように、ぐつたりとしている大ちゃんが紅い空へと勢いよく浮かび上がった。大ちゃんは、自分の意思とは関係なく空にのぼってしまったのにびっくりして、手足をばたつかせている。

「大ちゃん！！何する気だお前！大ちゃんをおろせ！！」

そいつは、チルノの訴えも聞かずにゆらりと揺れて、大ちゃんに向けている手をぐつと握った。

「ち、チルノちゃ……っ！」

一瞬。

目を焼く光が広がって、何時の間にか、大ちゃんは消えていた。妖精が死んでしまう時に聞こえる音は、この時に限って聞こえてこなかった。

呆然とするチルノの前に、青い布の切れ端が舞い落ちてきた。それに目を向けて、チルノは、死ん、だ……？と呟いた。切れ端は、風にさらわれて飛んでいってしまった。

「……ッくは！はあ、は、……ふっ、くく、はあ、けしっ、消し飛ばしてやったっ、はあ」

荒い息にまぎれてそいつが言つのを聞きながら、チルノは、自分の身体の中を言い知れぬ悪寒が満たしていくのがわかった。

聞こえなかったからだ。あの音が。

妖精が死んでしまう時に聞こえる、あの音が。

チルノは、いつか誰かに聞いたことがあった。妖精が死ぬ時に音が聞こえるのは、再び生まれ変われることを示していると。妖精が本当の意味で死ぬときは、何の音も出さずに、静かに消えていくだけだ。

昔、知人の妖精が自らの依り代である自然を人間に破壊されてしまったときに、自分の目の前で音もなく消えていくのを見たこともあった。

それ以来その妖精と会えなかったのが、その時の自分には不思議で仕方がなかった。

でも、長く生きているうちにその意味は分かった。

大ちゃんだって、自分の依り代が人間の目に触れることをひどく嫌

がっていた。

それは、死を怖がって、と言っわけではなかったが、今となつては、もうそんなことも関係ない。

『音もなく』消えてしまったのだ。

急に、心を形作る欠片の内の、大事な一つがなくなつてしまった気がした。

喪失感。チルノは、無性に喉笛を掻き篁りたくなる衝動に駆られた。しかし、頭も身体も動かず、目は見開いたまま。その場から、一ミリも動けずにいた。

「ふ、はあ……んぐ、は、……ユウナの能力が無ければ、死んでいく所だった。……は、く、死んでいる、所だった!!」

胸をおさえて怒鳴るそいつの怒気が、そいつを中心に渦巻いて、力と共に膨れ上がっていく。

「このオレが、死にかけたんだぞ!!? ゆ、ゆるせない、ころす、殺してっ、も、もう知るか! 知ったものか!! 消す! 全部、ぜんぶけしてやる!!」

髪を振り乱して、頭を掻き篁って、狂つたように叫んで力を張れあがらせるそいつの、その強大な力の余波による風が、チルノの身体を撫ぜた。

平時なら、腰を抜かしてしまってもおかしくはない力を前にして、ただ呆然とチルノは立っていた。

チルノの心にぽっかりと空いた穴に、かわりのように流れ込んできたのは、そいつと同じ怒りだった。

怒りが全身を支配する。耐え難い苦痛が血管を通して全身に廻り循環していく。

わなわなと震える肩を抑えるように、きつく拳を握り、歯を強くかみしめた。

「よ、くも……！大ちゃんはお、お前を、お前の事を、悪い奴じや無いって言うていたのに……！よくも……！」

歯の合間から怨嗟の声が漏れる。

チルノを妖力が取り巻いて渦を巻き、いつしかそこに氷の粒が混ざり始めた。

力が高まっていく。それに比例するように、渦巻くものは吹雪のように轟々とうねっていた。

嗚咽のように自分の呼吸が荒くなっていくのに合わせて、荒れ狂う力が胸の内から肉を裂いて溢れてくるのを感じていた。

びくりと、痙攣するように身体が震えた。力が、自分の絶対量を大きく超えている。何倍にも何十倍にも膨れ上がっている。力と一緒に、怒りが質量をもって肥大していく。

ふぐつ、と、口から声が漏れた。

噛み締めている歯からはギリギリと音が漏れ、握りしめた手の平には爪が食い込んで、熱い血が滴っていた。

それなのに、身体の震えは止まらなかった。

よくも……！よくも……！と、壊れてしまったラジオのように同じ言葉を繰り返すたびに、纏う妖力が膨れ上がっていく。

悔しかった。

一瞬でも『そいつ』を悪い奴ではないのではないかと思ってしまったことが。

苦しかった。

自分がいたのに、大ちゃんを守れなかったという責苦が。

悲しかった。

かけがえのないものを、失ってしまったことが。それが、自分のせいだということが。

そしてなにより、憤った。

こいつは、こいつは大ちゃんを殺した。

大ちゃんはお前みたいな奴にも優しさを向けたのに。
なのに。

なのに。

「よくも……大ちゃんを殺したな……！あたいの大切なものを奪ったな……！お前は！」

そこまで叫んで、抑えきれなくなった。
腹の底にどっしりと構えた力が溢れて、喉を通り口を突く。

「うがぁあああああああ！！！！」

天に、吠えた。

纏わっていた力が自分の中へと流れ込んできて、身体中に充満していく。

ビリビリと空気の膜が震えて、暴風が吹き荒れる。天上に広がる紅い霧が渦を巻いて、チルノを中心とするように動き出した。パキパキッ！と、硝子気質な音が響き、足元に広がる湖の全貌が、隅に渡るまで完全に凍りついた。質量を増した氷が隆起し、尖った山として何十も出来上がった。

その連鎖の全てを巻き起こしたと思えるような暴風から顔を守るために、髪は乱れリボンは解れているそいつは腕で顔を覆っていた。

ここに、完成する。

史上最強の妖精が、今ここに。

青く透き通った濃密度の力が炎のように揺らめいて、チルノの身体を包む。

口を固く閉じたチルノは、キッ！と、そいつを睨み付けた。

へう、とそいつが漏らした。足が震えている。そのまま今にも逃げ出しそうな顔をしていたそいつが目を見開いて、一気に力を解放した。

同じように、暴風がチルノに襲いかかる。

しかし、チルノは顔を庇うでもなく、ただそこに立っただけだった。頭の後ろの青い大きなリボンが強く揺れて、少し短くなっているスカートが足に絡みついた。

そいつの力は、確かに凄まじかった。

だが、チルノの力もまた、凄まじいものになっていた。

しかし、何かある、と。

この強大な力のほかに、何かを隠していると、チルノは思った。何故そう思ったのかはわからなかったが、チルノには、どうしてもそう思えてしまった。

なんてこと勘ぐったのも一瞬のこと。

怒髪、天を衝く。

ドギヤウ！と派手な音を立てて、炎が一瞬大きくなった。心地のいい熱さがチルノを包み込む。

大ちゃんだ。この力は、大ちゃんのものだ。

考える出なく、チルノはそう感じていた。

理屈やなんかじゃない。絶対にそうなんだ、と。

「な、んで、お前にそんな力が、どっ、どこにそんな力があるんだよ！？なんで！！なんでなんでなんで」

なんで、なんで、と疑問を口にし続けるそいつは、やがて首を振った。

そして、呟く。いい。関係ない、と。

「妖精ごとき、この力で捻り潰してやる！！」

恐ろしい形相だった。端正な顔立ちなのだから、尚更のことだった。そいつは叫んだかと思うと、右肘を前にして、どこまでも凍っている湖の表面を蹴り碎き、凄まじいまでのスピードで突っ込んできた。それを真正面から見据えたチルノは、そいつに叩きつけるようにして叫ぶ。

「お前はもう！！謝ったって許さないぞ！！！！」

白濁とした白い光と、透き通った青い光がぶつかり合った。
重い音は、遠くどこまでも響き渡っていった。

きつと、悪い人じゃないよ（後書き）

霊夢の死亡フラグがひとつたったのさ。

超妖精（前書き）

驚くべき厨二。

うふふ、二度目の死です。さよなら霊夢、今度こそあの世に行けよ、なんて。

超妖精

二つの影が空中で交差し、ぶつかりあった。

そこを中心に近いものどうしが衝突する鈍い音が轟き、衝撃による突風が凍った湖面を撫でていった。

交わっていたのも一瞬で、すぐさま二つの影は離れ、別の場所へと伸びて再び交差する。

幾度となく、二つはぶつかりあう。

時には空中で、時には湖面を削って、時には湖面にそびえる氷山を破壊して。

砕けて散った氷のつぶてがあられと降る中で、何度目かの交差を繰り返した二つの影の一方が、弾かれたように地面へと接近していく。紅と白からなる人間であった。

質量を増して硬く厚くなっている凍った湖面に、体制を整えて足から着地した紅白は、その勢いのまま衝撃を逃がすために屈伸する。が、全ての衝撃を逃がすことが出来ず、湖面は陥没し、走った亀裂に耐えきれない氷が紅白を中心にめくれあがり、分厚い横面を見せた。

紅白は、そんなことなどお構いなしに左手を湖面へと押し付けて、無限に続くように鋭い視線を上へと向けていた。

その上空から、青い弾丸が一直線に突っ込んでくる。澄んだ青い炎を纏った氷精であった。

右の拳をぐんと伸ばして、矢の様に風の中を突っ切る氷精に、たまたらず紅白は、白く濁った炎を纏い、横へと逃げる。

目標を失ってなお氷精は止まらず、先程まで紅白がいた場所へと拳を叩き込んだ。

さらに大きく陥没し、氷の欠片を飛ばす湖面から瞬時に拳を引き抜いた氷精は、炎の粉を散らせて紅白を追う。

後ろの氷精ばかりを気にして逃げる紅白は自分の前面にそびえる氷

山に気が付かずに衝突、しかし、壊れたのは脆い人間である紅白ではなく硬い氷山だった。

半ばから身を削られてきらきらと光る結晶を散らせる氷山に紅白はスビードを失い、その氷山の中にとらわれた瞬間に、追いついた氷精により氷山ごと殴り飛ばされた。

鮮やかな赤を口から噴き出して吹き飛ばす紅白に追撃と、氷精は氷の矢を自分の周りに幾つも作りだしマシンガンのように撃ち出した。その全てが紅白に当たるかと思われた瞬間に、紅白の姿が掻き消え、それに気が付いた氷精の姿までもが掻き消える。

再び湖に響く轟音。吹き荒れる暴風と衝撃波に、湖のほとりの木々が何度もその身をしならせる。

と、急に先程の嵐のような風が止み、静けさが湖を包んだ。

完全に凍り、所々に頂点の鋭く尖った氷山を幾つも拵えた湖の中心、その上空に、反する力の炎を纏った人間と妖精が睨み合いの上で対峙していた。

ふっ、はっ、ふっ、と獣のように荒く呼吸するのは、紅白。

整った顔を歪めて、悔しさを顔に滲ませて歯を食いしばっている。

左の頬が青くなっており、身体のいたるところに切り傷や打撲痕が点在していて、その殆どから血が流れていた。早くに固まった血液がこびりついている部分もある。さらには、凍傷と思える傷も幾つもあった。

口の端からも、一筋の血がたれている。荒い呼吸に交じって、赤白い煙のように霧散していく。

服などは、右の腕も左の腕も、括り付けられていた白い袖の姿はすでになく、紅い紐とぼろきれの端の様な白布がぽつんと残っていた。赤い上服もスカートも、よれてほつれて裂けて破れて、細い腰や、まだ年若い証の張の強い太もなどを覗かせていた。

対する氷精は、その呼吸に一片の乱れもなく、静かに風に揺れる癖のある水色の髪が、彼女の勝気な顔を引き立てていた。紅白と同じように、口の端には血を流した跡があり、ワンピースの様な青い衣服は所々が破けて穴が開いていて、肌を覗かせていた。

しかし、氷精の表情は気丈さを失っておらず、引き締まった眉の下にある強い意志の灯った青い瞳が紅白を貫いており、小さな口は真一文字に固く結ばれていた。ほぼ破れている、頭の後ろの大きなリボンが風にさらされてほどけ、湖上へと落ちていく。気にせず氷精は、右の腕でぐいと口元を拭った。

線の細い紅白よりもさらに小柄な、人間で言えば七に満たぬようにも見えるその身体のどこにそんな気迫が潜んでいるのか、纏う光と合わせて、何もかもを一睨みで潰せてしまいそんな重圧感を放っている。

「本気を出せ」

澄んだ声が、紅白に突き刺さった。

紅白は、いつそう顔を歪ませて、ほんきイ？と呟いた。それから、何が可笑しいのか、ククツと喉の奥を震わせて笑った。

くひひ、ひははは。気味の悪い笑い声をあげる紅白を、ただ黙って氷精は見据える。

「妖精風情がふざけやがって！！そんなに死にたいなら見せてやる！！」

ドン！と、氷精へと突風が叩きつけられた。

氷精は、揺るがない。ただ少しだけ眉根を寄せて、何も変わってない、と呟いた。

紅白が氷精への攻撃の予兆を見せる。瞬間に氷精は動き、紅白を殴り飛ばしていた。追いつがるように中空を蹴って飛び、紅白へと右足を向け、左足を折りたたんで突っ込んだ。

氷精の右足が紅白へとぶち当たる！刹那に、がばっと紅白は身を捻り、その一足を避けた。

途端に左足に襲われて、骨の折れるような音と共に弾き飛ばされていく。

その場で急停止した氷精は、向こうで一回転して留まり、自分の右腕を信じられないという目で見て喚く紅白がどう出るかを見ていた。

「オレの、うで、がつ、くふぁ、ありえない、こんな、こんなっ！
！オレの、うで、」

肘の部分から本来曲がる方とは真逆の方向に曲がっている腕を自分の顔元へとかかげて喚く紅白に、氷精はさらに追撃を仕掛けることにした。が、その瞬間にはすでに紅白が目前まで迫ってきていた。片方の腕を使えなくなっとなお、片腕だけで猛烈なラッシュを繰り出してくる紅白の腕を、しかし氷精は冷静にさばいていく。経験の差か、先程までは近接戦闘において押されていた氷精も、今となっては絶対の優位を作り上げていた。

紅白の額に頬に玉のような汗がいくつも浮かんで流れていく。焦りに表情を曇らせる紅白の姿が、掻き消えた。

仁王立ちのように動きを止める氷精の背後に、拳を振り上げた格好の紅白が現れる。氷精は前を見据えて動かず、ただ一言つぶやいた。

「後ろ」

前面に身体を倒して両足を合わせ、槍のように後ろに突き出された足が、今まさに拳を振り下ろそうとしていた紅白の腹に突き立った。身体をくの字に折って吹き飛ぶ紅白の真横に氷精は追いつき、その耳元に口を寄せて呟く。

「動きがなっていない」

バオ、と風を薙いで咄嗟に振られた紅白の折れた右腕を高速でかわした氷精は、その背後に回り込む。

自分に向かって吹き飛んでくる紅白の首の付け根に、氷精は勢いよく両の肘を叩き込んだ。

声にならない叫びがあがる。

再びその背に追いついた氷精は、組んだ両腕を紅白の後ろ姿へと叩きつけ、姿を掻き消した。

現れたのは、紅白の下方。隕石のように地へと落ちる紅白の鳩尾に、かかとに重きをおいた氷精の蹴りが入った。

背の裏にまで衝撃が突き抜け、ボキボキと骨の折れる音が短く響く。細い悲鳴が、紅白の口から漏れた。

地に向かう衝撃を緩和され、その場に一瞬滞空する紅白を回し蹴りによって吹っ飛ばした氷精は、同じように追いつき、真正面からその首を掴んだ。そのまま湖面へと突っ込んで紅白を氷へと叩きこみ、勢いを殺さずに湖面をガリガリと削って進み、背面の上服が破れて硬い質の防具服が覗いている紅白を持ち上げた。

だらんと手を垂らしてぐったりとして動かない紅白を、身長の関係で完全に持ち上げることが出来なかった氷精は、その腹に拳を叩き込んで冰山がある方向へと殴り飛ばした。次いで、空中へと浮かび上がり、手の平を上、右腕をかけた。

冰山の中腹に大の字にめり込んだ紅白は激しく吐血し、荒く息を吐いてもがいた。身体中をめぐる激痛を抑え込んで抜け出そうとするが、力が入らないらしく、うまくはいかない。

氷精のかかっている掌の上に、妖力が纏わった氷の矢が出現した。勢い良く振りかぶった氷精は、そのまま氷矢を投擲する。紅白は、避けることなんてできなかった。

腹を貫通して半ばまで自分と冰山に突き立つ氷矢、その、自分の腹に突き立つ氷矢を見てから、思い出したようにまた紅白は吐血した。顔が青白くなっているのは、血がなくなってきたから、という理由だけではなさそうだった。

目じりに溜まっていた温い水が、紅白の頬を流れてあごを伝い落ちた。

痛みによるものなのか、恐怖によるものなのかは、紅白にしかわからない。

氷精の右足に、濃密な妖気が渦巻く。空気中の水分が凍り、粒になつて足に纏わりついた時、氷精が天狗もかくやというスピードで紅白へと迫った。

そのさなか、空中で身体を丸めて一回転した氷精は、何時の間にか急降下キックの構えを取っていた。突き出される足は、力を纏った右足。その右足は、寸分違わず紅白に突き立つ氷矢を押し込み、紅白もろとも冰山を粉々に吹き飛ばした。

氷山の残骸が降りしきる中、氷精は凍った湖面に降り立った。見据える先には、うずだかく積もった氷でできた瓦礫の山。その一角が吹き飛んで、ゆらりと立ち上がる満身創痍の紅白の姿が見えた。小刻みに震える紅白は、左腕で口に垂れる血を拭う。それから、だらりと腕を落として、俯いた。かと思えば、顔をあげて、叫ぶ。

「なあってだ！？お、オレはハクレイレイムだぞ！？幻想郷で一番強いんだぞ！？こんな、こんなことがあってたまるかぁ！！！」

言うが早いか、紅白は一瞬で接近して、氷精の頬を殴っていた。ぶれる視界のなか、はい、と氷精は思う。

連続して放たれる膝蹴りを、自身の膝で防いで、殴り返す氷精。殴って、殴られて、いなして躲して防いで防がれて、いなされて躲される。殴る蹴るの応酬が続いていた。

ただ、紅白が動くたびに腹に空いた風穴から血が噴き出て、びちゃびちゃと氷精や湖面に撒き散らされていた。

ビツ、と飛び散った血液が氷精の目に入った。

その痛みに怯んだ一瞬の隙を紅白は逃さず、氷精の腹に拳を叩き込む。浮き上がる氷精の小さな身体を右足の蹴りで吹き飛ばした紅白は、すぐさま追いついて、大きく上げていた右足で氷精を踏み抜いた。

うあつ！？と、氷精の声があがる。衝撃に三度、湖面が陥没した。何度も何度も足を振り下ろしては、執拗に氷精を踏む紅白の顔は、最早青白いを通り越して死人そのものだった。

「残念！だったな！！お前は！確かに強い！！『この世界』で一番の強さだ！！このオレを除けばな！！！」

区切り区切りに力を込めて、踏む足のタイミングと合わせて叫ぶ紅白に、氷精は自身の骨が砕ける音と、血を吐くことでしか返すことが出来なかった。

最後の言葉とともに、一際強く横腹を蹴りあげて、吹き飛ぶ氷精から目を離さずに紅白は左手に力を込めた。

「ばっ！！」という短い言葉と共に左腕を突き出す。すると、不可視の衝撃が氷精を襲い、吹き飛ぶ勢いをさらに加速させた。んゝゝゝ、と、声を漏らして、左手に再度、今度はありつただけの靈力を込めて、同じように突き出す。特大の靈力弾が放たれ、光の尾を引いて飛んでいくそれはすぐに氷精に追いつき、そのままその先にあつた氷山にぶち当たり、凄まじい爆発を巻き起こした。

紅白は、勝ちを確信する。耳元まで裂けてしまいそうなほど口の端を吊り上げて靈力弾の爆発によって広がった熱で溶け、水蒸気と化して蔓延している上空を見ていた。

水蒸気が、晴れる。

紅白の笑みが消えた。

氷山の無くなった上空に、衣服だけをボロボロにした氷精が、最初と変わらぬ表情で浮いていた。

なんで……？と、泣きそうな声が、紅白の口から漏れていた。

氷精は見下ろす。彼女の大切なものを奪った、悪い奴を。

そいつは啞然とした表情で、氷精を見上げていた。纏っている靈力は全力のピークを過ぎ、先の全力とは比べ物にならないくらいに減っていた。今の氷精ならば、あの紅白を小指一本でも殺せてしまえるだろうが、氷精はそうしようとはしなかった。

もっと、圧倒的な力で、絶望の淵で殺してやる。

そう思っていた。

「オレは……しゅ、しゅじんこうなんだぞ……？この世界の、主人公なんだぞ……？なのに、なのにい、なんでえ……？」

怒りなのか、なんなのか。血を失っているというのに顔を真っ赤にして目尻に涙を溜める紅白を、氷精は絶対零度の心で見下していた。なおも、紅白は続ける。

「おまえは、ようせいなんだ。しゅじんこうのオレに、たおされなきゃいけないんだ。だ、だって、そうじゃないと、さきに、さきに……」

ぐず、ぐず、とすすりあげて、口の中にある血液を飲み込んで、一歩、前に出る紅白。

もう限界だった。砕けた肋骨が動くたびに内臓を気付つけて激痛を誘う。折れた右腕は腫れ上がり、いつそ冷たいくらいの痛みを発していた。視点が定まらない。

…なんで、俺は立ってるんだろう。

心のどこかで、なんで俺はこんなことをしてるんだろう、なんでだろう、と、ずっと考えていた。

しかしそんなことは関係なく、頭の中を満たすのは、ただ言葉のみ。ずっと昔のように感ぜられる誰かの言葉を、同じように繰り返すだけ。

もう、自分で自分の言葉を作り出すことも出来なかった。

「うぎいいい！！！！お、おまえはここで死ななきゃなんないんだ！！そうじゃないとだめなんだ！！お前は！！！」

氷精は、気付いた。

残っている分だけ全ての霊力を左手に集めている紅白の姿に。

氷精は、あえて今は動かなかった。ただ、絶望の淵に、と口の中で呟いて、口の中にある血を飲み込んだ。

紅白は口から血を吐き出しながら、血走った目で叫ぶ。

「おまえは！！オレにッ、たおされるべきなんだああああああああああ！！！！！」

パウツ、と高い音が響いて、紅白が突き出した左手から、白く、いや、もう灰色近くまで濁った光が放たれ、世界を染めて氷精へと迫った。

氷精は、ゆつくりと……非常にゆつくりと右腕を上げる。

大ちゃんのかたきだ、と口の中で呟いた。

一瞬のうちに、紅白が放った光線の力を超える妖力が溜まり、バチバチと音を立てて肥大する。

それから、氷精はなんの躊躇いもなく腕を突き出し、憤怒の思いを吐き出した。

「死ねええええええええええ！！！」

世界を照らす青が氷精の手から放たれ、ただの一瞬も光線同士拮抗

することなく、濁った光線を飲み込んで紅白へと迫っていった。

突き出した左腕からギシギシと不吉な音がするのを、紅白にはどこか遠くに聞こえていた。紅白は、自分の放った光線と一分一厘もせめぎあうことなく飲み込んでゆつくりと視界いっぱい迫る澄んだ青を、何もかもを認めたくないという目で見ていた。

青白い唇が小さく震えていた。前歯を下唇にかけても、その震えは止まらなかった。温い水が、目尻から零れる。

どうして、と、声がした。それが自分の声だということに気が付いた紅白は、自分の胸にもう一度問うた。どうして、と。

なんでこんなことがおこっているの？どうして、わたしがここにいるの？と。

幾千万の文字と記号と、その集合体、映像たちがスーパーコンピュータもショートする速度で頭の中を飛び交っていく。

ニカリと笑う魔理沙がぱつと浮かんだかと思うと、今度は紫の顔が浮かんで、次いで、今まで生きてきて見てきた者たちが、とくに、この世界に関して見てきた静画や動画たちが、鮮明に蘇ってきていた。二次創作と呼ばれていた小説群の、死に関する言葉やその一文が次々と浮かび上がり、消えていく。

それから、未だ出会ってもいない、この世界にいるはずの人妖たちが、一人一人目の前に現れては、どうしたの？と聞いてくる。

紅白はただそれに、『どうして？』としか返せなかった。そう問いかけるたびに目の前にいる人は消えて、また新たに誰かが現れる。何度も繰り返し、しかし答えは得られなかった。

全ての幻想が霧散して、紅白に現実が突きつけられた。

もう目前まで迫ってきている力の奔流が、逃れようのない死を物語

っていた。

死ぬはずがない。だって、だって……わたしは、はくれないいなんだよ…？

悪あがきのように、そう心の中だけで呟く。途端に、周囲に今まで出会ってきたすべての人間が一斉に現れて、重なった声で、『どうして？』と聞いてきた。

その咎めに、紅白は震えあがる。

『自分でもわかってた』

紅白の心の奥底にある思いを、かわりに周囲の幻想達が語る。

紅白は、耳を塞ぎたかった。自分の悪い部分を知るなんて、嫌だった。でも、耳を塞ぐことはできない。

左手は突き出しているし、右腕は折れている。どうしようもなくなってしまった。

みんなが、慈しみのこもった笑顔でもって、紅白へと語りかける。

『最初から、人に優しく接していれば良かった。自暴自棄にならず、問題と向き合っていれば良かった』

無理だ。紅白は、首を振る。

そんなの無理だ。出来っこなかった。

わからなかったから。自分の気持ちも、状況も。

そうして、周囲の人間たちが言っていることは自分の言い訳なんだと気が付いた。気がついた途端に、全てが消えた。

魔理沙だけが残っていて、こちらを見ていた。

この世界で唯一縋れる存在だった。

一緒にいてくれて、心の支えになってくれる人だった。

魔理沙に手を伸ばそうとして、動けない事を思い出す。助けて、と声に出すだけにとどめた。

魔理沙は小首をかしげて、それからニカリと笑った。

紅白は安堵に包まれた。ああ、やっぱり魔理沙の笑顔は素敵だ、と。

『ああ、どうしてだ?』

そして、次の瞬間に凍りついた。

うそでしょ……、と声が漏れる。だって、そんな……。

魔理沙は、ふと真顔になって、

『ゲームの世界ではない』

と、それだけ言った。その背後から青い光が溢れて、視界が埋め尽くされる。

光が自分に向かってきていた。

みつともなくてもいいから、何度でも助けてと言いたかった。

こんなつもりで今までやってきたんじゃない。ちゃんとしようとして、がんばってきて、だから……

助けて、と。

ここがゲームの世界ならば、なんだかんだ言って主人公である紅白は生き延びられていただろう。
しかし、ここはゲームの世界ではない。
世界は、紅白に優しくなかった。

紅白は、青に染められる。
そして、消滅する。凍った湖と共に。

それはもう、逃れようのない現実だった。

超妖精（後書き）

ゲームの世界なんかじゃない。

それはもう、当たり前前の事だった。

でも、そんなのわからなかった。

だって、いきなりこんなことになって……

自分を偽らないと、おかしくなりそうだった。

本当はルーミアやチルノと友達になりたかった。

どうしてこうなったかなんて、わからなかった。

だから、ききたいんだ。あなたたちに。

ねえ、どうして？

救世主（前書き）

急いで投稿。早くほのぼのが書きたいです。

魔理沙を描いているうちに好きになった。霊夢も。

救世主

澄んだ青の光が、霊夢へと迫っていた。

霊夢が放った光線をものともせず、霊夢を飲み込もうと迫っていた。

もう、霊夢にそれをどうこうできる力は残っていなかった。

残された道は、ただの一つのみ。成す術を持たない霊夢が、死ぬだけ。

少なくともそれは、二本の黄色い極光が青い光と、それを放っているチルノへとぶつかっていくまでは、決まっていることだった。

自分へと向かってきた極光を、チルノはあいている片手で押し留め、蹴り上げて方向をそらす。

しかし、放っている光線にぶつかってきた方には何もできなかった。黄色にあてられた青色は、一瞬紫電を散らせて爆発した。爆風に霊夢が枯葉のように吹き飛んでいく。

その身体を抱き止めて搔つ攫っていった黒い影が、チルノには見えていた。

氷山の合間を縫って凍った湖面に降り立った白と黒からなる服を着た人間は、湖の状態に驚く間もなく、さっと後ろ腰に括り付けられている袋から小さな瓶を取り出して、栓を口で抜いて、その中身、黄色い粉を自分を中心に円を描くように振りまいた。瓶をカランと

落として、ぼそぼそと早口でなにやら呟く。

すると、円を描くように撒かれていた粉が発光し、次の瞬間には、何事もなかったかのように粉ごと光は消えた。

それから人間は、抱いている霊夢を気遣うようにゆっくりと屈んで、霊夢に声をかけた。

ぴくりと霊夢が反応したのを見て、ひとまず生きていることを知った白黒の人間、魔理沙は、降り立った時に足元に投げたほうきを手で押しやって、霊夢を寝かせ、トンガリぼうしの縁を指で押し上げながら、「ひでえ傷だ……」と呟いた。

霊夢が声に反応して薄く目を開くと、魔理沙は続けて言う。

「これを飲め、霊夢」

袋から取り出しておいた宝石のような黒い石を、魔理沙は霊夢の口に押し込んだ。半ば無理矢理に口に異物を入れられて、咳き込む前に口を塞がれた霊夢は、思わずゴクンと飲み込んでしまう。

次いで魔理沙が取り出したのは、半透明の液体がなみなみと入った大きめのフラスコだった。

キュポンと栓を抜いて、フラスコの細い口を霊夢の口に突っ込んで傾ける。

霊夢の口の中で、今まで味わったこともないような苦味が暴れまわり、目を見開くが、何もできずにどんどん液体を飲んでいく。

するとどうだろうか。気分がすうっと良くなったかと思うと――
――身体中の傷がジュウジュウと音を立てて激痛を訴えだした。

「~~~~~ッ!!!!」

言葉にならない悲鳴をあげる霊夢を抑え込んだ魔理沙は、フラスコを投げ捨ててミニ八卦炉を取り出し、舌を噛んでしまわないように霊夢の口に噛ませた。

それから、関節部分であらぬ方向に曲がっている右腕を取って、「ふんっ！」と力技で関節を入れなおす。

霊夢がか細い悲鳴をあげるのと共に、ミニ八卦炉がギシギシと鳴った。魔理沙は片手間に自分のスカートを破いて包帯に見立て、ほうきの柄を蹴り折って添え木を作り出して霊夢の右腕に巻いた。

ぐるぐると巻いて、きつく縛る。これで、骨が自然にくつつくまでは腕を曲げることはできないだろう。

激痛に荒く息を吐く霊夢の口からなんとかミニ八卦炉を取ると、唾液がわりと大量についていて糸を引いた。それに気が付いた魔理沙は、自分の服でゴシゴシと拭って、涙で潤んだ目だけで『どうして？』と問いかけてくる霊夢に、悪い予感がしたんだ。大当たりだったぜ、当たって欲しくなかったけど、と言った。

タツ！と、近くにチルノが降りてきた。びくりと霊夢が震える。魔理沙は、何かを言おうとする霊夢の口を塞いで、『静かに！』と目だけで伝えた。霊夢は、恐怖心を抑え込んでくりと頷いた。

チルノに顔を向けた魔理沙が、すげえ妖気だ…、と口の中だけで呟く。当のチルノは、ガラガラした瞳で素早く周囲を見回して、「どこにいった！？くそっ！」と悪態をつき、勢いよく背後の冰山を振り仰いだかと思えば、そこかっ！と叫んで飛び去って行った。

霊夢は、自分の口に押し当てられている魔理沙の手を弱々しい力でどかして、掠れた声で、何が、起こって……、と呟いた。チルノが目の前にいた自分たちを見つけられなかったのが不思議に思えたからだ。

魔理沙は、チルノが飛んで行った方に向けていた目を霊夢に合わせ、

「喋っちゃだめだ、まだ傷は塞がってないんだから」

と言ってから、起きあがろうとする霊夢の肩を優しく押し戻して、傷が治ったかどうかを確認していく。

先程まで霊夢の身体中にきざまれていた傷たちは、そのほとんどが治っていて、青白い肌を覗かせていた。ただ、右腕の関節と腹部に空いたこぶし大の穴は治りきっていなかった。

魔理沙がどうしたものかと考えていると、霊夢が激しく咳込んで、魔理沙から顔を背けて血を吐いた。

魔理沙は慌てそうになる自分の心をどうにか抑制して、霊夢が息を詰まらせてしまわないように、楽な姿勢を取らせる。荒い息をつくたびに、苦痛に顔を歪める霊夢の顔色は、これ以上血を流してしまえば本当に死んでしまいそうなほど悪かった。ひゅー、ひゅー、と霊夢の息が細くなってきた。少しでも楽に呼吸させるために、魔理沙は霊夢の胸元に手をかけて、ぼろぼろの上服を破り捨てる。案の定、ほとんど破れていたせいで、少しの抵抗もなく取り除けて、下着代わりの防具服が目に入った。

魔理沙は、霊夢が少し前に、この防具服について得意げに語っていたのを思い出した。曰く、最強の防具だと。

一番強い防具ってなんだよ、と笑った記憶があった。しかし、確かにその下着から感じられる霊力は尋常じゃなかったことも覚えている。

それほどの防具に穴をあけるなんて、どういう妖怪だよ、と魔理沙は身震いした。

魔理沙は、身体の震えを誤魔化すように後ろ腰に手を回して、自分の家から急いでとってきた物を取り出した。

まさか、全部使うことになるとはな、と呟いて、取り出したフラスコの栓を抜き、粉末やら細かい結晶の様な石を入れて、軽く揺らし

て混ぜる。

はじめ半透明だった液体は緑色になり、赤に変わってすぐに灰色になり、最後に透き通った薄い黄色になった。

よし、と、それを霊夢の口元に持っていく魔理沙。しかし、ここで問題が起きた。

霊夢がフラスコを左手で押し返して、いやいやと首を僅かに振ったのだ。口をキュツと結んで、頑なに飲むことを拒んでいる。しばらく口元で揺らしてみても、一向に飲もうとする気配を見せなかった。

「霊夢、頼むから飲んでくれ。気持ちは分からなくもないが、それよりも自分の身体の事を考えてみる」

困った風に言ってみても、霊夢は変わらずに口をつける気配はなかった。

心底困り果てた魔理沙は、今度こそ焦って、どうしようと必死に考える。飲まさせないと、このままじゃあ霊夢は確実に死んでしまう。しかし飲む気配はない。

眉根を寄せて、うーんと唸っていると、ひとつだけ案が思い浮かんだ。焦っていた魔理沙は、すぐにそれを実行に移した。

ええい、ままよ！と自分の口にフラスコを持ってきてひとくち含む。それから、霊夢の口に唇を押し付けた。口移しだ。

何が起きたかわからない、と目を見開いた霊夢の口に舌を差し入れて閉じていた口を抉じ開けて、液体を流し込んだ。全部流し込むと魔理沙は口を離れた。顔が赤いのは自分でもわかっているが、今は緊急事態なのだと自分を落ち着かせて、口を拭う。いや、拭おうとして、やめた。何故かは知らないが、そうしないと駄目な気がした。鉄の味がしたな、と別の事を考えて気を紛らわそうとしたが、味、という単語が脳内センサーに引っかかって余計に赤面した。

霊夢は、その青白い顔色に若干の赤を混じらせながらも液体を飲み込んで……ガバリと身を起こして、魔理沙の手からフラスコをかつぱらい、ラッパ飲みをした。

ごきゅごきゅと喉を鳴らして豪快に薬を飲む霊夢に、魔理沙はなんとなしに顔をそらして、自身のふわふわとした金髪を指に絡ませながら、甘党だなあ、霊夢、と呟いた。

どうやらフラスコの中身は、どういうわけかなり甘い液体になっていたらしい。

中身のなくなったフラスコから口を離れた霊夢の顔は、名残惜しげではあったが、血色はかなり良くなっていた。

ふと霊夢は魔理沙の方を向いて、俯く。「ありがとう……」と小さく呟いた。

魔理沙は気恥ずかしくなって、いや、まあ、なんだ、別にいいさ、と頭の後ろを掻きながら言った。

膝に手を当てて、霊夢が立ち上がろうとした。が、すぐに体勢を崩す。魔理沙はそんな霊夢を支えて、

「おい馬鹿、まだ腹の穴は塞がってないんだ、安静にしとかなきゃ」

霊夢は息をついて、小さく横に首を振った。視線を曲がない右腕に向けて、

「行かないと……終わらせないと。私、間違ってた」

と呟いた。

魔理沙は、そう言ってもう一度立ち上がろうとする霊夢をゆっくり

と横に寝かせて、ほうきを手に取った。柄は折れているが、何とかまだ飛べるだろう、多分。

遠くの方で、氷山が崩れていくのが見えた。魔理沙は、震えそうになる自分の足に力を入れて立ち上がり、霊夢に、この粉の円の中から絶対に出るな。安静にしてろよ、と早口で言っつて、粉をまたいで円を出た。途端に、後ろにいた霊夢の姿が見えなくなる。

円の中にさえいれば、姿と気配が遮断される魔法だった。身動きが取れなくなるという点で、魔理沙は自分には向いていないと思っっていたが、持ってきておいて正解だった。

ぼうしの縁をつまんで具合を直そうとしていると、ピシユン！と高い音がして、瞬きもしていない間に、目の前にチルノが現れた。魔理沙は驚きを胸中に押し込めて、目の前に立つ化け物を睨み付ける。

未だかつて、これほどまでに馬鹿でかい妖気を放つ妖怪と、魔理沙は相对したことがなかった。背に冷や汗が伝う。

「あいつをどこにやった」

澄んだ声が、魔理沙に突き刺さった。

突き刺さったというのはもちろん比喻なのだが、魔理沙としては本当に鋭いものを突き立てられた気分だった。歯を食いしばって、魔理沙は膝どころか身体全体が笑ってしまいそうになるのを堪えて、無理矢理シニカルな笑みを浮かべた。

「霊夢のことか？さあな。今頃は地の果てか」
「ふざけるな！――！」

分厚いガラスが衝撃を受けて砕け散るような音がしたかと思うと、魔理沙の視界がぶれた。

慌てて飛び退くと、なんと今立っていた場所の氷が湖面から剥がれて盛り上がっていた。

そこだけじゃない。チルノの方に目をやれば、片足が湖面に突き刺さっていて、そこから八方に伸びる網目状の罅の先々で氷がめくれあがっていた。

いよいよもって魔理沙は肝を潰してしまった。

魔理沙は、自身の肝が小さいとは微塵も思っていない……いや、心底小心者だとは思っていたが、正直ここまで疎みあがってしまうなんて予想だにしなかった。軽口を叩く余裕すらもなくなって、魔理沙は震える手でミニ八卦炉を取り出した。が、あまりに震えていたために取り落としてしまった。

あっ！と手を伸ばすが届かず、思わず屈んで手に取ってしまった。瞬間に、ふっ、と頭が軽くなった。

次いで、頭上を台風が通過したかのような風が吹き荒れる。仰け反って、風が止むまで目をつぶっていた。

風が止むと、魔理沙はまず頭に手をやった。…ぼうしが無い。ばつと後ろを振り返ると、丁度こちらを振り向いたチルノと目があった。チルノの後ろには、風にさらされて別々の方向に転がっていく、真つ二つになったトンガリぼうしの姿があった。

何をされたのか、魔理沙にはわからなかった。

まさか、先程まで自分の胴体があった場所をチルノの鋭い蹴りが通っていたなんて、思いもしなかったのだ。

本能に押されるままに、魔理沙は縦に持ったぼうきの掃く方に足をかけて浮かび上がる。

しかし慣れない体制で飛ぼうとしたことと、ぼうきの柄が折れていて重心がずれていたせいで、がくんと後ろに倒れこんだ、かと思えばぼうきが滅茶苦茶に動いて、最後には横一線に動いた。

と、バシン！と激しい衝撃と音が魔理沙の動きが止まる。回りそうになる目を衝撃のした方に向けると、右の拳を振りぬいた状態で、左腕でほうきを押し留めるチルノの姿があった。

うわ、と声に出して、咄嗟にほうきを繰り、離れたところに降りる。自分の拳を握ったり開いたりしながら、森を背後にチルノが降り立った。

「あたいの攻撃を避けて……反撃してきた！」

その口が、小さく動く。強い、と。

魔理沙は、チルノが呟く間に構えて、ミニ八卦炉に魔力をこめ始めた。

ふふ、とチルノが笑いを零す。魔理沙はムツとして、

「何笑ってんだよ。なめんなよ」

と、挑発まがいの言葉を口にした。チルノは顔を引き締めて、成る程、お前もあいつとおんなじ悪い奴か…、と呟き、妖力を脹れあがらせた。

顔を歪めて、大ちゃんを殺した、悪い奴の仲間か…！と憎々しげに言う。

チルノは、振り上げた両腕を、腰を曲げて中空へと叩きつけ、怒りを露わにした。

「あたいは怒ったぞおおおおお！！！！」

ビリビリと、声が魔理沙の鼓膜を震わせた。それは、魔理沙にとっては酷く突拍子もない言葉と怒りだった。

ちくしょう、化け物め。

そう思っても、魔理沙は一步も引かなかった。引けない理由が、後ろにある。

この妖怪は、確かに強い。あの細腕に秘められた力で殴られてしまえば、自分などはひとたまりもないだろうと、魔理沙は思う。だけれど、魔理沙は負けるつもりなんて毛頭なかった。あるじゃないか、ただの一分も勝ち目がない戦いを、わからなくする決闘法が。ぐっ、と今にもこちらに踏み込んで来ようとするチルノを手で制して、ニカリと笑う。

「まあまで、そう焦るなよ。ここはいつちょフェアに行くでしょうな？」

フェアに？とチルノが返す。

ええ、フェアですわ、と魔理沙は言いながら、懷からスペルカードを一枚抜き出した。

「弾幕決闘で勝負だよ。勝っても負けても恨みつこなした。そうだな、賞品は……お前が勝ったなら、私を好きにしていーいぜ。煮るなり焼くなり氷漬けアートにするなりな。私が勝ったら……私の言うことを一つだけ聞いてもらおうでしょう。どうだ？」

ぴくりと眉を動かして、構えをとくチルノ。よし、と魔理沙は零して、それからスペルカードの使用枚数を伝えようとする。が、

「お前なんかに興味はない」

と、そう言われてしまった。

そう言われてしまうと、少々分が悪くなる。スペルカード戦に持ち込まなければ、魔理沙には万に一つも勝ち目がないからだ。それくらい魔理沙にだってわかっていた。

しかし、提示した商品を飲み込んでもらわない限りは、スペルカード戦に持ち込むことができない。

どうしたものかと悩む間に、再びチルノが構えたのを見て、慌てて口を開いた。

「ま、まて！じゃあこんなのはどうか！？お前が勝ったら、何でも好きな願い事をひとつだけ叶えてやる！！」

そんなことを口走ってから、ハッ！とした。マズイことを言ってしまった気がしたからだ。

案の定、目をギラギラさせて、なんでも？とチルノが聞いてきた。

あーもう、勝てばいいんだ！勝てば！と自分を納得させて、「ああ、なんでもだ！」と魔理沙は言った。

言ってから、気が付いた。霊夢をだせと言われてしまっでは、本末転倒じゃないか、と。魔理沙は、

チルノは、構えたままスペルカードを取り出して、「三枚使う。あたいが勝ったら、大ちゃんを生き返らせろ」と、鬼気迫る表情で言

った。

霊夢に関してでない事に一応の安心を得た魔理沙だが、生憎魔理沙には妖怪を蘇らせるような魔法の心得はなかった。無論、妖怪以外でも同じだ。しかし、ここでそれを言ってもまたまずい立ち位置に戻るだけなので、

「OK、こっちも三枚だ。じゃあ、先手必勝！恋符「マスタースパーク」！！」

言葉と共にミニ八卦炉をチルノへと突き出して、溜めに溜めた魔力を黄色の極光として解き放った。

ぐつ、とチルノは、左腕を斜めに振り上げる。

うん？何をする気だ？と魔理沙は首をかしげるが、今は八卦炉を支えることに集中することにした。

ぐんと、マスタースパークがチルノへと迫ったとき、くわ！とチルノが目を見開いて、魔理沙の背後の空を見上げた。

魔理沙は、振り返ることはできなかったが、そこに何がいるかぐらいはわかった。

あのバカ！！円から出るなっっていたのに！！

背後の上空には、湖の先、紅い霧が濃くなっている方向の空へと全速力で飛ぶ霊夢の姿があった。

チルノが恐ろしいスピードで動き、構えたが、魔理沙には、チルノが霊夢のところに行こうとしていることがすぐに分かったので、八卦炉を無理矢理に動かして、マスタースパークもろとも方向転換、霊夢に追いつがるチルノの背へと向けた。

そんなに霊夢にご執心なのか、あっけなくマスタースパークに飲み込まれたチルノは湖面に落ちる。しかし、落ちる最中で体勢を立て直し、魔理沙の眼前に降り立った。瞬間に姿を掻き消した。

魔理沙は慌てて次のスペルカードを取り出そうとするが、こんな時に限って指が滑ってうまく取れない。

あわや、殺されてしまうか、という時に、突然魔理沙の足元から影が飛び出して、魔理沙の目の前まで迫っていたチルノにぶち当たった。

くると吹き飛んだチルノは、回転の中で身を丸めて体制を整え、離れた場所に降り立った。

魔理沙はやっとこさスペルカードを取り出してながらも、現れた影が何なのかを確認した。

「あれ？陰陽玉だ」

まさしくそれは、陰陽玉であった。霊夢の持っているはずのそれが、なぜここに？と魔理沙は首をかしげるが、今は目の前の敵に集中する。

二手目の先手もいただきだぜ、と魔理沙はスペルカードをかかげた。

チルノはただ魔理沙を睨み付けて、静かに立っているだけだった……。

救世主（後書き）

素晴らしく頭がヤバイ。ちゃんとした感想返しが出来ない。
真面目にやれ、私。

紅EX（前書き）

最終回。

すぐくひどい。色々と。

とても急ぎ足になってしまった。次の話は沢山練って書きたいです。題名をつけるときみなさんどうしてますかね、私は一瞬で考えたものをつけてますが、今回のようにそうとうひどいものにしかならな
いんですが。

ちなみに最初つけようとした題名は『リネーム巫女の最終決戦』だった。

たいしてひどさはかわらんね、どうも。

紅EX

妖力弾の雨の中を、俺は飛んでいた。

ばちばちと、当たっては弾ける弾幕が誘う激痛を、歯を食いしばって堪えて、その弾幕を放ってきている妖精たちには仕返しも何もせず、ただ飛んでいた。

妖精たちは、一様に怒っていた。

どうして情報が広がっているのかは知らないが、俺がしたことはすでに幻想郷中の妖精たちに伝わっているらしい。

それでどうして怒っているのかと言えば、それほど大ちゃんに情を寄せる妖精たちが多いから、なのだろう。

曲げられない右腕を庇いながら弾幕の嵐を突っ切って飛んでいると、いくつかの妖力弾が治りかけの傷を決っていた。悲鳴を上げて、痛みからくる集中力の途切れのせいで飛行速度を落としてしまうと、一気に妖精たちの追い撃ちがかかり、完全に集中が途切れてしまった。

必死に右腕を庇っていたおかげか、凍っている湖に落ちてても、右腕にはそれほどの衝撃はいかなかった。だが、そのかわりに左肩をひどくうちつけてしまった。

腕が痺れるばかりでなく、腹の穴からは血が噴き出て、胸の内は沸騰しているかのように、最早痛みでなく熱を伝えてきていた。喉をせりあがってきたのは、鮮やかな色の血液。吐き出した血の残りが口の中にとどまり、口の端から垂れるのを腕で拭おうとして、どちらの腕も動かない事に気が付いた。

身体を起こすどころか、うつ伏せになっているのをどうにもするこ
とが出来ずに、芋虫のようにのたのたと動いていると、妖精たちに
囲まれて一斉砲火をうけた。

これほどまでに数が多いと、妖精の弾幕など……なんて高を括ることも出来ない。それに、執拗に右腕や背中にあいている傷を狙ってくるために、痛みが絶えることはなかった。

ほれみろ、もう死ぬぞ。

ふとそんな言葉が頭をよぎる。

と同時に、ここがゲームの世界じゃないということを再認識した。自分が主人公なのだと、だから、死ぬわけがないと。

そう思っていた。でも、そうじゃなかった。

俺は、特別ななんかじゃない。だからこうして、口が開きっぱなしで、よだれと悲鳴が自分の口から絶え間なく漏れるのを止める事すらできない。この妖精たちに、殺されそうになっている。

俺が妖精たちに反撃をしないのは、『ハンセイ』のつもりだった。やってしまったことを、間違っていたと認識したからこそその行動だった。

でも、それは所詮独りよがりの自己満足でしかなかった。周りは、止まらない。わかってくれない。でも、それも当然なのだということはわかっていた。わかってはいたけど、耐えられそうになかった。

せつかく魔理沙が来てくれたのに、と申し訳なく思ったが、どの口が言う、と別の自分が心の中で言う。

光が眼前で弾けた。

魔理沙が飲ませてくれたもののおかげで良くなっていた気分が、何時の間にか悪くなっていた。

傷が熱い。でも、凄く寒い。氷が冷たい。いたい。

死ぬんだ。

わたし、死ぬんだ。

やだなあ、もつと、もつと楽しい事したかったなあ。

涙が流れる。心のどこかで、冷めている自分が何の感情もこもっていない目で自分を見ている気がした。

或いは、嘲りか。ひどく滑稽だった。

喜劇なのかな、悲劇なのかな、と意味を持たない疑問が脳裏をよぎった。英雄譚には届かなかったな。

何が英雄だ、と自分に憤って返す。しかし、煮えたぎるマグマのようなその憤りも、妖精たちの力の前にすぐに冷えて固まってしまった。

ごめんなさい。

ぼつりと、悲鳴の中にそんな言葉が混じった。

ごめんなさい。ごめんなさい。

できるならば、全部、無かったことにしてほしかった。そうでなくとも、許してほしかった。

死ぬのは嫌だ。怖い。

俺には、わからなかった。

ここは、俺が死んでしまう世界？死にはしない世界？目の前に迫る死に言葉を投げかけて、次には後悔していた。

魔理沙の言うとおりにしておけばよかった。あそこから動かなきゃよかった。

異変を終わらせれば……原作通りに事を進めれば、また原作のように戻れると思った。

でも、違うのだ。

そんなことがあるわけがない。セーブ機能なんてものはない。だから、ゲームの世界じゃ、ないんだってば。

今を生きる事しかできない。前に進むことしかできない。

どうしよう、一体どうすればいいんだろう。

泣きじゃくってしまいたいのに、妖精たちがそうはさせてくれなかった。

あれ？でも、涙は途切れることなく流れている。声も、うるさいくらいに出ている。

???わたしは、何をしようとしていたんだっけ。ん、わたしって誰だっけ。わたしだなんて、言っていたっけ。

妖精たちは無情だった。

逃避することさえも許そうとはしてくれなかった。痛みで現実へと引き戻す。

そして、再び苦痛に喘いで悲鳴をあげることになる。

今までわたしが他人に与えてきた痛みを、いっぺんに返されている気分だった。

流れ出て水溜りを作った血液が、妙に温かい。

…。

ぐちゃぐちゃと、光弾が弾けていくのにつられて血が跳ねる音が聞こえる。

……。

弾ける光が多すぎて、目がチカチカした。

……。

身体が震えている。妖精たちの放つ力に当てられて、震えている。

……！！

目を見開いた。

思い出した。思い出してしまった。

思い出さなければ、まだ、わたしが死にはしないかもしれない、紫が助けに来てくれるかもしれないと、様々な希望に縋っていたというのに。

博麗の巫女がいなくなっただって、また力の強い少女が巫女として連れてこられるだけ。

わたしが死んだって、困ることなんてないんだ。
代わりはいくらでもいる。

わたしは、とくべつなんかじゃ、ない。

「あはっ」

ぴたりと、弾幕が止んだ。いや、そう思えるだけか。

思わず笑いを漏らしてしまった。

なんだ、そうか。

かわってない。まったくもってかわってない。わたしは、ずっと昔から自己中心的で、わがままで。

霊夢として振る舞えたのなら、どんなに良かっただろうか。
もう、いいや。どうでもいいや。

ここで終わりだなんて、うそだから。

夢だもん。死ぬことなんて、ないもん。

きっと、危なくなったら誰かが助けに来てくれるから。
ファイズとかが。

だから、だから…。

「ごめん、な、さ……」

意識が、混濁した。

「………」

遠く、声が聞こえる。大勢に呼びかけるような、そんな声が。

「散れっ、散れっ、こら、撃ち方やめーっ！！散れーッ！！」

ぎゃあぎゃああと騒がしくわめいて逃げていく妖精たちの声の中で、不思議とよく通る声だった。

「まったく、なんだってこんなに妖精が…。とんでもなくでかい気を感じて飛んできたけど、勘違いだったか…？」

現れたのは、深緑色の、華人服とチャイナドレスを足して二で割ったような服を着た女性だった。

灰色がかった青い瞳に、明るさを放っているような、紅色の腰より長い髪。

美しいというより、格好いいというほうが似合っている女性だった。

「いや、やはり美しい、か。」

その女性は、湖面の上、妖精たちが取り囲んでいたのが、血溜まりに沈んでいる人間だということに気が付くと、両の太ももの部分から裂けるようにひらいている服を翻して、白い太もを大きく覗かせながら足早に近づいた。

赤に染まる少女の元で屈んだ女性は、うつ伏せで倒れている倒れている少女をゆっくりと仰向けになるように抱いて、その口に手を当てた。

息をしている。まだ、死んではない。

「なんと、惨い……」と女性は呟いた。

妖精たちではないな、この傷は。女性はそういつて、ふと、少女の傷が不可思議な力で治されていると感じいた。それから、右腕に布が巻かれているのを見て、治療された跡があることを知る。

あごに手をやって少しの間逡巡してから、少女の顔を見て、口から垂れているよだれや血を、素手で拭った。そうして、少女を背負った。

見捨ててはいられないと、自身が忠を誓った主の住家へと連れて帰ることにしたのだった。

何か、柔らかいものに支えられている感覚に、俺は目をあけた。

まず目に入っただのは、鮮やかな紅。細く糸のようなそれらは、俺が頬を預けているものだった。

うすらぼんやりとした頭でそれが何なのか考えてはみるが、まったく

くわからない。

手で触ってみようにも、目覚めたばかりなせいか、身体に力が入らなかった。

なので、口ではんで調べてみることにした。
はむ。

「！！!?」

びくりと、身体が跳ねた。

いや、違う。俺の身体が動いたんじゃない。俺を支える何かが動いたんだ。

「ちょちょ、な、なにしてるんですかっ！！」

耳の近くで叫ばれて、一瞬クラリとした。

が、その声を発した何者かが、俺の事をしっかりと支えてくれていたおかげで、倒れてしまったりはしなかった。

さて何事か、と目を向けてみれば、こちらを振り向く女性の横顔が見えた。といっても、どうやら俺はこの人に背負われているらしく、顔はよく見えなかった。

その横顔越しに、目に悪そうな紅い館が見えて、それから、その人がかぶっている緑のぼうしが目に入った。

ペツと口から髪を放して、その人の横顔をジロジロと見つめる。誰だろう、凄く見覚えがあるような気がする。

ふわりと、軽い浮遊感が身を包んだ。

その人が下を向くのにつられて、俺も下を見た。地面が、遠かった。あ、飛んでたんだ、と思っていると、地面が近づいてきて、着地する。

衝撃なんてこれっぽちも伝わってこなくて、なんだか、スポンジケ
ーキの上にもいるような気分になった。

「大丈夫ですか？」

その人の声で、拡散していた目の焦点が合わさっていく。

大丈夫、とは、何のことだろうか。それよりも、なぜ俺は背負われているのだろうか。ちょっと、恥ずかしいのだけれど。

身を擦って、その人の背から降りようと試みてるが、あ、駄目です。よ動いちゃ、と言われて、仕方なしに諦めた。思い出してみれば、身体中が痛い。

腹のあたりで粘つく熱いものを感じて、その人に押し付けていた腹を少し離して見てみれば、腹にあっていいる穴からだくと流れる……というほどでもないが、流れ出る血が粘着質に、その人の背にべったりとした染みを作り、赤い糸を引かせていた。

うわ、と顔をしかめる。それから、とても申し訳ない気持ちになった。

あの、とおずおずとして、服を汚してしまっていることや、こうして背負って——俺の考えが自分勝手なものでなければ、多分この人は俺を助けてくれたのだろう————くれていることに色々と言おうと声をかけようとすると、「喋れますか？」と聞かれて、何かを言う前に、小さな声で返事をした。

その人は、紅い館の門へと向かっていた足を止めて、「何があつたか、教えていただいても？」と言った。

どうするか、と一瞬思考する。が、そもそも俺には損得勘定をする

ような権利はないわけで、何も考えずにすべてを話すことにした。とは言ったものの、やはりというか、かなりぼかしたような話になってしまった。自分で自分のやった仕打ちを話すなんて、嫌だった。はぁ、妖精に……ですか、湖上の？と、にわかには信じられないという調子のその人の言葉を聞いていながらも、俺は何か引掛かっているのを感じていた。

何か、何か大事なことを忘れているような気がする。

複雑な表情で門へと歩きだすその人。俺は、首をかしげてそれに伴った痛みに眉を顰めた。

そもそもなぜ、この人は俺を助けてくれようとしているのだろうか。もしかして、助けようとしているのではなく、もっとほかの事なのでは、と勘ぐっていた俺は、不意に門の方へと目をやった。

大きな門だ。黒光りする鉄製の、頑丈そうな。門が据えられているのは、城壁とも呼べそうな紅い壁だった。

目を、めぐらせる。ひどく違和感を感じた。

足りないのだ。決定的な何かが。

俺は、殆ど揺れの無い背中の上で、この人の紅い髪を見つめた。

紅。そして、ぼうしや服の、深い緑色。

「ッ!!」

「きゃっ!?!」

襲ってくる激痛を堪えて、その人の背を蹴って空中に舞う自分の身体を後方にそらして、空中後転をして着地する。

それだけの衝撃で、足から力が抜けそうになるくらいの痛みに襲われた。くふー、と息を漏らすと、口の端から血がたれる。それを拭おうとはせずに、俺は右腕をだらんと垂らしたまま、左腕をゆっくりとあげて構えた。

「何するんですか！」

非難の声をあげながらこちらを振り返る女性の姿は、俺の予想していたものと完全に一致した。

紅美鈴。紅魔館の門番で……『三面ボス』。そして、俺の好きなキャラクター！。

美鈴は、構える俺を見て、あれ？と小首をかしげた。それから、「何のつもり……って、ああ、そうか。ここに入るのが嫌なのね……？」と言った。

ボシユウ！と靈力を高めて噴出させる。くそ、全然残ってない。美鈴は、目を見張って、その気は……！と呟いた。気にせずに、全力で地を蹴って突進、瞬時に間合いに入り、構えてすらない美鈴に左腕のみのラッシュを浴びせかける。咄嗟に腕を出して俺の腕をさばいていく美鈴は、苦々しげに顔を歪めていた。

あまりの勢いで突き進むために、踏ん張っている美鈴の両足がザリザリと地面を削って、凄い勢いで後退していく。俺はそれにぴったりとくつついて、ただ腕を繰り出すのみ。

倒さなければ。倒さなきゃ、先に進めない。もとどおりにならないんだ。倒さないと。

ぐっ！と踏み込んで、拳を振りかぶった。俺と美鈴の動きが止まったその一瞬、美鈴の腕がぶれて、ほおに鉄砲玉がぶつかってきたかのような衝撃がきた。

顔に引っ張られるように吹き飛んで、凄い速度で景色が流れていったかと思えば、頭から何かに突っ込んだ。

身体が押しつぶされるような感覚も、一瞬。すぐにそれから解放されて、俺は体勢を立て直すこともせず、無理やりに前方へと飛んだ。纏う靈力の光が一段と大きく揺らいで、力のベクトルの向きが

変わる。吹き飛んできたスピードと同じ速度で、俺は前へと進んだ。目の前にはでかい氷山がそびえたっている。

驚いた、湖まで飛ばされたとは。どうやら俺はこれにぶつかって、貫通してしまったらしい。

穴の開いた氷山に、俺は速度を緩めずにぶつかっていく。纏う霊力の光が氷を削っていき、すぐに視界があけた。今度はしっかり構えている美鈴に突っ込んでいき、間合いに入る前に拳を突き出した。と、腕を絡め取られて、地面に叩きつけられた。左手を背中に押し付けられて、うつ伏せになっている俺の背中に膝を押し付けてくる。いくら力を入れようとしても、動けなかった。それに、左腕が痛い。折れてしまいそうだ。

「一体、何者ですか。この気…私が感じていたでかい気とそっくりなのですが」

獣のように息を荒げて暴れようとする俺に、美鈴が淡々とした声で語りかけてくる。

「普通の、巫女よ」

どうもこうも、それだけしか言うことが無いので、そう言った。

すると美鈴から、巫女…？と訝しがるような声が聞こえてきた。まあ、そうだろう。見た目で巫女とは判断できないだろうな、今の俺の格好じゃあ。袖はもはや一片も残ってないし、上服は最早無い。防具代わりの下着と血に濡れてさらに赤くなった、ボロボロの赤いスカートだけでは俺が巫女とは判断できない。

ふっと、俺を押さえ付ける力が弱まった。その隙を見逃さずに、背

中越しに靈力を放出して美鈴を吹き飛ばし、素早く立ち上がる。それから、振り返っていつでも攻撃を受けていいように構えた。

「……あれ？」

しかし、その行動に意味はなかったようだ。美鈴は倒れている。まさか、あれだけで倒されるわけが…、と警戒しながら近づいて、恐る恐る覗き込んでみれば、美鈴は眠るように気絶していた。

目を回すでもなく、ただ目をつぶっているだけで、俺が背を向けられ、ばすぐにでも起き上がってきそうなくらいわざとらしく感じられる姿だったが、小突いてみても、起き上がる気配はなかった。

なので俺は、紅魔館へと歩を進めることにした。

紅魔館、そのどこまでも紅い廊下で、壁に身体を擦りつけながら俺は歩いてた。腹の傷を抉るように突き立っている銀製のナイフを抜き取って投げ捨て、一路、大図書館へと向かおうとしていた。前の方に投げ捨てたナイフが俺の足に当たって、カランカランとなんともいえない音を立てながら床の上を滑っていった。

あのナイフは、先程戦った十六夜咲夜というメイド長が俺に投げつけてくださったものだ。

こんな姿の俺に一欠けらの容赦もなく、スペルカード戦に見せかけた殺戮ショーをおっぱじめたメイドさんに、危うく俺は殺されかけたわけだが、

「そんな程度の実力でここに乗り込んでくるなんて……とんだお馬鹿さんね」

「そのお馬鹿さんを通したのは……ハア、ふっ、ここの、もんば、んよ……？」

「あらそうね。あとできつく言っておかなきゃ。で、そんな貴女は何者で、どういう目的でここに入ったのか、冥土に行く前に教えてちょうだいな」

「ふん、わ、たしは……普通の巫女よ……」

「……巫女？」

「そうよ！文句があるなら、ツシャアアアア！」

訝しむような言葉を放ったかと思えば、突貫してくるメイドにカウンター気味の光弾を放つと、あっさりと当たって、気絶してしまっ

た。別に命を奪う必要はないし、またもや血を流し過ぎたせいで意識が朦朧としてきて、身体が重く感じる様になっていた俺は、さっさと先に進んだというわけだ。

ズリズリと壁に身体を押し付けて、血の跡を残しながら進んでいくと、目の前に大きな扉が現れた。目が霞んでいたせいで、こんなに近づくまで気が付かなかった。しかも、俺はそれをぼーっと見上げて、何分経ったかわからなくなってくる頃に扉だと認識したのだ。本格的に、頭がどうにかしてきてしまっている。何か言葉を発しようにも、荒い息になってしか口から出てこない。

そんな様だからか、そこが図書館かどうかだなんてことは考えもせず、そもそも図書館とその主の事を考えるだけで、どこへ向かっているのかも忘れて、俺はその扉を押し開けた。

紅い。紅、紅、紅、紅、紅い。どこまでいっても、紅かった。

王の広間とでも呼ぶのに相応しいその部屋の最奥、壇上のように高くなった場所に、馬鹿みたいに大きな紅い椅子に座る少女が一人。全体的にピンクな服を着ていて、ナイトキャップをかぶっている。青色がかった癖のある髪がほおにかかっていた。背には、大きな蝙蝠のような羽。異形の証。その紅の瞳で俺を見つめる顔には、幼い姿には似合わない妖艶な笑みが浮かんでいた。

「咲夜はやられたのね。こんなボロボロの奴に。…なんて、ね。良くやってくれたわ、咲夜は。恐らく、美鈴も」

演劇の舞台の上に立っているような口調に、どこかの胡散臭いムラサキな人の姿を幻視した。

そいつは、俺のすこし前にふわりと飛び降りてきた。クスクスと上

品に笑って、

「あなた、殺人犯ね？」

と楽しそうに言った。

そこからは、お決まりの台詞。俺はただ、思い出せる限りの言葉を返すだけ。

「一人まで、なら……大量殺人にやあ、ならないわ…ゲホッ、」
「で？」

「そうそう…迷惑なの、あんたが」

「短絡ね。しかも理由が分からない」

「とにかく…はあ、ここから出ていってくれる…？」

「ここは、私の城よ？出ていくのはあなただわ」

「この世から出てってほしいのよ」

そんな会話を、交わしていく。こいつは、心底楽しそうに話す奴だ。今も微笑みをたたえて、また口を開く。

メイドがどうの、首一つ落ちてないだの。それから、最後に。

「こんなにも月が紅いから、本気で殺すわよ」

「こんなに月も紅いの…」

その言葉にだけは返さないと、と、黙っていた俺は言葉を放つ。

そいつは笑って、

「楽しい夜になりそうね」

「……永い夜に、なりそうね」

妖気が、膨れ上がる。

ああ、ああ。

戦うぞ、さあ、戦うぞ。逃げたりは、しない。逃げる力も残ってない。

だって、これさえ終わらせれば、みんな笑えるようになるんだ。だから、だから……。

「はあっ！！！」

ありったけの力を解放して、悠然と立つ。そう見えるように。姿だけは、格好がつくように。

そうして、最後の戦いが始まった。

紅EX（後書き）

誰だ最終回って言ったやつ。きゅっとしてどかーんされる。

ピチューン。

紅霧異変の終わり（前書き）

なんだこれ。本当になんだこれ。

やばい、すごく滅茶苦茶になった。

ああ、次話からはもっとちゃんとしたお話を書かないと。

紅霧異変の終わり

紅が広がる大きな部屋。

その奥、壇上に大きな紅い椅子がひとつ。そして、その壇のもとに二人の少女が立っていた。

片方は、この館の主。異変を起こした張本人にして、齢五百年の吸血鬼。その力は、強大。

かたや、ボロボロな姿の巫女。この異変を解決するために紅い館へと乗り込んだ者。その力は、万全の状態ならば、吸血鬼を凌駕するほどのものだが、今や比べるまでもない力しかない。

吸血鬼の名を、レミリアという。右の手の平を巫女へと向けて、いくつか妖力弾を放っていた。

顔に浮かぶのは、一見して楽しそうな表情。しかし、瞳には運命を差し測ろうという色があった。

巫女の名を、霊夢という。レミリアの放つ妖力弾に翻弄されて一歩、また一歩と後退していく。

青白い肌のそこかしこから血が流れ、もはや防御する意思もないのか、両手をだらんと下げて、ぶつかってくる紅い光にされるがままになっている。口を小さく開いたままで、その瞳には色が無い。

意識があるのかどうか。時々、妖力弾が目立った傷に当たると、呻き声を漏らす。

レミリアと霊夢の距離がかなり離れたところに、ようやくレミリアは攻撃の手を休めた。とはいっても、レミリアにとってはその程度の距離など、息もつかせぬ間に詰めることが出来るだろう。

「さて……そろそろか」

不意に、レミリアが言った。霊夢に語りかけるような声音の、独り言。

レミリアが背にある自身の身長の数倍もあるほどの羽を広げると、彼女の背後に彼女より二回りほど大きい魔法陣が現れ、彼女の力が流れていった。

レミリアを包むように半透明の紅い光があふれて、光の粉を散らしていく。

恐ろしいほどの力がレミリアの突き出す手の先に集まっていき、光りを放ち始めた。

そうまでなっても、霊夢は動かない。ただ、力なく立ち、黒く塗りつぶされている目をレミリアに向けているだけだった。

「私に見えていたのはここまで……。さあ、ここからどうなるのかしら……。おい、どうした！抵抗すらせずに終わるか！ー」

最初は呟くように、後半は挑発するように大きな声で、レミリアが言った。

霊夢はぴくりとも反応せず、残っている力で反撃をしようとするそぶりさえ見せない。

……と、その肩が僅かに震えた。レミリアに向かっていていた視線が、大きな窓の方へと向かう。

レミリアはつられて、窓に目を向けた。そこにはかわらず、紅い月が見えて……いなかった。

外は紅い霧ではなく、黒く厚い雲に覆われていた。銀色の粒が雲か

ら落ちて、地面に落ちていく。

雨、という単語が頭の中に浮かんだ瞬間、レミリアの身体を極度の緊張に似た何かが支配した。

同時に、轟音。レミリアの半歩左から瓦礫が飛び、何者かが飛び出したのだ。

レミリアには、それが誰なのかはすぐに分かった。

「はあい、ご機嫌麗しゅう、お姉様。なにやらお楽しみのようね」

レミリアと瓜二つの少女が、そこに浮いていた。

レミリアと違うのは、その服装と、金糸と見まごう髪の色。そして、背にある歪な羽。

レミリアの妹、フランドールだった。

レミリアが驚愕に声を出せないでいると、フランはレミリアに向けていた顔を身体ごと霊夢へと向けた。

「あら、そこなおいしそうなのは、もしかして今日のおやつ？じゃなくて人間？うわあ、初めて見たわー」

両手を口元に当てて、うわー、うわー、おいしそう、と零す妹に、レミリアは動揺を禁じ得なかった。

今日は一段と狂気の色が濃い、そう感じたからだ。

溜めている力をそのままに、レミリアはフランへと問いかける。

「何故ここで貴女が出てくるのよ」

んー？と、フランは振り返って、なんとなく。あー、お腹が空いたわ、と言った。

ほおに汗を垂らしながら、もうすぐご飯が運ばれる時間なのだから、それまで我慢しておかなきゃダメでしょう？と言っ。フランは、目を細めて口を歪め、妖気を漲れあがせた。

「じつはビックな演出の為なのよ、お姉様。成功報酬は、おやつ495年分」

「嘘はつかない！」

言っ、レミリアはしまった！と思った。この娘を刺激しちゃいけないなんてことはわかってるのに、私はどうして！！

幸い、フランは姉の叱責を大して気にも留めずに、だって、お姉様と続けた。レミリアはひとまずの安堵に胸を撫で下ろす気持だった。

「地下で一人はつまらない。お外は豪雨で出歩けない。そこになにやら楽しそうな音が聞こえてくれば、誰だって飛んでくるものでしょう？文字通り」

音？とレミリアは首をかしげる。地下まで届くような音は、今の今まで出した覚えはない。

音っ？とレミリアが聞くと、フランは姉の隣に並んで、同じポーズをとりながら、

「どんだん、どんだん、どんだん。たけやさおだけえのきだけ。今が旬だよ買わなきゃ損損、ってね」

フランの右手の先に集まった力が、バチバチと音を立てる。で？と、フランはレミリアに目を向けた。

「お姉様。あれは消し飛ばす物なのかしら。そうなのだったら、はやくやっちゃって、私とあそびましょう？正直退屈だったのよ」

ニヤリと、フランは狂気たつぷりに笑う。レミリアは自身の身体が震えるのを感じた。
所謂生命の危機に、冷や汗が後を絶たない。

「あああ、あれはね？ふ、フラン。じじ、実は大事なお客様で……」
「あら、お姉様。嘘はついちゃいけないって教えてくれたのは、お姉様じゃあなかったのかしら？」
「え、いや、その」

レミリアは、先程の言葉を発したことを後悔した。それはもう、喉を掻き切らんばかりに。
終わった。私の人生、いや、吸血鬼生、今日で終わったわ。こんな運命だったなんて……。
それもこれも、あの巫女が入ってきたからね！くそう、消し飛ばしてやる……ことはできないから、お仕置きしてやるっ……！！

何を隠そう、霊夢を自分の元まで来るように仕向けたのは、他でもないレミリアなのだが、この通り責任転嫁して、鬱憤晴らしとして力を解き放とうとして、ふと気が付いた。

フランが、自分と同じように巫女に向けて腕を突き出していることに。しかもおまけに、遠慮容赦のない力をその手に集めていることに。

あまりにも隣に立たれたのが自然だったために、気が付かなかったのだ。

「……………」

「さあお姉様、ご一緒に」

レミリアは、つつつと視線を動かない巫女に向けて、

（巫女がんばれ！超がんばれ！！貴女の手には、私の未来がかかっている！！）

とエールを送り始めた。

神頼みならぬ巫女頼みである。

しかし、彼女としてはもう、そうするしかなかったのだ…。。

紅い光が、彼女の瞳を照らしていた。

二人の吸血鬼を前に、ふと彼女は思う。

ああ、やっぱり終わりなんだ、と。

彼女の…霊夢の脳裏に、様々な思いがめぐっていた。死ぬことに対する気持ち。自分は、そうなって当然なのだと思う気持ち。それでも、心を入れ替えるから、まだ生きていたいと思う気持ち。

ぐちゃぐちゃと混ざり合う意識の中で、身体は動かない。ただ、瓜二つの吸血鬼を見つめて、まあ、かわいい娘に殺されるなら、別にいいかな。それに、痛くなければいいや、と思っていた。

もう、意識は途切れかけて。何故立っていられるのかも、不思議だった。

(……ああ、そういえば、霊夢との約束、果たせなかったな)

最後にそんなことを思って、意識を手放した。

『おいこら、諦めるなんてないでしょーが!!』

不意に、そんな声が響く。彼女と同じ声。霊夢の声。

しかし、すでに意識を手放している彼女には、その声はすでに届いていなかった。

それでもなお、その声は、彼女の中だけで響き続ける。

『何の為にあんたに私を預けたってーのよ!! 巫女の務めを果たせーっ!!』

『いや、焦り過ぎだから、霊夢。これ絶対ボクたちの声届いてないって、ていうか錯乱しすぎだって』

霊夢に続いて、別の誰かの声加わった。

幼い少女の声だった。

『こーゆーのはさ、もう無理矢理やっちゃえばいいと思うんだけど』
『だったらさっさとそうする!!』

そんな、憤っているような声が響いたかと思うと、ボシユウ!と彼女の身体から光が噴出する。

透き通った白色の、一片の濁りもない、大きな光だった。

「お姉様」

「ええ、わかつてるわフラン。死にぞこないだと思っていたのだけれど、そうではなかったのね」

姉妹が、短く会話を交わす。

それから、更に力を脹れあがらせた。

姉妹の見つめる先に立つのは、巫女がただ一人。しかし、何故だか、その巫女は何かを支えられているように見えた。

姉妹には、見えなかった。彼女を支える、二人の少女の姿を。

彼女と何から何まで同じ姿の少女に、青い髪の巫女姿のちんまりとした少女。

その二人が、両脇から彼女を支え、力を供給していた。

薄い、霊のような霊夢が彼女の背にぴったりとくっついて、左腕を手取る。

右側に回った青髪の少女は、両手を合わせて腰だめに持つていき、んゝ、と唸りだす。

『あんたにやあ、生きててもらわなきゃ困る！』

『見せつけてやってよ、ボクたち三人の力を、さ！！』

好き勝手に喚いた少女たちは、対する吸血鬼たちの力を超えようと、光を揺らめかせる。

霊夢は、彼女の左腕を引き、その手の先に力を集中させる。

力の余波による暴風が部屋の中を吹き荒れていた。

刹那に、姉妹が同時に紅い極光を放った。二つは合わさり、さらに密度を増していく。

その光が、彼女に当たるかどうかという時、彼女の腕は突き出された。

紅い光を押し返すように、白い光が放出されていく。

異なる色の光はせめぎあい、バチバチとプラズマを発生させていた。ズリズリと、彼女の足が擦れて、後退していく。

無理があつたのだ。彼女の余力では、到底吸血鬼姉妹の力と張り合うことなんてできない。

『ちょー！おされるおされる！！』

『気合で乗り切れ！！っ！か起きなさい馬鹿！！』

その声に、彼女の目がゆっくりと開かれた。

途端に、彼女の目前で押し留められていた光が、徐々に吸血鬼姉妹の放っている光線を押し戻していく。

それはすぐに、吸血鬼姉妹の目と鼻の先まで進んでいった。

「うぎ、iiiiiiiiiiiッ！！！」

フランが、声をあげる。レミリアとは違って、ほぼ全力近くで力を放っているために、フランへの負担はその分多いからだ。

フランの隣に立つレミリアが、噛み締めた歯の隙間から苦々しげに息を吐いた。

レミリアはフランに視線だけを向け、一瞬瞼を伏せて、次には、何かを決意したかのように表情を陰しくした。

「ッ！？」

フランは、何が起こったのか分からない、という顔をしていた。そんな顔で、光線がせめぎあう場所から離れた場所に背を打ち付けて、すぐに身を起こす。呆然としていた。

レミリアは、片足を勢いよく振り上げたためにバランスを失って、押し戻されて来た光線を一身に受けてしまうその前に、なんとか両手を押し付けて、片足だけで踏ん張る。ズン、と重々しくもう片方の足もおろして、目を見開いて、光線を押し返そうとする。

押し付けている手の先が焼けただれて、皮膚が剥がれていく。それでも、齒をむき出して、レミリアは両手を押し付けていた。

『 い ま だ ！ ！ 』

そのチャンスを見逃さずに、二人の少女の声が重なる。

彼女は自分の意志で、思い切り腕を伸ばした。ひととき強い光が彼女の手から放たれて、レミリアを飲み込んでいく。

彼女の咆哮が、大きく響いていた。

光が収まる。

どきりと、彼女が倒れた。限界を超えたために、気絶してしまったのだ。

「おねーさま!!!」

少女の悲鳴が響く。フランが、自分の姉が光を押し留めていた場所に駆け寄って、膝をついた。そこには、レミリアの服の切れ端さえも残ってなく、まるでレミリアなんて吸血鬼は最初からいなかったかのような光景だった。

「お、おねえさまぁ……」

ぱたりと、雫が落ちた。

赤い絨毯の敷かれた床に、染みが出来ていく。

えう、と、嗚咽が漏れる音が、静かになった部屋に響いた。

床に両手をつき、ほおに涙を伝わせるフランの後ろに、一匹の蝙蝠が降り立った。かと思えば、その数は増して、うぞうぞと増殖していく。

瞬きをする間に、その蝙蝠たちはレミリアに姿を変えていた。

「危なかったー。保険をかけておいて正解だったわ……」

ふいー、と額を拭ったレミリアは、ふとフランが泣いているのがついて、え、と固まった。

フランは、後ろに姉が立っていることに気づかず、のそりと立ち上がって、倒れている彼女を見据えた。

肘を腰につけて、右腕を曲げる。手の平の先は開かれていて、まるでそこに何かが現れるのを待っているかのようだった。

「ちょ、フラン！それまずいんだけど！条約的にまずいんだけど！」

あわあわとして止めにかかるレミリアを突き飛ばして、フランは彼女を睨み付けていた。

と、扉が蹴破られた。

現れたのは、ボロボロの黒服を着た金髪の少女。片手にミニ八卦炉をもつて、素早く部屋の中を見回して、倒れている彼女を見つける

と駆け寄っていった。

彼女が死んでいないことを確認したその少女、魔理沙は、彼女をおむけに寝かせてから、フランの前へと歩み出て行った。

「成る程、お前がこの異変の首謀者って訳か」

「いや、フランじゃなくてわた」

「だったら、どうする？」

「ぶったおす！！」

会話に割って入ろうとしたレミリアはまたも突き飛ばされて、若干涙目になっていた。

二人はふわりと浮きあがっていつて、空中で対峙する。

それから、前振りもなしに弾幕を放ちあい始めた。

「遊び相手には丁度いいわ！！鬱憤晴らしにもね！！」

「わたしはただじゃあ遊んでやらないぜ！いくらか出してもらわないとなあ！！」

「コインいっこ！！」

「いっこじゃあ人命も買えないぜ！！」

「ああんたがッ！！コンティニューできないのさ！！！」

怒鳴り合いながら弾幕を放つ二人の戦いは、熾烈を極めていた。

フランが放った大弾が壁を破壊し、魔理沙が放つ極光が床を抉り窓を吹き飛ばしていく。

手持無沙汰になったレミリアは、ふい、と彼女の方へと目を向けててこてこと歩み寄り、横、いいかしら？と聞く。

返事は返ってこない、と思いきや、小さく掠れた声で、どうぞ、と返ってきた。

レミリアは、彼女の隣にちょこんと座って、自分の膝を抱えて、上を見上げていた。

色とりどりの弾幕が花火のように弾けては放たれる。

轟音が鳴り響き、館全体が震えて、擦れ合って削れた石埃がばらばらと落ちてきていた。

その弾幕ごっこは四時間に渡り。

あまりの音に気絶した振りをしていた美鈴と咲夜、そして、フラン

を連れ戻そうとパチュリーが駆け付けた。

部屋に入った三人は順当に、レミリアによって、彼女の横に膝を抱えて座らされ、弾幕決闘の行方を見守ることになった。

勝負の結果は、魔理沙の勝ち。

回転して全てを薙ぎ払う黄色の極光に、四人に分身していたフランの内三人が消滅し、残っていた一人が宣言した十枚目、フランの持っているカードの最後の一枚を宣言し、放たれた弾幕を、魔理沙はことごとく避けて、そして勝利したのだった。

そうして、紅霧異変は幕を閉じた。

余談だが、何故だかフランが魔理沙に懐いてしまった、という話がある。

彼女、霊夢は、その傷の酷さから、しばらく紅魔館で療養生活を送ったそうだ。

霊夢曰く、「もうこの家からはなれたくねえ」らしい。

ともかくは、彼女にとっての平穏が訪れ、なにもかもに満足しているようだった。

紅い霧の無くなった空を見上げる、ボロボロの氷精が一人。
そいつは、決然とした目で空に瞬く星たちを睨み付けて、次は殺す、
そう呟いた。

紅霧異変の終わり（後書き）

最終回ではないです、はい。
次は妖々夢

憂鬱々な閑話1（前書き）

四時間で書いた。後悔はしてない。

更新再開！

そしてグダグダ、再開。次話から妖々夢！

憂鬱々な閑話1

季節は移り変わり年を超えて、冬。

博麗神社には、闇夜の空から降ってくる真っ白な雪を眺める霊夢の姿があった。

両の手を口の前に持つて行つて、白い息を吐いてあたためている。吹く風の寒さに身を縮め、それから溜め息をついた。

霊夢は、紅魔館から神社に帰ってきてからというものの、ずっと考えていた。

何が正しいのか。何をすればいいのか。

自分を否定したくない、でももう痛い思いはしたくない。

だけど、何かに縛られて生きるのは嫌だ。

はらはらと降る雪を手で受けながら、どうすればいいのか、ずっと考えていた。

ぎゅうと手を握り締め、胸元にもっていく。強く握った手は、真っ白になっていた。

ゆっくりと手を開く。

そこにはもう、氷の結晶の姿はなかった。

ぶるりと身を震わせる。

氷。

そつだ、氷だ。

霊夢の額に脂汗が浮かび、流れた。

脳裏に浮かぶのは、あの氷精の背。

怖い。

そいつの姿を思い浮かべると、震えが止まらなくなった。紅魔館の魔女に治してもらったはずの腹がジンジンとした痛みを訴えてくる。

目を大きく開いて、歯を食いしばる。

ふとして、顔をあげれば闇と目があった。

闇の向こうからあいつが出てくるんじゃないかと思えてならなかった。

そこまで思っ、とうとう耐えられなくなった霊夢は、這って屋内へと逃げ込んだ。

明かりのない自室。

畳の上で身を丸めて、膝を抱いて震える。

怖い、怖い。

我慢できないくらいに。耐えられないほどに。

助けて、と声が漏れた。

その自分の声にはっとして、思い出す。

魔理沙の顔を。

魔理沙の、あの屈託のないあたたかな笑顔を。

すると、どうだろうか。

今の今まで自分を圧迫していた恐怖が、たちどころに消えてしまった。

霊夢は目尻から涙が流れるのを手で拭って、上体を起こした。

魔理沙は、まだ紅魔館にいるのだろうか。

多分、そうなんだろう。

あそこで、笑っているのだろうか。

魔理沙の姿を思い描くだけで、不安が吹き飛んでいく。

ああ、そうだ。別に、いいじゃないか、好きにしたらって。

…いや、違う。好きにするにしたって、常識の範囲で、だ。

紅魔館。約半年もの間過ごしたあの場所は、あたたかかった。みんな優しくしてくれた。霊夢は最初のうちこそ、ふてくされて険悪な雰囲気振りまいていたが、

紅魔館の住人と、そして魔理沙と顔を突き合わせ続け、そして知った。

生きてるんだって。

「ゲームじゃ、ないんだよな……」

呟いて、息を漏らす。

薄々気付いていたことだ。

それなのに、目をそらしていたこと……。

どうして、事実から目をそらしたりしたんだろう。

その答えは、すぐに霊夢の胸に浮かんできた。

「好き勝手、したかったから……か」

かつていた世界で、霊夢じゃなかった頃にいた世界で見た二次創作群。

あれみたいに、好き勝手したかった。

何をしても、みんな許してくれるはずだから、大丈夫だと。

ここはゲームの世界なんだから、何もかもがうまくいくと。思い通りに、なると。

霊夢は、立ち上がった。

それから、吐き捨てるように、「なんて、馬鹿だったんだ」と言った。

いつのことか忘れたが、思った言葉を思い出す。

『最初から優しく接していれば……』

今からでも、遅くはないんじゃないか。

そう、霊夢は思った。

それからひとつうなずいて、霊夢は縁側にでてみた。

降る雪を眺めながら、白い息を吐く。

庭に積もっていくそれらは、暖冬の進む現代日本に生きていた自分から見れば、

凄く珍しく、かつ綺麗に見えた。

なんだ、気の持ちようで、ここまで変わるんじゃないか。
自然と笑まで浮かんでいた。

悩むことは、ない。悩まなくていい。

これからは、いいことをすればいいんだ。

俺が思う、いいことを。

最善を、尽くす。

ぐう、と霊夢のお腹がなった。

霊夢は少し顔を赤らめて、そういえば何も食べてなかった、と呟いた。

ご飯を食べようと屋内に戻ろうとして、ふと闇に目をとめる。

しばらくのあいだ、睨むように闇を見ていた霊夢は急にふっと笑って、

「もう、何も怖くない」

と。

まるで、闇に啖呵でも切るかのように、そう言い放った。

そうしてから、屋内へと姿を消す。

闇は、ただそこにあるのみだった。

翌日のこと。

障子戸から差し込む朝の日差しに当てられて、俺は目を覚ました。曲げた足の、太ももにはさんでいた両手を引き抜いて足を伸ばし、仰向けになって伸びをする。

あくびをしながら上半身を起こして、胸元からずり落ちていった掛け布団をどかし、立ち上がった。

眩しい。

ぐぐー、と伸びをすると、またあくびが出た。

口元を手で隠しつつ、手早く身だしなみを整える。

新しい服に身を包み、スカートの具合を直したあとに鏡台に置かれたリボンに目を向けた。

ボロボロのリボン。

どうしてボロボロなんだっけか。

激しい弾幕に身を晒したから、だっけ。

たしか、湖で……。

ぷつんと思考が途切れた。

「……？」

……なんだったっけ？

おかしいな。おもいだせない。

そういえばレミアが、俺と戦った時のことを話してくれたけど、覚えがなかったな。

……記憶が曖昧なのは、なんでなのだろうか。

腕を組んで、真剣に思い悩もうとすると、かすかにだが、何だか良い匂いがした。

空腹感を覚えた俺は、すぐに考えることをやめて、匂いの方へと足を向けた。

居間につくと、台所に人の気配があった。
感じる力にも覚えが、あった。

「……ま、りさ？」

おそろおそろ顔を覗かせてみれば、そこに居たのはまさしく…。

「よう霊夢。起きたか」

霧雨魔理沙だった。

待ってる、もうすこしで飯ができるぜ。

そう言ってるそばきと動く魔理沙の姿を見るのは、とても久しぶりのことだった。

懐かしい気持ちで突っ立っていると、手早く調理をすませた魔理沙ができたものをお皿に盛って、

運ぶのを手伝ってくれ、と言った。

もちろん、私は手伝った。

かちやかちかと、箸と器のぶつかる音を聴きながら、白い米を口に運ぶ。

甘い。

その甘さを、噛み締める。

「痩せたな、霊夢」

急に魔理沙がそんなことを言ったので、俺は首を振った。

魔理沙は呆れたように溜め息をついて、嘘はつくもんじゃないぜ、といった。

お前が言うか。

「まったく、紅魔館を出てからまともなもの食ってないだろ。駄目だぜそんなんじゃない」

もしかして、俺は今怒られてるのか。

器に落としていた視線を少しだけあげると、魔理沙がまっすぐに俺を見ているのに気がついて、すぐに戻した。

「パチュリーに言われただろ？しばらくは力のつくものを多く食べるって」

諭すようにゆっくりしゃべる魔理沙に、俺はすこしうなずいて見せることしかできなかった。

息を吐くのが聞こえて、びくりとする。心臓がきゅっと縮んだ気がした。

魔理沙の立ち上がる気配。

行くのか、と思った。

あまりにも俺が不甲斐ないから。
だから、見放すんだ。

そう思うと、涙が零れそうくらいに溢れてきて、口元を歪ませた。

箸を握る手に力を込めて、じつとつつむく。
行かないで。

漏れそうになる嗚咽を必死になっておさえていると、肩に手を置かれた。

何も反応できなかった。反応できないまま、魔理沙が俺の隣に座るのを感じた。

小さな卓袱台だから、二人入るのはきついのに、無理矢理魔理沙が入ってきた。

意味が分からなくて、顔をあげる。

魔理沙は笑っていた。笑って、「隣で食べてやるから、元気出せ」なんて言う。

ぽと、と箸が落ちる。

我慢できなかった。

なぜだか知らないけど、我慢できなかった。

だから、魔理沙の方に顔を押し付けた。

「お、おい、霊夢!？」

魔理沙がびっくりした声をあげるのも構わずに、魔理沙を抱き締め、そのまま押し倒した。

がしゃん、と卓袱台の倒れる音。

抵抗するかもしれないと、頭の片隅で思ったけれど、魔理沙は何もしなかった。

ただ、俺の背に手を回して、ぽんぽんと叩いた。

それだけでもう、俺が涙をとどめることはできなくなった。

「でかけるぞ、霊夢」

ほうきを肩に担いだ魔理沙が、笑顔でそう言った。
どこによ、と返すと、なにやら腰の後ろに手を回して「ぞぞぞやり
だす。

それから、握った手をこちらに差し出して、開いた。

赤い布の切れ端が五つ、六つほどあった。

なにこれ、と聞くと、お前のリボンだよ、と返されて、ああ、と納
得した。

で、それがなんなのよ。

「うん。香霖の所に行つてさ、直してもらふんだよ」

直してもらふ？何で。

ていうか、よく切れ端なんて見つけてこれたもんだ。そこらじゅう
に散らばっていただろうに。

そう思っていると、大切なリボンなんだろう？と聞かれて、思わずう
なずいていた。

じゃ、決まりだな、と言って、魔理沙は笑った。

「リボンを直して欲しい？」

香霖堂店内。

魔理沙が店の奥のカウンターに座る店主、森近霖之助と話している。俺は、ごたごたとした店内を見回していたら本を読んでいる妖怪を発見したので、観察していた。

せっせと本を読むのは、朱鷺色の髪の少女の姿をした妖怪。そろそろと音をたてずに近づいて行って、目の前に立つ。それから、ゆっくりと手を伸ばした。

「!!」

俺に気付いた妖怪が、勢いよく俺の顔を見上げてきた。

肩を叩くために伸ばしていた手を引っ込めて、何の本を読んでいるの？と尋ねる。

しかし、妖怪は俺の問いに答えることなく、脱兎のごとく逃げ出してしまった。

ちよつとショックを受けた。

「このリボンだ。できるか？」

「ちよつと借りるよ。……ふむ、損傷が激しいな」

「無理、か？」

「いや、できると思う。時間をくれ」

「わかった」

俺が肩を落としている間に話は終わったらしく、魔理沙が戻ってきた。

俺の足元に落ちている本を拾い上げて、近くにあった本の山に重ねて置いてから、

俺に顔を向けて、できるって。明日、また来よう。そう言って俺の手を取り、

店の出入口に向かっていった。

風呂場で湯浴みをしながら、髪をいじる。

今までリボンを付けてなかったことに何にも感じていなかったのに、リボンが直ると思うと、頭にリボンの重みがないのに無性に違和感を感じて仕方がなかった。

「背中、流すぞー」

魔理沙の声とともに、背に湯がかけられる。

熱い。でも、気持ちがいい。

今まで溜まってきた疲れが、全部流れていくみたいだった。

「ありがと。次は、私の番ね」

「ん？え？」

お返しとばかりに、俺は魔理沙に襲いかかった。
きやあきやあと、馬鹿みたいに二人で騒ぐ。

魔理沙が笑うのが嬉しくて、俺も笑っていた。

夜はすぐに更けてしまった。

魔理沙が、一緒に寝てくれると言った。

「……どうなっても、知らないわよ」

「んー？何言ってるんだー？」

布団を敷く魔理沙の背に呟くと、そんな声が返ってきた。
俺は笑って、なんでもない、といった。

その日。

その日、俺は魔理沙と初めて寝た。

そして、初めて。

魔理沙と一夜を明かした。

……文字の通り。他に意味なんてなかった。

翌朝、日が昇る頃の俺の目の下には、大きなクマが出来ていたことをここに記しておく。

憂鬱々な閑話1（後書き）

読んでくれてありがとう？

え？読めたもんじゃなかった、ふざけるな？
ははは、こいつめ。ツンデレ乙

恋愛間近な閑話2（前書き）

短い。そりゃあもう短い。
次に続く。

恋愛間近な閑話2

風切り音。

それは、俺が腕を突き出すたび、足を振り回すたびに鳴っていた。見えない敵とでも戦うかのように目の前に突きを繰り出し、空間を刈り取るような蹴りをして、

それから飛び上がった回し蹴り。

俺の足が通った後に、巻き込まれるように激しい風が吹き荒れた。髪が靡き、スカートがはためく。激しく動いたたびに額やほほを伝う汗が飛んで、石畳に落ちていく。

早朝。

神社の境内で、俺は修行をしていた。

まあ、修行なんていっても俺は格闘技やらの類の知識をもっていないから、感覚に任せて跳ねて回ったりしているだけだ。

闇雲に動いて何の意味があるのと馬鹿にすることなかれ。

これが、中々どうして体力づくりにつながるのだ。

ここ数週間、毎朝早起きして修行しているうちに体力がついてきたのがその証拠。

…実のところ、体力づくりにつながると思ってやっていたわけではないのだけど、

それはちょっとした秘密だ。

眼前に思い描く不可視の敵が、喉を穿つ突きを繰り出すのを、上体を反らせてよける。

正面、横薙ぎ、足払い。連続の攻撃を、体を反らし、ジャンプして躲していく。

ソニックスウェイだ。

徐々に後方にさがりながらのスウェイ。流石にその場での激く動くと、体力の消耗が凄い。

「シャツ!!」

しゃがんで右足で足払い。左足に力を込め、やや前方に飛び上がって、倒れ込む見えない敵に拳を繰り出す。

勢いのままに石畳に両手を叩きつけて跳躍し、一回転して着地。足を曲げて衝撃を吸収する。

「……妄想乙」

最後に一言添えて、今日の朝の修行を終了した。

湯浴みをして、修行によって掻いた汗を流した俺は、おニユーの服に身を包み、爽やかな気分で居間に入った。
こじんまりとした卓袱台には、すでに所狭しと料理が並べられている。

魔理沙が作ってくれたものだ。

「朝の修行お疲れ様だ。ほれ、食べ食べ」

台所の方から、エプロンに身を包んだ魔理沙が現れて、そう言った。
…ん？この言い方だと魔理沙が凄い格好をしてるように思えるな。
まあ、いいか。

目にかかる髪の毛を手で耳の方に除けながら座布団に正座して、箸を取る。

「いただきます」

「おう、めしあがれ」

お茶碗を持って、まず白米を口に入れる。食事の時に最初に白米を食べるのは、癖のようなものだ。

それから、魚の干物を食べて、お味噌汁を飲んで…。

そうして、美味しいものを口にすると、猛烈な空腹感に襲われて、俺は何かを追われるようにご飯を口の中へとかきこみだした。

並べられたお皿たち……和食料理の数々を素早くお箸で取って、口に押し込む。

美味しい。

「あー霊夢。いつもながらに凄い食べっぷりだな。ゆっくり食べないと太るぞ？」

対面に座った魔理沙が呆れたように言うのに、口の中のものをごくんと飲み込んで、

「太らないわよ。全部エネルギーになるもの」

と言いつ返した。ちゃんと噛めよ…とさらに呆れた声が聞こえたが、聞こえないふりをする。

ご飯はあつという間になくなった。

縁側に足を投げ出して座りながらお腹をさすって、ふー、と息を吐く。満腹だ。

毎日いっぱい体を動かしているから、凄くお腹が空くんだよな。で、朝食は毎回サイヤ人みたいな食べ方になる。なんかそのほうが強くなれそうだし。

しかし、朝の修行について少し前から思っていることがある。

修行修行と大層なことを言いつつ今までできとくに飛び跳ねてきたわけだが、何も分からずに体を動かすことに、体力づくり以外の利益が見いだせないのだ。

強くなっているという実感もない。そりゃそうだ、型のない戦い方をいくら続けても意味がない。

どうしようかなー、また博麗禁書でも読み漁るかなー。

そんなことを思いながら足をぶらぶらさせていると、お盆にお茶を乗せた魔理沙がやってきて、

俺の隣に座った。

ほい、と湯呑を渡してくる。

それに礼を返して、熱いお茶を啜る。うん、うまい。

熱い息を吐き出すと、白い息がのぼっていった。それにしても、と魔理沙が言う。

んー？と聞き返すと、

「こないだまで痩せてたのが嘘みたいだな」

笑いながら、魔理沙が言った。

俺は、自分のお腹をさすりながら、そう見える？とほほを膨らませてみせる。

一応体型は気にしているのだ。

ああいや、太っては見えないぜ、と取り繕うように魔理沙が言うの

に、そう、とだけ返してお茶を啜る。

空が青い。

しかし、寒いな。冬だから仕方のないことだが。

なんとなしに寒いわね、と呟くと、そうか、寒いかな。そう言っ、魔理沙が身を寄せてきた。

驚いて魔理沙を見ると、魔理沙はにかりと笑って、こうすれば、ちよつとはマシだろ、と言った。

瞬きをして、それから前を見る。

たしかに、すこし暖かくなつた気がする。

何だか体がむずむずして、動き回りたくなつた。が、魔理沙と肩を寄せ合っていたい。

仕方がないので、魔理沙の肩に頭をのせてみた。

ん、と魔理沙の声に、同じくん、と返す。

直角に頭をのせるイメージだったが、首が曲がらなくて断念した。とりあえず頭をもたれかけさせる。

重心をずらすために何度か手の位置を直していると、指が魔理沙の手に触れた。

一瞬目を落として、魔理沙の手を見る。力が入ってなさそうなのを見るに、床に手についているわけではないらしい。

少し考えてから、重心を体の中心にずらすために体を動かして、魔理沙の手に俺の手を置いた。

冷たい。

霊夢の手、あつたかいなー、と魔理沙が言った。

俺は笑って、

「こうすれば、ちよつとはマシになるでしょ」

魔理沙も笑った。

二人で笑い合う。

そうすると、冬の寒さも忘れられる気がした。

…… おっと危ない、左の手に持った湯呑も忘れちゃいけないな。ことりと横に置いて、目をつぶる。

そうすると魔理沙の体温がより感じられた。

あー、冬つてのも…… 悪くないな。

少し微睡みながら、そんなことを思う。

穏やかな朝。

…… ん？大きな力…… ふたつ？何かが神社に向かってきている？

…… ああ、この力は。

「どうした？霊夢」

「ん。お客が来たみたい」

身を起こすと、魔理沙が疑問の声をあげたので、そう答えた。それから、遠くの空を見る。

二つの影が、近付いて来ていた。

恋愛間近な閑話2（後書き）

次話あたりから霊夢を大幅強化する。
じゃないとチルノに手も足も出ない。

作者が考える霊夢とチルノの戦闘力の差

チルノ

覚醒前通常204↓調子のいい時295

覚醒後通常200万↓超化50倍1億

霊夢

通常4万8千↓50%120万↓100%フルパワー240万

すでにインフレを起こしているという罫。

でも数字は気にしなくてもいいと思うのです。

次話に続く

対談秘話な閑話3（前書き）

ああ、やっぱり更新停止したか…と思わせておいて更新。
妖々夢に中々入れない…
次の次くらいからかな…？

対談秘話な閑話3

「はい、到着ー」

そう言っただけなのに前に降り立ったのは、レミリアと、レミリアに日傘を差してやっている咲夜だった。

歩幅をあわせてこちらに近づいてくると、どう？元氣だった？と聞いてきた。

「ええ、お陰様で」

手を挙げてみせると、レミリアは満足げにうなずいた。それから、魔理沙に目を向けて口を開く。

「さて、今日ここに来たのは他でもない。魔理沙に用事があったのよ」

「私？」

魔理沙が答えるのに、大仰に手を広げて、そうだよ、と言うレミリア。

その後に、まあ、ほんとはそれだけじゃないんだけど。と付け加えた。

「私に、何の用だった？」

魔理沙の問いに、レミリアはこう答えた。

パチュリーが、魔理沙が俺の傷を治すために使った薬をどうやって

作ったのか教えて欲しい。そう言った、と。

だから紅魔館まで来てくれない？

魔理沙は、二つ返事でOKした。恩があるから、とのことらしい。

……あれ？それって俺の治療の件…？

「で、もう一つの用事は、霊夢。あなた、紅魔館に泊まりに来ない？」

首を捻る俺に、レミリアはそう提案してきた。

うーん、魔理沙が行くなら……。

でも、また神社を空けることになるのはなあ。

取られるものは何もないけど、妖怪なんかが入り込んで荒らしたりしたら面倒だし。

でも、紅魔館って居心地いいんだよなー、目には悪いけど。

行くメリットデメリットを考え悩む。

と、ひとつ、思い出した。

美鈴だ。

門番。あの門番は、肉弾戦が大の得意じゃないか。修行をつけて貰おうそうしよう、と一瞬で決める。何、神社には結界を張っておけば大丈夫だろう。

私も、二つ返事で了承した。

「ま、り、しゃーっ!!」

「おわっ!?!」

夜。紅魔館の食堂では、霊夢の歓迎パーティーと銘打たれた酒盛りが行われていた。

その場所に、門番である美鈴と、給仕の咲夜、そして、主役であるはずの霊夢の姿はなかった。

先ほどフランドールが長机からダイブして魔理沙に突っ込み、もみくちゃになって転がっていった。机の上にはいつそおぞましくなるほどの量のワインの空き瓶が散乱しており、辛い酒の臭いが食堂を満たしていた。

魔理沙の顔にはほをすりつけるフランドールのほほは上気しており、魔理沙も同様に、ほほを赤く染めていた。

机の端に位置する椅子に座って、優雅にグラスをかたむけ、血のように紅い液体を喉に流し込むレミリアは、グラスから口を離して、ふう、と一息ついた。

少々汗を掻いているらしく、涼みを求めて少し開かれた胸元と、酔いのためか潤んでいる瞳が色づばさを演出していた。

「さくやー」

彼女が小さな口を開けてその名を呼べば、背後に音も無くメイドの姿が現れる。

「お呼びですか、お嬢様」

ほほにかかるように編まれた銀髪が僅かに揺れる。
時間を操る程度の能力を持つメイド長、十六夜咲夜であった。

レミリアは机の上の空き瓶を指で示して、

「これ、片付けてー」

「かしこまりました」

咲夜は目を伏せたまま一礼して、そのまま姿を消した。

と同時に、机の上にあった空き瓶たちがひとつ残らずなくなる。

レミリアは満足げにうなずいて、かわりのように置かれているワインを一瞥してから、

すでに中身がつぎ足されていたグラスを口に運んだ。

向こうの方では、フランドールに組み敷かれた魔理沙が黄色い声をあげている。

混沌とした空気もなんのその、おかまいなしに、レミリアはワインのビンを引っ掴み、

向かい側に座る親友の空のグラスに注いだ。

水滴の跳ねる音に鮮やかな紫色の長髪が揺れて、分厚い本で隠されていた目が、本の持ち主が顔をあげたために現れた。

大図書館の主、知識の少女。

七曜の魔女、パチュリー・ノーレッジその人だ。

パチュリーは半分閉じられている眠たげな目を、紅い液体が並々と注がれたグラスに向けて、

それからゆっくりとレミリアへと向けた。

レミリアはグラスを軽くかかげて、「今日の良き日に」と言った。

パチュリーはもう一度目線をグラスに向けて、仕方無しに片手に取る。

それから、気怠げに軽くあげた。

チン！とグラス同士がぶつかりあい、音をたてる。

ぐいとい気にワインを呷るレミリアを見届けてから、パチュリーはグラスに口をつけることなく長机に戻し、本を読むのに戻った。

彼女にとっては親友との乾杯よりも、この本を読み進めることのほ

うが重要だったのである。

パチュリーの目は左から右に流れるように動き、十数秒に一回のページでページをめくる。

時折むふう、と熱のこもった息を吐く。その本はそれほどまでに面白いのだろうか。

題名は『マスクドライダー・ファイブレッドファイズリー』。

物語が佳境にさしかかっているらしく、パチュリーは興奮した様子で本の内容に食い入っていた。

「ちょっと、いいかしら」とレミリアに声をかけられて、うんざりしながらもパチュリーは顔をあげた。

これから主人公であるファイズリーが『幸運 四つ葉』をやっつけるというのに、一体何なのだ、と思いつつ、何やらもじもじとする友人の姿を眺めるパチュリー。

その友人は、言葉を選ぶように、あー、うーとうなっていた。

「えーと、その、パチエ。博麗の巫女の様子を見てきてくれないかしら？」

また、遠まわしに、とパチュリーは思う。

素直に霊夢と口に出せばいいのに何を恥ずかしがっているのかしら、と。

レミリアは気付いていないようだが、パチュリーは、レミリアが霊夢に好意……同族意識にも似た好意を寄せているのを知っていた。

何がきっかけで好意を寄せるようになったかは知らないが、とにかくパチュリーは知っているのである。

だから、わざわざ自分に頼まず、会いに行きたければ勝手に行けばいいのだ。

そうは思いはしたが、そこは親友である。ちょっと恥ずかしいものの、体裁がだのと、色々と気苦労を背負い込むレミリアに変わって、自

分が会いに行つてやろうと、パチュリーにしては珍しく動いた。

「いいわよレミィ」と言つて、本を脇に抱えて席を立ち、扉へ徒歩を進めるパチュリーの背に、

「難しそうな本を読んでいるところに、悪いわね」とレミリアの謝罪が入った。

パチュリーは何だか恥ずかしくなつて、足早に部屋を後にした。

紅に染まつた廊下を歩く。そのさなか、思考に耽つていた。

パチュリーは、治療のために何度か巫女の顔を見たことはあつたが、そのどれもが眠っている時だったので、

実質顔を合わせたのは、魔理沙とフランドールが弾幕ごっこを展開していたあの部屋での一回きりだった。

しかも、顔をあわせただけで、声を交わしたことなどない。

レミリアに巫女の治療を押し付けられたときは少々興味もあつたものだが、今はとんと薄れている。

さつきは、レミィのことだ。酔つた勢いそのまま突貫して、その内勢いを失つて最後には会話も続かなくなり、涙目になるのがオチだろうと思ひ引き受けたはいいものの。

うーむ、何を話すか、とパチュリーは頭を悩ませた。会話の糸口が掴めそうにない。

そも、自分はあまり人と話す機会がないのだ、とパチュリーは息を吐いた。

普段はレミリアはおろか、美鈴や咲夜とでさえあまり話さないといふのに。

それでも会話ができるのは、ひとえに彼女たちと長い付き合いだからだ。

今更のように不安を感じたパチュリーは、脇に抱えた本を強く握って、巫女の部屋へと向かった。

紅き一室。その天蓋付きの豪華なベッドに腰かけた巫女…博麗霊夢は、グラスの中身をちよびちよびと飲んで顔をしきめて、飲んで顔をしきめてを繰り返していた。

この館に來ると、思い出す。最初にこの館に來た時のことを…といっても、殆ど覚えていないが、それと、ここで暫く生活することになったいきさつ。

まあ、それはここでは割愛することにするのだが。

考えることは好きだが、考えるような面倒くさいことは嫌いなのだ、などと訳のわからぬことを呟いて、霊夢はグラスを呷った。で、むせる。霊夢は酒を飲めなかった。だって苦い。

と、扉がノックされた。

一瞬扉を睨みつけた霊夢は、頭を振った。

深呼吸をして立ち上がり、ベッドに据え付けられたタンスにグラスを置いてから扉のもとまで歩いていって、開けた。

「こんばんは、博麗の巫女」

そこにいたのは、パチュリー・ノーレッジだった。

自分を治療してくれた人だ。でも、言葉を交わしたことはなかったはずだけど…。

まあいい、と霊夢は割り切った。

例えお互いが初対面であっても、霊夢には事前知識がある。パチュ

リーについての知識は深い。
それを態度に出したりはしないが。

「入って」と短く言つて、自分はベッドに戻り、腰掛けた。
パチュリーは扉を閉め、本を抱えてとことと歩き、霊夢の前に立つてから近くの机に据え付けられていた木製の椅子を引いて、そこに座った。

その際、本は膝の上に乗せられた。

霊夢がむすつとしていると、パチュリーは

「はじめまして、というべきかしら、博麗の巫女」

と淡々と言った。

「霊夢でいいわ」

どうでもよさげに手を振りながら、短く返す霊夢。
パチュリーはぴくりと眉を動かして、

「では……霊夢」

少しためらってから、その名を呼んだ。

霊夢はまただんまりである。

なんとなく、パチュリーは針のむしろに座らされているような気分になった。

霊夢の、部屋の明かりと自分の姿を映す瞳がしかし、色のないものに見えて仕方がなかったのだ。

パチュリーは、どんな人間がそんな目をするのか知っていた。

希望や、夢を失ってしまった者がする目だ。

息を詰まらせて、押し黙る。

パチュリーは、人を惑わす魔女として、そして吸血鬼の友人としての立場上、そんな目を腐るほど見てきたつもりだった。だからもう、その目を見ても特に感情を動かされることは、ないはずだった。

ん、と霊夢が催促するように声を発した。

パチュリーは、慌てて続きを言おうとして……止まった。

何を言えばいいかわからなくなってしまったのだ。

黙っていれば、どんどん空気は悪くなる一方で、居心地も悪くなってくる。

パチュリーは、気まず気に椅子に座り直してから、自身の知識の中からこの状況を打開する方法を必死に考えた。

何か、何か考えるのよ知識の魔女、パチュリー・ノーレッジ！この状況から脱する一筋の光を、最善の言葉を考えるのよ！！

なんて、自分に喝を入れながら。

…。

……。

……………。

「き、傷の具合は、どうかしら」

結局何も思い浮かばなかったので、当たり障りのないことを言った。傷？と霊夢は聞き返して、それから、顔を綻ばせながら「おかげさまで。感謝してるわ」と言った。

ほっと一息つく。緊張の糸が切れたように脱力して、椅子の背もたれに深く腰をかけ直す。

自身も笑を浮かべて、「それは良かったわ」と言った。

緊張が解れたおかげで胸を圧迫していたものがなくなり、リラックスしてものを考えられるようになった。

続けてパチュリーは言う。

「お腹の傷は跡が残りそうだったのだけど、すぐに治療されていたみたいだからなんとかなったの。その点で言えば、私ではなく、魔理沙に感謝するべきね」

大袈裟に、霊夢はうなずいてみせた。

もちろんよ、と。

魔理沙のことを大変に信頼しているのがうかがえた。

同時に、そこに危うい光があるのをパチュリーは読み取った。

一瞬膝の上の本に視線を落として、目をつぶるパチュリー。

目を開けたときには、何を口にするかは決まっていた。

「あなたは、夢を持ってる？」

「...？」

突然の質問に、霊夢は疑問の色を浮かべた。

夢...？とあごに手を当て、少しの間考えてから、首を横に振った。

「無いわ」

そう、と呟いて、パチュリーは本の背に指先を這わせた。

その答えは、予想していたものだった。

パチュリーがじっと霊夢の瞳を見つめると、目を合わせるのが嫌なのか、霊夢はさっと目をそらしてしまった。

まるで、自分に自信が持てない者がするように。

「…なんで、霊夢なのかも、わからないのに……」

なんでこの世界に来たのか、わからないのに。

パチュリーの耳に届いたのは、『何故霊夢になったのか』までだったが、パチュリーにはその言葉の意味がよくわからなかった。

そのままの意味で、なのか、何故巫女になったのかかわらないと言いたいのか。

もし言葉通りの意味として捉えたとしたならば、『なんで自分が霊夢になったかわからない』…？中々どうして、哲学的な。

ふとパチュリーは、ずっと昔に同じ疑問を抱いたことがあったのを思い出した。

たしか、一冊の哲学書に影響されてのことだったと思うが…。

その時に出した答えは、『今考えている自分がいるからこそ、自分なのだ』という、今となって考えてみれば

失笑してしまいそうなものだったが、今ならわかる。

本を読み、魔法の研究をして、目標を持ち、夢を持つ。それが、自分なのだ。

夢を持つからこそ……自分なのだ。

ふ、と霊夢に気づかれないように笑みを浮かべる。また、影響されてしまっている。今度は、この本に。

本の背を撫でて、ゆっくりとまばたきをする。

「夢を、持ちなさい」

霊夢が、パチュリーを見た。

何を言ってるんだとでもいいだけに。

「それが見つかれば、苦勞は…」

そこまで言って、霊夢は口を噤んだ。
パチュリーは続ける。

「夢は、生きる目標になる。夢がなくとも、夢を守ることとはできるけれど、持っていることに越したことはないわ」

暫し。

部屋に沈黙がおりた。

コチ、コチ、と壁に掛けられた柱時計の振り子の音だけが、時間の進みを教えていた。

「…………魔理沙」

何分経った頃だろうか。霊夢は、そう呟いた。

ん、とパチュリーは先を促す。パチュリーは、妙な義務感を胸に感じていた。

見つけさせてやらねば、夢を、と。

なるほど、たしかに、これは好意を抱く。

表面上でしっかりしていて、一本芯が通っているように見えるのに、時折見せる危うさとも何も理解していない子供のような言動。

何だか支えたくなってしまう。後を押してみたくなる。

そんなことを思いながら、霊夢を見守るパチュリー。

「もう、魔理沙に迷惑は…………かけたくない。力に、なりたい。もっと、もっと強くなって…」

独り言のように、小さく。

霊夢の言葉に、そう、とパチュリーはうなずいて、「…手を貸すわ」

とだけ言った。

夢を持てといったのは私だし。そう言った途端に、ぱたりと霊夢が倒れた。酔いがまわったらしい。

パチュリーは息をついて、むきゆりと一声、霊夢をベッドの奥に押しやり、布団をかぶせてやった。

静かに寝息をあげる霊夢の顔を眺めること数秒。

「さて、どんなものを用意しようかしら……」

強くなりたい。霊夢は、そう言った。なら、それを手助けするには何が必要か。

考えるだけでむきゆむきゆとするパチュリーであった。

パチュリーは今後のことを考えながら部屋を後にし、図書館へと向かうのであった……。

食堂では、いつまで待っても帰ってこない親友に、涙目になっているレミリアの姿があった。

対談秘話な閑話3（後書き）

レミリア「ぱぢえ〜！どうして帰ってこなかったのよぉ〜！！」
パチュリー「いや、別に忘れてたわけじゃないのよ、その…ほら、あれよ」

レミリア「ぱぢえのばがぁ〜！！」

完全に忘れていた魔女であった。

超修行な閑話4（前書き）

連続投稿！

次々話から妖々夢！

超修行な閑話4

翌日。

起きてすぐ感じた頭痛に、俺は風呂を借りることにした。

入浴の場面は省略する。ただ、凄く広かったということだけ言っておこう。

部屋でたむろしていると、妖精メイドが入ってきて食堂に案内された。

このちっこい妖精可愛いのうと思ってみると、食堂についた途端に一目散に逃げられてちょっと傷ついた。

そんな、明らかに怯えた目をして逃げなくてもいいじゃないか…。

食堂に入ってみれば、白いテーブルクロスがかかった机の上に、外国っぽい雰囲気朝食が並べられていた。

「食べていいのかな…？」

と呟きつつも、感じ始めていた空腹におされて席につき、フォークを手にとった。

朝食をやつつけるのに十分とかからなかった。

厨房になつてゐる隣の部屋に食器を持っていくと、働いていた妖精メイドたちがぴたりと動きを止めて、一斉にこちらを見た。

…ちよつと漏らしそうになつた。

食器を持ち直して、視線を移動させる。流し台を発見して、そこに向かう。

と、私を避けるようにざあつと妖精メイドたちが道を作つた。

どの妖精メイドも等しく瞳に恐怖の色を浮かべて、俺を見ていた。

横目でそれを知つた俺は、そういえば前来たときもそうだったなあ、なんてのんきに思い出しながら、

流しへと歩を進めた。

さける妖精メイド、進む俺。

辿りついた流し台には、固まる妖精メイドが一匹いた。

そいつは俺が目の前に来たのを知るやいなや、青い顔で俺を見上げて、それから、

救いを求めるように左右にいた妖精メイドに顔を向けた。

そのどちらも、俺が来たときにはすでにできる限り俺から離れようと壁の方に行つてしまつていて、近くにいない。

目の前の妖精メイドが絶望の表情を浮かべるのを複雑な気分で眺めながら、ふと思ひ立つてしゃがむ。

びくん！と妖精メイドの肩が跳ねた。

やめるよ、怯えられるのは……好きじゃない。

内心でそう思いつつも笑顔を浮かべて、これ、お願いできるかしら、とできる限りの優しい声で問いかけると、

妖精メイドは一、二度程息を詰まらせてから、とうとう泣き出してしまつた。

焦る。内心で、焦る。

俺悪いことしたっけ。したような、してないような。

とにかく内心で大焦りして、なんとかおさめようとするも、俺が声をかけると尚更泣く声が大きくなつた。

ぺたんと床に座り込んで、両腕で目をおさえて泣く。

それを見ていると、こちらまで泣きたくなってきた、鼻がつんとした。

周りの妖精たちがざわつく。流しの水道の、流れ落ちる水が食器を打つ音が、やけに大きく聞こえた。

仕方無しに立ち上がって、食器を流し台に置く。

それから、その妖精に「仕事、頑張ってね」と声をかけて、足早に厨房を立ち去った。

ああ、苛つく。

朝から嫌な気分だ。

まさか、泣かれるとは思ってもみなかった。

目頭を押さえつつ紅い廊下を歩いていると、ふと近づいてくる気を感じて立ち止まった。

気。俺が霊力やら魔力やら神力やら妖力やらを総称して呼ぶ『気』ではなく、真正正銘、本物の気だ。

つまり、近づいてくる人物は…。

「あ、おはようございます、霊夢さん」

曲がり角で待っていると紅美鈴が現れた。

美鈴。ああ、美鈴だ。

そういえば、俺は美鈴に戦い方を教えてもらおうと思ってここに来たんだっただ。

美鈴は、俺の顔を見てすぐ、大丈夫ですか？顔色が悪いみたいです

けど…と言った。

首を振って、大丈夫だと答える。

むずむず気分も、ざわつく胸も、美鈴の顔を見たらおさまった。戦いたい。強くならねば。そういった気持ち、かわりに溢れ出してくる。

なぜだかわからないけれど、胸が、熱かった。

「美鈴」

「はい？」

俺の声に、美鈴が聞き返してくる。

二度、口の中で台詞を繰り返してから、言う。

「突然だけど…私に稽古をつけてくれない？」

ぱちぱちと、瞬きをした美鈴は…すぐに笑顔になって、いいですよ、と言った。

えらく早い決断に内心驚きつつも、表面上は取り繕って、そう、ありがと、と返す。

歩き始めた美鈴の後ろについて、俺も歩き始めた。

そういえば、美鈴、門はどうしたのだろうか。

それを聞いてみると、実は、パチュリー様に呼び出されまして、と教えてくれた。

霊夢さんも呼ばれたんでしょう？パチュリー様に。

その後に、そんな言葉が続いて、首をかしげる。

「呼ばれては、ないけど」

へ？と、今度は美鈴が首をかしげた。

「おかしいですねえ。パチュリー様は、妖精メイドにあなたを呼びに行かせたと仰られていたんですけど」

ああ、と納得した。妖精メイド、ね。そりゃあ俺には伝わらんわ。だって逃げたし。

ひたすら首をかしげる美鈴に、俺は訳を説明するでもなく、ただ黙ってうつむいて、その背について行った。

「ウエルカムトゥライブラリー！パチュリー様はこちらでお待ちしておりますー、飛んでお越しくださーい！」

遠くから、少女の声がしたかと思うと、美鈴が飛び上がったので、俺も後に続いた。

図書館。初めて来た場所だが、かなり広い。背の高い本棚が規則的に延々と続く中を、俺たちは飛んでいく。

黙々と飛ぶこと十数分。

とうとう壁に突き当たった。

下を見てみれば、小さなテーブルで紅茶か何かを楽しむレミリアと、本を読むパチュリー、それから、咲夜と小悪魔の姿があった。

降り立っと、小悪魔が俺に向かって頭を下げてきたので、会釈を返す。

「ただいま到着いたしました」

さつさとレミリアのもとに行って頭を下げる美鈴に続き俺もレミリアの前に立った。

レミリアは美鈴に手を挙げて見せ、さがらせてから、俺の顔を見た。

「おはよう、霊夢。調子はどうかしら」

「おはよう。で、パチュリー。何の用なの？」

短く挨拶を返し、パチュリーに問いかける。なんか「ちょうし……」とか聞こえたような気がしたが、今誰か喋ったのだろうか。

美鈴は突っ立って、壁にとって付けられた様な扉を興味深気に見ているし、レミリアは咲夜に抱きついてるし、咲夜は咲夜でレミリアを抱きしめててやけに嬉しそうにしてるし。

空耳か、と切り捨てて、パチュリーに向き直る。

何やら哲学書らしき本から顔をあげたパチュリーは、鼻の頭にかけた小さなメガネを指でつまんで外し、

頭を振って長い髪を揺らした。

それから、駆け寄ってきた小悪魔から栞を受け取って本に挟み、机に置いて俺に顔を向けた。

「簡潔に言っわ。修行がしたいんでしょう？だから美鈴を自由にしたわ。ついでに場所も作った」

「え？」

ん？なんで俺が修行したかったって知ってるんだこいつ。

…エスパー？サイコマンティス？スクリーミングのほう？

いや、まあ、どうでもいいか。正直話が早くて助かる。

俺の隣に来た美鈴が、はあ、だから休暇を言い渡されたわけですか。

と納得するようにうなずいた。

「で？修行場所って？庭とかかしら」

「違うわ。そこよ」

俺の言葉を否定して、壁の扉を指差すパチュリー。

「咲夜が一晩でやってくれたのよ。中はずっと広いわ、地平線が見えるくらいに」

更に、とパチュリーが続ける。

咲夜的能力で、時間の流れがことは異なっているの。中に入って扉を閉めれば、外と完全に隔離される。

この扉の奥での一日は、こちらでの一時間にあたる。

ただ、咲夜能力が続く間しか利用できないから、そうね…七日おきに、一旦出てきなさい。

それってまんま…と俺が著作権ギリギリなことを考えようとすると、レミリアが視界に入ってきた。
何だか得意げな顔をしている。

「ククク……記念に私がこの部屋に名前をつけてやろう。『精神と時の部屋』というのはどうだ？」

アウトー。

まあ、著作権なんてどうでもいい。

しかしレミリアが思いつくような名前っていったら、あれか。精神と時の部屋はかなりあれなネーミングなのか？

そう思っていると、レミリアが、

「最初は『時のディスカレットワールド』って名前にしようかと思ったのだけれど、咲夜が精神と時の部屋って名前にしたいっていうから、そっちにしたのよ。咲夜がそういうことを言うなんて珍しいし」

ナイス咲夜。

咲夜に顔を向けると、会釈をされたので返した。

「食事は、食料はあるから好きに作りなさい。生活用品はあらかじめ運び込んだし…バスもトイレも完備よ。存分に修行してきなさい」

説明を続けるパチュリー。

ふうん。精神と時の部屋、だな、本当に。

美鈴は興味がでてきたのか、隣でしきりに頷いていた。

「向こうでは、様々な修行のニーズに応えるために、気温や湿度を一定にしたり、名前の通り精神を鍛えるために紅一色の世界になっているわ。もっとも、紅い世界にするというのは、レミイの案なのだけれど」

紅、ね。そりゃあ凄く目に悪そうだ。

あごに手を当てて、扉の向こうに思いを馳せていると、パチュリーが思わせぶりに笑った。

「他にもあるんだけど、それは体で体験してもらおうとするわ」

……ええー、なにそれ。めちゃくちゃ不安になるんだけど。

まあ、とにかく、修行ができるんなら万々歳だ。早く体を動かしたいし。

パチュリーが立ち上がり、扉のもとまで行って、開けた。
紅い。

ここから見ても、紅かった。まるで、紅い壁に扉を貼っただけ
のような……まさかそんなじゃないだろうな。

美鈴と顔を合わせて、それから二人で扉の前まで行く。

まず私から行きますね、と美鈴が断りをいれてきて、恐る恐る中へ
と入っていった。

…ああ、目が痛い！

「じゃあ、行つてらっしゃい」

パチュリーの声に少しうなずいて、それから、俺も恐る恐る入ろう
とする。
と。

「おい！」

魔理沙の気が凄い速さで近づいてきた。

振り返れば、丁度降り立つところ。

魔理沙は走り寄ってきて、俺の前で止まってから、俺の肩に手を置
いてきた。

「なんか知らんが、当分こもるんだってな。その前に、挨拶をと思
つて」

そう言つて、笑う。

おお、俄然やる気が湧いてきた。

「ええ。行ってくるわね、魔理沙」

「ああ、行つてこい」

笑顔で、挨拶を交わす。

がっしりと握手をして、それから、俺は扉をくぐった。

背後で、扉の閉まる音がする。頑張れよ、と魔理沙が言った気がした。

扉が閉まったのを見届けた魔理沙は、目をこすりながら振り返る。

「ああ、目が痛いぜ。しかしなんだって霊夢は、こんな部屋にこもるんだ？」

「秘密、よ」

魔理沙の言葉に、パチュリーは口元に人差し指を当てて答えた。

そうか、とだけ言って、魔理沙はテーブルに近づき、椅子を引いて座った。

「私にも紅茶をくれ」

「…はい」

ぱつと、一瞬のうちに湯気をあげるカップが魔理沙の前に現れた。ありがとな、と礼を言う魔理沙を、レミリアは紅茶を飲みながら見て、それから、ふと思いついたように口を開いた。

「そういえば、最近湖に氷精の姿を見ないわね。少し前まで、妖精

と一緒に飛び回ってるのを、テラスからよく見かけたのに」

この場合の最近とは、数ヶ月前のことを指すのだが。
ふむ、そっぴや、ここに来る時も出会わなかったな。いや、出会い
たくないがな、と魔理沙が言う。

「出会いたくない？冬だから？」

と聞き返すパチュリーに、魔理沙はこの間あった出来事を話し始め
た……。

「ほえー」

思わず、口が開きっぱなしになる。

扉が閉まると、そこはもう完全な紅の世界だった。

「レミリアお嬢様たちの気が感じ取れなくなりましたね」

と美鈴が言うのに、力を探してみると、確かに感じられなかった。
ご丁寧こんなところまで再現されてるのか。といっても、パチュ
リーは知らずにやったのだろうか。

美鈴と一緒に、まずは扉付近を歩き回る。
なんだかたくさん扉があった。紅くてよくわからないけれど。

「ここが、トイレか」

「ここはお風呂ですね」

「ここが寝室らしい」

（風呂か…あ、美鈴と二人きりで入るのか。となるとこの寝室も美鈴と同じベッドで眠る…）

「あ、こっちは厨房と食堂です。……あれ？なんか寒気がする」
「食糧庫もあるな」

「……で」

声がハモった。

「この、だだっ広い空間が……修行のための空間というわけのようですね……」

美鈴が、感慨深げに言う。

パチュリーは地平線が見えるくらいに広いだなんて言っていたが、正直紅くて地平線なんて見えない。

というか、目が痛い……修行以前の問題だぞ、これは。
すたすたと歩いていって、この居住区と修行の場の境目の前で立ち止まる。

「確かに気温は……うん、感じられないな。夏みたいに暑いわけでもなく、冬みたいに寒いわけでもない」

「かといって、春のように暖かいわけでもないですねー」

美鈴が隣に来た。

一瞬その顔を見てから、前を見る。

「さて、行きますか」

「はい！」

美鈴が返事を返すのと同じ時、俺は記念すべき第一步を踏み出し……重力に潰された。

背中から全身にかけて、ずどんと重圧がのしかかってきて、それに負けて倒れてしまったのだ。

「だ、だいじょう…むっ!？」

俺に駆け寄ろうとしてこっちに来たのか、美鈴の声が途中で途切れ

た。
俺はというと、地面に打ってしまった鼻を手で押さえようとして、しかし中々手があがらないのに苛ついていた。

あああもどかしい！

「こ、れは………凄い……!」

きつそうに、美鈴が言う。

ああ、確かにこれはきつい。本当に修行以前の問題だよこれ！
…… ああもう面倒くせえ。

「だっ!！」

気合の声とともに、ボシユウーと靈力を噴出させる。

澄んだ白い光が俺の体に纏わりつき、炎のように揺らめいた。

「うっし」

とん、と腕だけで跳ね上がり、空中で後転して着地する。

半分ほど力を開放すれば、何とかここまで動けるようになった。

ふと、美鈴の方を見ると、俺と同じように気を開放して、ようやく動けるようになっていた。

…へえ、美鈴の気も結構大きいじゃないか。

澄んだ黄色い気を纏った美鈴が、構えながらゆっくりとこちらを向いた。

「では、さっそく行きますよ。実は最近体を動かしてなくて…うずうずしてたんです」

よし、と俺も構えて、美鈴の方に体を向ける。

手にじんわりと汗がでていた。

なんというか、俺もうずうずするというか…。

ああ、そういえば。

「私なんの稽古をつけて欲しいかわかってる？」

「へ？あ、ええ、まあ。私が教えられることといったら…体捌きとか拳法とか、気の扱いとか、そういうのしかありませんし…」。

そういったことしか教えられませんか。ですから、こうしてさっそく…ああ、まずは予定を決めたほうがいいでしょうか。

…うーん、最初の三日はとりあえず環境に慣れながら組手をするとして、残りは…おいおい考えると思います」

ちょっと聞いたら長々と答えが返ってきた。

うん、まあ。そこらへん考えるのも修行のうち、なのかな。
まあいい。

「では、よろしくおねがいします」
「…よろしく」

美鈴が構えたまま言ってきたので、俺も短く返した。挨拶は大事だよね。
地を蹴って、突っ込む。今のところ、戦法はそのひとつだ。
さて……どうなるか。

俺の拳が美鈴の腹に突きたった。
瞬間、世界が反転した。

「あ……あまりに早いから本気で叩きつけちゃった……」

紅く染まっていく意識の中で、そんな声が聞こえた。

超修行な閑話4（後書き）

霊夢を強化せねばこの世界は終わりだ！
…
っていうね。

修行の成果な閑話5（前書き）

時間がかっちゃった。次話から妖々夢！。

修行の成果な閑話5

「咲夜と打ち合わせてみて、わかったことがあるの。まあ、仕組みを言っても理解できないだろうから簡潔に言うわ。

ナイフを媒体に、咲夜的能力を長く継続させられるようになったから、次からは四十八日おきに出てきてちょうだい。

その時にナイフに術をかけなおして、ついでに咲夜を休ませるから。ああそう、出てきたときに私がいなかったら小悪魔に頼んでね」

パチュリーに言われたとおり、七日経って、精神と時の部屋から出てみると、扉の前に立っていたパチュリーにそんなことを言われた。俺は美鈴と顔を合わせて、それから、パチュリーがナイフに術をかけ、咲夜が休む一時間の間たむろしてから、再び精神と時の部屋に入った。

四十八日後。部屋の外では実質四十八時間、つまり二日程しか経っていないが、体感で四十八日後。

俺たちは部屋の外に出た。

部屋の前にあるテーブルに座っていたのは、咲夜と小悪魔だけだった。

魔理沙は「パチュリーはどこにいるの？」と聞くと、小悪魔が答えて、

「パチュリー様は魔理沙さんと一緒に研究室にこもっています。何やら『命の雫』を作るんだと意気込んでました」

何よそのいかにも復活系なアイテム名は、と俺が呆れていると、咲夜が話しかけてきた。

「こんにちは。久しぶりと言った方がいいのかしら？え？ああ、この時間は休憩時間になっちゃったから、ここで休んでるのよ。私はいいつて言ったんだけど、お嬢様が聞かなくて。」

そうそう、美鈴。門番隊は頑張ってくれてるわよ」

再び精神と時の部屋に入り、四十八日後。

こちらに戻った俺たちを待っていたのは、レミリアと咲夜、小悪魔だった。

「久しぶり、になるのかしら。こんばんは、霊夢。修行ははかどってる？」

優雅に紅茶を飲んで、熱かったのか、思い切り顔を顰めながらレミリアが言う。

いつか同じようなことを聞いた気がするのは気のせいだろうか。てきとうに腕を振って返すと、今度は咲夜が話しかけてくる。

「中にはもう慣れてたかしら？あ、そうそう。衣装室の二番目のタンス、中に入ってる衣服は自由に使っていていいわよ」

いや、衣服って…全部メイドが着るような服だったじゃないの。しかも、スカートの丈がやけに短い。

まあ、美鈴に着せて楽しむのには使えそうね。俺は着ないけど。そんなことを考えていると小悪魔がやってきたので、魔理沙とパチユリーがどこにいるのかを聞いてみた。

「お二人とも、相変わらず研究室にこもっています。ああ、パチュリー様から伝言を預かってますよ。」

『いちいち外に出なくてもいいようにした。存分にこまれ』とのことですので、はい。これ、追加の食料です」

美鈴が食料の入った袋を受け取る。

それにしても、存分に、か。どういう原理でいつまでも入れるようにしたのかはわからないけど、これで修行に熱をいれられるってものね。

きっかり一時間。咲夜が仕事に戻るのに合わせて、再び俺たちは時の部屋に入った。

二百十四日後。前と合わせてちょうど一年経って、私たちは外に出た。

随分長いこともっていたけれど、部屋の外では、えっと……通算で十五日程しか経っていないのか。

テーブルにはレミリアがついていて、ちょうど食事を運んできた咲夜が現れた。

「何、私はここで本を読んでいただけさ」

聞いてもないのにそんなことを言うレミリアを無視して、レミリアの前に皿を並べる咲夜に話しかけた。

「パチュリー様と魔理沙？まだこもってるわよ。ご飯を持ってかないと…。あ、あなたたちは、夕飯はもう済ませたの？」

残念ながら、もう済ませている。

そう、と言って、咲夜は姿を消した。気を探っても咲夜も魔理沙もパチュリーのも感じられないのを見るに、どこか特別なところにいるのだろう。

ああ、魔理沙に会いたいわ…。

「あ、出てきたんですか、お久しぶりです。ちょっと、こちらにいらしてください。あ、美鈴様は結構ですよ」

一人で手を合わせてもじもじしたりなんかしていると、小悪魔がやってきて、そう言った。

俺だけ？なんで？

しきりに首をかしげながらついていくと、少しひらいた所に出た。

小悪魔は、そこで止まってください、と言って、いつのまにやら持っていた黒板を掲げながら、離れたところに立って俺の方を向いた。

黒板には、色々な色のチョークで『■』が描かれていた。
青、黄色、茶色…。

小悪魔は、これを俺に見せて一体何がしたいのかしら。

「そこから見える色を言うてくださいーい！」

しっぱを揺らせつつ小悪魔が言うので、逐一あげていく。
すると、あー、パチュリー様が言ったとおりですー、と黒板をおろ

して、俺の所へきた。

小悪魔曰く、今は色の識別検査で、俺は紅を認識しづらくなってしまっているらしい。

いや、ここの壁の色が原因でしょ、それ。

もしまだあの部屋に入るつもりでしたら、これをお持ちください。パチュリー様の作った目薬です。

一日一度、必ず使ってくださいね。と、目薬を渡された。

もちろん、まだ入るつもりだったので、ありがたく頂戴する。

その日は、時の部屋に入らず、前に使っていた部屋で眠った。

翌日、図書館に直行する。

そして、図書館で美鈴と落ち合い、時の部屋へ。

扉の前に、レミリアがいた。

眠たげに目をこすりながら、「私も修行を手伝うわ」なんて言う。

まあ、多くても困りはしないでしょう、と扉に手をかけて開けようとすると、

大きな気がひとつ飛んできた。

本棚の合間を、一直線に飛んでくるのは、フランドール。

すたっ！とおり立ったかと思えば、走り寄ってきて、私も入る！と言った。

「いいんじゃないですか？」

と美鈴。

そこに小悪魔がきて、

「あのー…えっと、パチュリー様が仰っていたのですが、その部屋、三人までしか入れないんです。」

容量がどうかで…」

なんと、と驚く俺。えー、と不満の声をあげる姉妹。と、美鈴が俺の肩に手を置いた。

「私は、門に戻ることにします。教えられることは全て教えましたし、次に霊夢さんが知らなければならぬのは、一対多の戦いでの対処です。」

お嬢様方ならば悪魔も召喚できますし、うってつけでしょう。…中で召喚はできますよね？」

「あ、はい。できると思います」

全部教えてた、って、まだ拳法習ってないんだけど。いや、まあ、いいか。体捌きは教えてもらったし。

それに、多数相手に暴れまわるのもいいかもしれないわね。

一対多の場合、身体強化のみで、気功波は使わないように。修行になりませんからね、と言い残して美鈴が行ってしまったので、扉に手をかけて開けようとすると、今度は咲夜が現れた。

「あら、入るの？その前にご飯を食べていきなさいな。お嬢様方も」
「いただきます！」

「わっ！びつくりした、美鈴、行ったんじゃなかったの…」

いきなり背後に現れた美鈴にびつくりする。

気を消してくるものだから、全然気付けなかった。俺もまだまだ修行が足りないのね。

俺たちは、食堂に向かった。

「おいひい！こんなおいひいの、久しぶりです！！」

口いっぱいにご飯を詰め込んで言う美鈴に、同じくご飯をかきこみながら、うんうんとうなずいた。

「…そんなに？霊夢も美鈴も、料理はできるでしょう？」

若干引き気味の咲夜に、首を振ってみせる。

「いや、私は料理はあんまり…。だから毎回美鈴に料理を作ってもらってたんだけど…」

「流石に毎日中華料理だと、飽きてしまうようで…」

「うん、美味しいんだけど、三食中華は流石に、ねえ。」

ああ、咲夜の洋食も美味しいけど、魔理沙の作る和食が食べたいわ！。

あ、そういえば魔理沙はどこにいるの？」

「まだ、パチュリー様の研究室に」

「まだ！？一体どれだけこもる気なのよ…」

ため息をついて、項垂れる。

そうやって時間は過ぎていき、すぐにまた、時の部屋に入ることになった。

外で十五日、中で一年経った頃、俺たちは外に出た。

扉の前には、小悪魔に咲夜にパチユリー、そして、魔理沙がいた。

「魔理沙！」

二年ぶりに魔理沙の顔を見た途端、懐かしさが胸にこみあげてきて、俺は魔理沙に駆け寄っていた。

魔理沙は椅子から立ち上がって、

「おお霊夢、ひと月ぶりだな。……おい霊夢、お前…背、伸びたか？それにその髪、どうしたんだ」

軽く俺を見上げて言う魔理沙に俺は、「ああ、これ？」と肘程までのびた髪をかきあげてみせた。

この二年で随分のびた髪は、先の方で纏めて、てきとうな布で縛つてある。

縛った理由は、のびるにつれて、動く際に鬱陶しく感じるようになったからだ。

「お帰りなさいレミィ、妹様。一年ぶりね。霊夢、あなたとは二年ぶりに会うことになるのかしら」

これで紫色の髪だったら旧作の霊夢ねー、と考えていると、パチユリーが立ち上がって、そう言った。

「一年？二年、だって？おい、どういふことが説明しろよパチュリィ。訳がわからんぜ」

魔理沙の疑問の声に、パチュリーが短く、説明するわ、と言いつのを聞いていると、両脇にレミリアとフランがやって来た。二人揃ってぐつとのびをして、声を揃えて咲夜を呼ぶ。

「お久しぶりです。お嬢様方」

椅子から立ち上がって、俺たちの前に立った咲夜が恭しく頭を下げた。

レミリアは軽く手をあげてみせ、

「久しぶりね、咲夜。さっそくだけど紅茶を淹れてちょうだい」

「さくやー、私は血のジュースが飲みたいー」

咲夜はもう一度頭をさげて、「すぐお持ちします」と言っで、姿を消した。

と思えば、真後ろに咲夜の気が現れる。

俺との修行で気を明確に感じられるようになったレミリアとフランも気が付いたようで、

咲夜が何かを言っ前に振り返った。

「…咲夜、驚かそうとしたでしょ」

半眼で睨むレミリアに、いえ、そんなことは…、と若干驚いたように咲夜が言う。

咲夜の手にはお盆があり、ポットとカップ、グラスと、それに湯のみが乗っていた。

お、懐かしきマイ湯のみだ。神社から持ってきてくれたんだ。

「ありがとう」

レミリアにカップ、フランにグラスを渡した咲夜は、最後に俺に湯のみを渡してくれた。

時の部屋の中には紅茶しかなくて、緑茶に飢えてたところだ。

はやくあの味を味わいたくて、すぐに湯のみに口をつけ、背をそらす勢いで一気にかたむける。

やわらかな液体がのどを通り、胸に熱いものが流れていく感覚に、ほう、と息をはいて、

口の中に残るミルクの余韻にひた……紅茶だこれ。

湯のみに紅茶って……と湯のみの中に目を落とす。

あ、ちよつと残ってる。

口につけて、くい、と軽やかたむけ、流れてくる三、四滴程の紅茶を、突き出した舌に受けた。

わざとらしくのどを鳴らしてのむ。昨夜に向けたちよつとした訴えだ。

体が温まってくるのを感じて、湯のみをおろし、頭を振る。

長い髪が左右に揺れて風を生んだ。あー、涼しい。

一瞬、レミリアとフランと何やら楽しげに話している咲夜に目を向けて、すぐに逸らす。

視線の先に、パチュリーと会話する魔理沙の横顔を捉えた。

椅子の半ばに腰をかけて、テーブルに両方の腕を載せて身を乗り出して、真剣な表情の魔理沙。

ああ、本当に懐かしい。二年も会ってなかったんだもの、当然よね。自身のほほに右手を当てて、恋をした少女のように魔理沙に見惚れ

る。

こうして見てみると、魔理沙はやっぱり……かわいい。

夢の中で会った魔理沙よりも、幾度も想像した魔理沙よりも、ずっと。

…そういや、あれね、と魔理沙を見ていて気が付いた。

なんだか、魔理沙がちっちゃく見えることに。

なんとなしに振り返って、時の部屋の扉を見て、ああ、と呟く。

そうか、まあ、当然よね。

魔理沙はひと月分しか成長していなくとも、俺は二年分も成長してるんだものね。

そりゃあ、身長に差は出るし、体型も、そう。

俺は、複雑な気分で魔理沙を見やりながら、自分の膨らみかけの胸に手を当てた。

「霊夢」

やることがないので、時の部屋への扉に背を預けて俯き、修行の内容を繰り返し思い描いていると、声をかけられた。ゆっくりと顔をあげ、それが誰なのかを確認する。

「…ああ、パチュリー。なによ」

パチュリーは胸に本を抱きながら、俺の目を覗き込んでいた。薄紫色の瞳が、何だか不思議な光を放っていた。

「霊夢。あなたの力がどれ程のものになったかを、私に見せてくれないかしら？」

……うん？どういう意味？そのまんまの意味かしら。

「えっと、つまり……私と戦いたいのか？」

あんたも案外戦闘好きなのねー、と笑いかけると、あからさまに呆れられた。溜め息のおまけまでつけて。

「どうしてそうなるのよ……。美鈴を呼ぶから、これから庭に行つて、模擬戦をしてちょうだい。」

思いっきりの力だよ。結界を張るから、何も心配はしなくていいわ」

ふーん、と気のない返事をして、跳ねるように扉から背を離す。

うん、まあ。それならバッチコイだね。ずっと、思い切り体を動かしたいと思ってたし、

美鈴に俺がどれだけパワーアップしたのかも見せてやりたい。

「じゃあ、庭に行つて待つてるわ」

予定が決まれば、後は行動に移すのみ。

俺は、パチュリーの横を通つて、図書館の出口を目指した。

たまには歩いていくのも悪くない、なんてね。

天上に、どこまでも広がる青い空。

外の世界では味わうことのできない、澄んだ空気。

入念に手を入れられた芝生が、靴越しに足の裏をくすぐるのが心地いい。

背後に紅魔館が目にくく建つ前で、俺は、頭の後ろに回した左手で空へののばした右の二の腕を掴んで、ぐぐーっとのびをした。

「あー、空気が美味しい！」

久しぶりの自然に、久しぶりの紅以外の色に、そして、その解放感に、くはー！と息をはいた。

僅かに白んだ息が口元から旅立って、大気へと溶け込んでいく。

冬の日の寒さも、ふく風の冷たさも、何もかもが気持ちよかった。

久々に感じる気温。十倍も軽い体。降り注ぐ、魔法の光とは違う太陽のきらめき。

ぐつと腰を落として屈伸し、足を伸ばす。

準備体操をして、体をほぐす。

後ろの、上の方にレミリアと咲夜の気が出てきた。

テラスから観戦でもするのだろうか。

そこに、パチュリーの気も加わる。

振り返らずにそこまで知った俺は、美鈴の登場を待った。

美鈴は気を消しているらしく、どこにいるのかはわからない。

……いやまあ、門にいるのだろうけど。

準備体操を終える頃に、テラスに魔理沙の気が加わった。

と同時に、よくわからない魔術的な結界が、門を含めた紅魔館全体を覆いこんだ。

気配遮断やら吸収術式やらの効果があるらしいのを、何となく悟る。

手を揉み合わせたり、爪先で地をとんと叩いて靴の具合を整えたりして時間を潰していると、美鈴がやって来た。

柔和な笑顔の端に、戦闘を心待ちにしているのが見て取れる。

俺も口の端を吊り上げて、笑みを浮かべた。

俺の前、十五歩分程離れたところに止まった美鈴が腰を落として構えたので、

俺も同じように腰を落とし、半身の構えを取った。

「修行の成果を見せます。行きますよ！」

はやる気持ちにおされて、間を置かずにそう言う。

「はい！来てください、霊夢さん！」

嬉しそうに、美鈴が返してくれた。

風がふく。長く垂れる俺の袖がばたばたとたなびくのが、合図だった。

同時に地を蹴って飛ぶ。上空で対峙し、すぐにアクションを起こす。腰にすりつけるようにして肘を引き、気を爆発させるようにして一瞬で接近、拳を振り抜く。

握った拳に肉を打つ感触が伝わると、美鈴が身体をくの字に折って吹き飛んでいく。

よし、先手はもらった！

今の一撃、俺の姿を目で追えたのは殴られた当人である美鈴だけだ

ろっ。

だから、俺のパンチが腹に入る瞬間に気を張って防御をした。衝撃は防げなくて、ああやって吹き飛んでいるみたいだね。ひらり、と目の前に舞った美鈴の中華帽を掴んで、かぶる。

向こうの方で、中空で身を丸めて後転した美鈴がその場に止まって、ニイ、と笑うのが見えた。

また風がふいて、髪がなびく。前髪が揺れて、目にかかった。気にせず両肘を腰に当て、全身に力を入れる。

「はぁあああああ！！」

ボシウツ！と、俺から光が噴出して、激しく揺らめいた。体の芯から、堰を切ったように溢れ出してくる力。

それがどんだん外に出て、俺に纏わりつき、溜まっていく。

ゴオオオ、と大きめの音と共に光が足元から俺を包み込んで、巻き上がる。

俺が更に力を入れるために中腰になるのに対して、美鈴は腰に両肘をくっつけたまま仁王立ちのようにして、

黄金の光を噴出させ始めていた。

気溜め。

言葉のとおり、気を溜めることだ。まあ、俺は溜めているのは霊力だけど、美鈴は文字通り気を溜めている。

初めて美鈴と時の部屋に入った時、美鈴がいの一番に教えてくれたのが、『気を溜めること』だった。

組手をしたあとに美鈴は、俺の戦闘スタイルを指して『気力消費型』と言った。

『霊夢さんは、どの行動…弾幕を張るにしても、攻撃にしても防御

にしても、私の攻撃を避ける時でさえ、靈力を使ってるんです。空を飛ぶのは、能力ゆえに消費は無いみたいですけどね。で、そんな靈夢さんにぴったりの戦い方があるんです』

そう言つて、氣溜めを教えてくれた。

最初に氣を溜めておくことで、あらゆる行動に瞬時に多量の靈力を使えるようにするために。

そついや、俺が戦い方を参考にしている人たちの出てくるゲームでも、殆ど全ての行動に氣力が必要で、勝負が始まったらまず氣溜めをしていたつけ。

靈夢になる前のことを思い出して納得した俺は、その日からまず最初に氣溜め

クン、と斜め前に体を倒して前屈みになり、屈伸する。

それから勢い良く両足を突き出して空氣を蹴り、光を纏つて尾を引きながら美鈴へと飛ぶ。

氣溜めを中断して俺を向かい討とうとする美鈴の真ん前で方向轉換、速度をあげ、弧を描くように背後に回り込む。

まだ反応できず、向こうを向いている美鈴の背に、重い拳を叩き込んだ。

衝撃に背をそらし、一瞬動きを止める美鈴に追撃をしていく。

ちよつと上昇して首筋に三度蹴りを繰り返し、よろめく美鈴の横合いに刈り取るような蹴りを放つ。

俺の足は、美鈴が咄嗟に出した腕に阻まれたが、それこそが俺の狙いだった。

美鈴の腕に足の甲を引っ掛けて、足を振り抜く。そうすると、美鈴は自分の腕に引っ張られて振り向くしかない。

空中で右にステップを踏んで再び美鈴の背後を取り、しゃがんで足払い。

シャ！と美鈴の姿が消えた。攻撃を見切られてしまったのだ。

美鈴の気が自分の後ろに回り込んで来たのを理解した瞬間に対応しようとして振り向くが、それは悪手だった。

どっ！と内にこもる衝撃。目の前に光が散って、がくんと前に頭が行くと同時に、反射のようにのびた両足が前に出る。

美鈴の拳が、俺の腹に突きたっていた。

肺から空気が、漏れ出るついでに、呻きを漏らす。

思考が途切れた瞬間に、右ほほに衝撃。左に伸びて千切れそうになる首に体を持っていかれて、左にかたむく。

視界の端に、組んだ両手を振り上げる美鈴の姿が見えた。

気で強化された拳による打ちおろし。

こちらにも靈力を纏って防御力を大幅に強化しているというのに、意識が飛びそうになった。

頭から地面へと突っ込む。

思わず目をつぶっていた俺の真下に美鈴の気が見れた。

再び腹に衝撃。見開いた目に、こちらにぴんとのびて俺の腹に刺さる美鈴の足が見えた。

背をぶち抜かれそうな衝撃に、もう吐ききった空気を吐き出そうとして口を開けた。

視界が揺れる。

地に向かう衝撃を緩和されて一瞬浮き上がる俺の腹から美鈴が足を引いたので、どうにか後退しようとする。

両手が、腹を庇うかのように自然にのびていた。

「…！？」

瞬きもしない間に、美鈴の不敵な笑顔が目の前に来ていた。ゆっく

りと下を見ると、軽く肘を曲げた美鈴の両手の平が

俺の腹に差し向けられているのが見えた。

手の平の前に、黄色に光る小さな光弾。

それがぷくーっと膨れ上がってきて、ついには俺が、腹に胸に太ももに密着してくるそれを抱え込んでしまうまでに成長した瞬間、爆発を起こした。

轟音が耳を貫く前に、衝撃に吹き飛ばされる。

が、何とか体勢を保つことには成功していた。

片目を見開いて煙の上がる前方を睨みつけながら、両側に広げ、肘を曲げている腕にも、

太ももを上げ、もう片方は軽く膝を曲げている足にも意識はやらす、ただ、もう真下にあった地面に片足を擦り付けて数秒、勢いが無くなってきた時にもう片方の足も地面に下ろし、しっかりと立つ。

ああ、また巫女服がボロボロ。…まあ、いいか。

地面を抉った痕が、地に立った美鈴の元まで続いていくのを見ながら、胸元に手をかけて、煙を上げる巫女服を破り捨てる。

防具下着などつけていなかったから、薄びんく色の肌着があらわになった。

気にせず、右の二の腕に括りつけられた袖の、赤い紐を解いて袖を落とし、もう反対の袖も同じようにする。

けほ、と咳をすると、口から煙が出た。うわ、ギャグっぽい。

手を後ろに回して、髪の手で結ばれている布が無事なのを確認してから、両腕を広げるように、

軽く曲げた手は上にして構えた。

「さすがです、霊夢さん。結構力を込めたつもりだったんですけど……相変わらずのタフさですねー」

驚いているような声とは裏腹に、変わらず戦闘を求める笑顔。

たしかに、美鈴の重い拳も光弾も、俺に大したダメージを与えられてはいない。

……痛かったけど。
でも、それは。

「美鈴が手加減してるからよ。全然本気でやってないでしょ」

「それでも、ですよ。少なからずダメージが通ると思ったんですけどね……。それに、霊夢さんも本気じゃないでしょう?」

その言葉に、ふっと笑みを零す。

やっぱりわかつちゃうか、本気じゃないってこと。

「でもね、驚いたわよ。私もあの部屋で相当修行したつもりだったんだけど」

「驚くのはまだ早いですよ。……お互い、本気でいきましょう」

「いいの?一年前よりも、ずっと強くなってるのよ?私」

「門番を舐めないでくださいよ」

「……そうね。本気を出さないなんて、悪いわよね。……じゃあ!」

言うが早いか、ぐっと拳を握り、足を開いて半腰になる。

「はぁああああ!」

声が、反響する。気が巻き上がり、どんどんでかくなっていく。どお!と、俺を中心に風が吹き荒れた。

体中に、気が充実する。全力全開、MAXパワーだ。

「さあ、第二ラウンド始めっか」

ちよつとおちやらけて行つてみると、美鈴は笑つて、それから、顔の前で腕を交差させ、

「だッ！！」

気合の声と共に振り下ろした。

突風が襲いかかってくる。

先ほどとは比べ物にならない程の気の大きさ。

…さすが、美鈴。さすが、気を使う程度の能力の持ち主。

超化もお手のものと言つわけか。

しかし、この気の量…。最後に別れた時よりも、ずっとずっと大きくなつてゐる。

美鈴も成長しているということか。

けどまだ、俺の方が強い！！

地を抉る勢いで、前に飛び出す。

勢いをつけて美鈴のあごを蹴り上げ、追撃のために右腕を振り上げる。

と、美鈴が気を噴出させて半身を起こし、そのまま急襲してきた。

左のほほを打たれ、次いで浮遊感。世界がかたむいていく。

足払いを受けたと理解したときには、俺は右腕を振っていた。

「むっ！」

パン、と、俺の腕が美鈴の足を打つ音が響く。

美鈴の体がぐらりとかたむいて、俺の前に並んだ。

俺は右手を地につけて、空を飛ぶ要領で体を回転させ、遠心力の乗った蹴りを美鈴へと放った。

それを美鈴は、手で地面を叩いて跳ねることで躲し、くるくると回転しながら俺の上を通つて、俺の背後に体勢を整えて着地した。

咄嗟に右手のバネで空中を転がるように跳ねてその場から離脱する。回転する視界に数瞬前まで俺がいた空間を蹴り上げる美鈴の姿を捉え、くるくると回るままいくつか光弾を飛ばした。

全て弾かれたの感覚で知って、ずだん、と着地する。

ぶんと腕を振ってさらに光弾を飛ばす。美鈴は恐らくまだ体勢を整えられていないはずだ。

なら、弾くはず！

「せつ！」

硬質な音をたてて、俺の読み通り霊力弾を弾く美鈴。

その隙に接近し、全力のボディーブローを放つ！

バツ！と美鈴が腰を落とし、片腕だけで防御体勢をとった。

このままぶち抜いてやる！

気合を込めて腕を振り抜く。美鈴の腕に俺の拳が当たり、美鈴がふきと……いや、違う！手応えがおかしい！

思う間に、勢いをつけすぎて前に出る俺の前に、気でブーストして地面に両足をつけたまま後方にさがっていく美鈴が、未だ防御の体勢でいた。

「くっ！」

あまりに勢いをつけすぎたために後には引けないので、こちらも両足を地にすりつけつつ、

砂埃をあげて前進しながら素早いラッシュを繰り出す。

美鈴が、動いた。

俺の拳をいなしていなし、手の甲で払う。時には半身をそらし、時には牽制の攻撃をしてくる。

焦って繰り出したパンチを、バシン！と手の平で受けられた。

これは…！

最初から動いていなかったかのように、美鈴が急停止したので、慌てて止まろうとした俺はつんのめってしまった。

踏みとどまる、一瞬。動きの止まる一瞬に、美鈴の一撃が迫った。

これは……カウンター技！！

そんなもの、食らってたまるか！

能力を発動させて、後ろに『飛ぶ』。慣性に縛られない飛行。

背後に開いた、亜空間につながる穴に背から飛び込むと同時に、拳を振り抜いている美鈴の背後に開いた亜空穴から飛び出て、まっすぐに蹴り飛ばす。

それだけで終わらずに、再び前方に開いた亜空穴に飛び込み、美鈴の前に出る。

俺に向かって吹き飛んでくる美鈴の腹に膝を叩き込み、瞬時に練り上げた霊力を美鈴に差し向けた両手から放出する。

光に飲み込んで、弾かれたように再び吹き飛んでいく美鈴を見送って、肩で息をした。

はー、はー、と呼吸をするたびに肩が上下して、それがむず痒く思えて肩を回した。

しゃがむようにして手と足で地面をすって止まった美鈴が、今は…！？と驚いたように言う。

…今のは。

今のは、俺の能力による技だ。

時の部屋の中で修行していて、記憶を探って霊夢の技を思い出そうとしていた時に、この技を思い出したのだ。

亜空穴。たしか緋想天とか、非想天則とかで使用していた技のはず。亜空間につながる穴つばいのを作って中に入り、ほぼ零秒で別の場所に移動できる、いわば瞬間移動。

かつて読んだり見たりしてきた二次創作でも、霊夢は頻繁にこの技を使っていた気がする。

『いつのまにか霊夢が後ろにいた』だとか、『ふと気が付けば、霊夢はいなくなっていた』みたいな感じで。

こういう原理かは自分でもよくわからないが、あそこに行きたいなー、と考えて動くと、自動で穴が開いて、そこに移動できていたりする。

なんというかもう、得意技になってしまった。

地を蹴り前に飛んで、亜空穴を使って美鈴の目前へ。

両手を軽くあげてみせると、それだけで理解してくれたらしくぐさま組みかかってきた。

恋人のように指を絡めて、手を組み合う。

二の腕にめいっばい力をいれて、押す。

すると美鈴も負けじと押し返してきた。

ギシギシと肩甲骨が軋む。知らず、笑みを浮かべて纏う光を揺らめかす。

黄金の気と白い霊力が混ざり合い、次の瞬間、俺と美鈴の足元が陥没して地に亀裂が走り、もりあがった。

溢れ出して衝撃波を巻き起こす気に持ち上げられた土の塊や草やらが、そのまま渦を巻いて巻きあがったり、飛び散ったりしていく。

「ぬ……ぎ、ぎ………！」

「ぬ……ぐ………！」

さらに、地面が陥没した。

地面が激しく揺れ、しかし、俺たちは揺るがない。

ピシピシ、と、何かに亀裂の入る音が聞こえた。

「もういい！！そこまでよ！！」

パチュリーの怒声が聞こえてきて、俺たちは即座に間合いを取った。地に降り立つと、顔を青くしたパチュリーがおりてくる。

「あなたの、あなたたちの強さは……よくわかったわ。だからもう、やめにしてちょうだい……。結界が壊れそうだし、そもそも庭が…」

あ、と声を漏らして、周りを見る。

俺たちの戦闘の余波で、庭は滅茶苦茶になっていた。

「す、すみません…興奮してしまっ…」

と、美鈴のしよげた声が聞こえて、俺も頂垂れた。

「今朝の霊夢、凄かったなー」

時は進んで、夜。

広い浴場で、桶で体にお湯をかけていると、後ろで同じようにお湯をかぶっている魔理沙がそう言ってきた。

魔理沙にそう言われると、なんだか嬉しくなつて、でもそれを表面には表さずに、「そう」、とだけ、すまして言う。

それから、片膝をついたまま身をひねって、ちらりと魔理沙を見やる。

白い背中が見えた。綺麗な肌。

どうしてこう、魔理沙って綺麗なんだろうか。

お湯に濡れた金髪が肌に張り付くのがやけに扇情的に見えるのに、ちよっと恥ずかしくなつて目を逸らした。

すぐに戻したけど。

「にしても霊夢、髪、長くなったなー。パチュリーから聞いたよ、二年もあそこにこもったんだって」

魔理沙が俺に振り返って、笑みを浮かべながら言う。

濡れた髪を、手で持ちあげる。

「そう、それだ」

魔理沙が、ずいとしを寄せてきた。

俺の髪を手にとって、弄る。

魔理沙が何やら俺の髪について喋るのだが、俺は、魔理沙の肌に目

が釘付けになつて、聞くどころではなかった。

近くにいるだけで、鼓動が激しくなる。

熱い湯のせいだけではないほほの赤らみが、湯気で隠れるのがせめてもの救いだつた。

いや、こんなに近いと意味がないのだろうか。

自然、魔理沙の、その……胸に、目が行く。発展途上の膨らみを目にいれ……目を見開いた。

それから、ぺたぺたと自分の胸を触る。

あ、あれ？あれ……？

「ん？どうした霊夢、痒いのか？」

いや、違って……、そうじゃなくて……。

「……お、もしかして」

にまあ、と、いやらしい笑みを浮かべる魔理沙。

ずずいと胸をそらして、これみよがしに見せつけながら勝ち誇つた笑いをあげる。

「はっはっは！どうやら、私のほうが大きいみたいだな！いやあ、参つたぜ！」

なにが『参つた』なのだろうか。

高笑いする魔理沙の胸は、発展途上……というか、先進国というか。俺の行き遅れたかのような発展途上と比べると、明らかに大きかつた。

おかしい。

それは、おかしい。

だって魔理沙はひと月分しか成長してなくて、『私』は二年分も成長してるのに！

何。

何よこれ。

格差社会なの？

なんで私のは大きくななんいのよ。

変な意地にほおを膨らませると、魔理沙の笑いが大きくなった。

「なによ、大して変わんないでしょ！」

そんな言葉が口を突く。

別に気にすることじゃない、大きくなったら動くのに邪魔だ、と理性が言うのに、感情がおさまらなかった。

「ふっ、少なくとも霊夢よりはでかいんだぜ？」

くっ、お、おのれ！

勝者の笑み。持つべきものの優越感。

そんな言葉が脳裏を過ぎる。

「先に湯船に行ってるぜ！」

「あ！待ちなさい、こら！！」

さっと立ち上がって素早く湯船へと向かう魔理沙を追うために、俺も立ち上がった。

思いつく限りの声をあげながら、追う。

追いつけば、湯を飛ばしながらじゃあって。

そんな風に、夜は更けていった。

「あー、くらくらする……」

「見事にのぼせたぜ……」

のぼせた俺たちは、そのままダウンすることになったのだった。

修行の成果な閑話5（後書き）

戦闘力！。

霊夢（気の扱い方を学んだので、効率のいい力の出し方ができるようになった）

戦闘力、（きりのいい数字にしたいので）通常300万↓超化50倍1億5千万

美鈴（一年間精神と時の部屋で霊夢と修行したので大幅パワーアップ）

戦闘力、通常200万↓超化50倍1億

なお、超化せずにMAXで出せる戦闘力は、通常の十倍。

そもそも超化ってなんだよ、と思ったあなた。

…… なんてしょうね。サイヤ人でもないのに。
でも超化。

なんかすつごく強くなる技みたいなもの。

さて、次話から妖々夢だ。ストーリーを考えないと。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0364q/>

霊夢の身体をぱくれいむ

2011年6月24日10時16分発行